

署ノ命令ヲ執行スルニ當リ暴行ヲ加ヘ毆傷シ且其目前ニ於テ侮辱シタル者ト判定シ刑法第三百三十九條第四百十條第三百一條第三項第四百一一條ヲ適用シ犯時十二歳以上十六歳未滿ナルヲ以テ刑法第八十條ニ依リ各本刑ニ二等ヲ減シ仍ホ數罪俱發ノ例ニ照シ刑法第三百三十九條ノ罪ヲ重シト爲シ重禁錮三月ニ處シ罰金五圓ヲ附加ストノ言渡ヲ爲シタリ

被告三宮寅備ハ右裁判ニ對シ上告ヲ爲シタリ其趣旨タルヤ原裁判所ハ被告ノ所爲ヲ以テ官吏其職務ヲ行フニ當リ暴行ヲ加ヘタル者トシ刑ヲ適施シタリト雖モ巡查北山仁三郎等カ懇親會ニ臨檢シ之ヲ制止セントシタルハ大阪府丙第九十八號布達ノ趣旨ヲ誤解スルニ因ルモノニシテ全ク其職務外ニ涉ル處置ナレハ官吏其職務ヲ以テ官署ノ命令ヲ執行スル場合ニアラサルヲ明白ナリ又其官吏ニ對シ暴行ヲ以テ抗拒シタルヲ更ニ之レナキ而已ナラス其暴行ノ證ト爲サレタル負

傷ナルモノハ醫師ノ鑑定書ニ心忪亢盛ト在ルヲ謂フナラン何リ心忪亢盛ヲ以テ負傷ト謂フヲ得ヘケンヤ且巡查ハ用ナキ者ナリ云々ノ言語ヲ發シタル覺之レナク更ニ一步ヲ讓リ發語セシ者ト假定スルモ之ヲ以テ侮辱ノ言語ト謂フヲ得サルハ多辨ヲ要セスヲ明ナリ然ルニ原裁判所カ被告事件ノ要點ニ付直接ノ關係ヲ有セサル景況書及不備ノ鑑定書等ヲ心證ニ資リ以テ有罪タルノ認定ヲ爲セシハ不當ノ最甚シキモノニシテ乃チ事實理由ノ齟齬及擬律ノ錯誤ニ係ル不法ノ裁判ナリト云フニ在リ

原裁判所檢事補宮崎多喜衛ハ上告論旨ニ對シ逐一之ヲ辨駁シ到底其効ナキモノト思量スル旨答辨セリ仍テ治罪法第四百二十五條ニ基キ立會檢事池上三郎ノ意見及被告代言人吉永聰ノ陳述ヲ聞キ判決スル左ノ如シ

本案上告ノ理由ハ分テ四個ナリトス其一ハ官吏其職務ヲ以テ官署ノ

官吏ノ職務ヲ行フテ妨害スル罪

命令ヲ執行スルノ場合ト謂フヲ得ストノ一其二ハ暴行ヲ以テ抗拒シタルニアラストノ一其三ハ心忤亢盛ヲ以テ負傷ト爲スヲ得ストノ一其四ハ侮辱トナルヘキ言語ヲ發シタル覺ナシトノ一是ナリ而シテ其第二第四ノ論點ハ專ラ原裁判所カ正當ノ証憑ニ據リ認定シタル事實ノ當否如何ニ涉ルヲ以テ上告ノ原由ト爲スヲ得ス何トナレハ諸般ノ証憑ヲ採擇シテ事實ヲ判定スルハ原裁判官ノ特有スル權内ニ屬シ越權ノ處分アラサル以上ハ輒ク其當否如何ニ論及スルヲ得サルナリ又大坂府丙第九十八號布達ノ趣旨ニ基キ懇親會ノ如キモ之ヲ制止スルハ警察官ノ職權内ナルヲ著明ナレハ其職務外ニ涉ル不當ノ處分ナリトノ論旨モ是亦採用スルニ由ナシト雖モ上告第三ノ理由ニ付訴訟書類ヲ鑿查スルニ原裁判所カ據テ以テ創傷ノ証ト爲シタルモノハ醫師ノ鑑定書ナリ而シテ其鑑定書ニ(外部異狀ナシ然ルニ心部ヲ聽診スルニ心忤亢盛ヲ認ム)云々ト在ル而已ニシテ其他創傷ヲ成シタリト

見ルニ足ルヘキ証佐一モアルヲナシ然ルニ何ヲ以テ負傷セシメタル者ト認定セシ歟抑モ法律ニ所謂創傷トハ身体ノ内部又ハ外部ヲ毀損スルノ謂ニシテ心忤亢盛ノ如キ内臟機關ノ作用其常度ヲ失ヒタルヲ謂フニ非サルナリ故ニ本件被告ハ官吏ヲ毆打シタルマテニシテ其毆打ニ因リ負傷セシメタルニ非サルヲ論テ俟タス而シテ其毆打ノ所爲ハ暴行ノ一手段ニシテ乃チ暴行ヲ以テ官吏ニ抗拒スルノ罪ヲ組成スル情狀タルニ過キサレハ必ス之ヲ別個ノ犯罪トシテ罰スルヲ要セサルナリ然ハ則チ原裁判所ニ於テ被告ハ官吏其職務ヲ行フニ當リ暴行ヲ以テ抗拒シ且言語ヲ以テ侮辱セシ者トシ刑法第三百三十九條第四百一條第八十條第百條ヲ適用シタルハ至當ナリト雖モ其毆打ノ所爲ヲ別罪ト爲シ刑法第四百十條及第三百一條第三項ニ照シ處斷セシハ畢竟創傷ノ義解ヲ誤リ爲メニ擬律ヲ錯誤シタル不法ノ裁判ニシテ則チ治罪法第四百十條第十項ニ當ル上告ノ原由有ルモノト判定ス

官吏ノ職務ヲ行フヲ妨害スル罪

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ基キ原裁判官言渡中毆打
創傷事件ニ係ル部分ヲ破毀シ之ヲ取消スモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十二月二十八日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 小村 壽太郎

判事 伴 正 臣 判事 薄 井龍之

判事 園 田 弘 書記 香 田 能 興

○囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

〔要領〕看守者ノ懈怠ノ罪ヲ成立セシメタル元素ヲ明示スルノ刑ニテ刑法
第一百五十條ヲ適用シタルハ罪ト爲ル可キ事實ノ理由ヲ明示セサ
ル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

北澤 綱二郎

年齢略之

明治十五年一月廿三日姫路輕罪裁判所カ右綱二郎ニ對シ囚徒ノ逃走
ヲ覺ラサル罪アリトシテ刑法第一百五十條ニ依リ罰金二圓ノ刑ニ處シ
タリ然ルニ綱二郎ニ於テハ其裁判ヲ不當ナリシト上告セシ其理由ノ
要領ハ懲役三年囚本庄榮三郎ノ舉動常ナラサルニ付注意ヲ加ヘ居リ
シニ突然路次口ヨリ逸出スルヲ認メ直チニ追跡セシニアレハ懈怠ニ
リ生シタルニ非ストノ趣旨ニアリ對手人檢事補河野通信ハ被告綱二
郎カ囚徒看守セシハ山林原野等ニテ外役セシ囚徒ヲ看守セシ比ニア
ラス周圍ニ墻壁ヲ施設シタル場ナレハ懈怠ニアラサレハ逸出スヘキ
所以ナシ囚テ原裁判ハ適當ナリト答辨セリ大審院檢事林三介ニ於テ
ハ姫路輕罪裁判所檢察官答辨ノ趣旨ヲ贊成シ原裁判當レリト陳述セ
リ茲ニ刑法第一百五十條治罪法第三百四條ニ照シ左ニ判決ス
原裁判官言渡シヲ閱スルニ被告ノ白狀ハ兵庫縣監獄姫路分署ノ照會書

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

ニ依リ被告人北澤綱二郎ハ明治十五年一月十五日播磨國飾東郡豐澤村ニ設置アル監獄分署ノ工業場ニ於テ看守ノ懈怠ニ依リ已決囚本庄榮三郎ノ逃走ヲ覺ラサリシヲ證ス云々トアリテ其斷罪證憑及ヒ法律ノ理由ハ之レヲ明示スルモ其事實ノ理由ニ至ツテハ之レヲ明示セス治罪法第三百四條ニ裁判所ニ於テ刑ノ言渡シヲ爲スニハ事實及法律ニ依リ其理由ヲ明示シ且一切ノ證憑ヲ明示ス可シ云々トアル法文ニ抵觸シタル不法ノ裁判所ナリト云ハサルヲ得ス何ントナレハ刑法第百五十條ハ看守又ハ護送者其懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル時云々トアリテ其懈怠タルヤ或ハ看守者睡眠喫食又ハ上廁等ニ因リ其注意ヲ怠タル如キノ元素ヨリ成立ナタル犯罪ヲ罰スヘキ法文ナレハ其成立ノ元素ヲ詳細明示セサルヲ得ス然ルチ原裁判此ノ要點ヲ缺キタルハ即チ上告人綱二郎ノ罪トナルヘキ事實ノ理由ヲ明示セサルモノナレハナリ右ノ理由ナルチ以テ治罪法第四百二十條ニ依リ原裁判ヲ破毀

シ適法ノ裁判ヲ受ケシムル爲メ神戸輕罪裁判所ニ移ス者也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十五年九月一日

裁判長判事 坂本正均 專任判事 鳥居斷三

判事 關義臣 同 山根秀介

同 昌谷千里 書記 澤野潛藏

〔要領〕事實ノ覆審ヲ請求スルノ旨趣ニテハ上告ノ理由ト爲スチ得ス
住所身分職業畧之

江上胤成

年齡畧之

右江上胤成ハ明治十五年二月二日山鹿治安裁判所ニ開キタル熊本輕罪裁判所ニ於テ看守者懈怠ニ因リ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサルノ罪アリト處斷セラレタル裁判ニ對シ上告ヲ爲シタルニ付專任判事昌谷千里ノ囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

報告書ニ依リ大審院檢事堀田正忠ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スルコト左ノ如シ

上告人ハ囚徒ヲ看守スルノ際毫モ懈怠ノ所爲アルニ非ズ然ルニ刑法第五百十條ニ依リ刑ヲ宣告サレタルハ不當ノ裁判ナリトノ旨ヲ陳辯シ上告ヲ爲スト雖モ其要點ハ單ニ事實覆審ヲ請求スルノ旨趣ニ止マルモノニシテ治罪法第四百十條ニ掲載シタル上告ヲ爲スコト得ルノ場合ニ適當セサルヲ以テ上告ノ理由ナキモノト判定ス依テ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ上告ヲ棄却スルモノナリ

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十五年九月九日

裁判長判事 坂本政均 專任判事 昌谷千里

判事 關義 臣 同 鳥居斷三

同 山根秀介 書記 森田忠雄

〔要領〕刑法第五百十條第一段ノ囚徒トハ禁錮以上ノ既決人又ハ囚禁閉

鎖スルノ効力アル拘引狀收監狀ヲ受ケタル犯人ニ限ラス現ニ拘

引ヲ受ケテ看守又ハ護送者ヲ要スルモノハ皆包含スルモノトス

住所身分職業畧之

野田 豊太郎

年齡畧之

右豊太郎カ下瀬松太郎ヲ濱田輕罪裁判所へ護送ノ途中ニ於テ懈怠ニ因リ松太郎カ逃走ヲ覺ラサリシトノ檢察官ノ起訴ヲ受ケ濱田輕罪裁判所豫審掛リ判事佛生復ハ刑法第五百十條ノ刑ヲ適用スヘキ者トシ濱田輕罪裁判所へ移スノ言渡ヲ爲シテ同裁判所檢事乘附弘ハ右豫審言渡ヲ不法ナリトシ故障ノ申立ヲ爲セリ明治十五年二月十三日濱田輕罪裁判所會議局ニ於テ檢事ノ故障ニ對シ豫審終結ノ言渡ハ不法ニ非ストノ判決ヲ爲シテ而シテ檢事乘附弘ハ右會議局ノ判決ヲ尙

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

又不法ナリトシ上告セル上告ニ曰ク刑法第百五十條ノ囚徒トハ禁錮以上ノ已決囚徒ニ非スンハ囚禁閉鎖スルノ効力アル拘留狀收監狀ヲ受ケタル犯人ヲ云フモノニシテ未タ囚禁閉鎖ノ効力ナク單ニ裁判所ヘ引致スルニ止マル處ノ拘留狀ヲ受ケタル者モ概言シタルモノニ非サルヘシ被告豊太郎ハ拘留狀ヲ以テ引致スル者ノ逃走ヲ覺ラサリシ者ノ刑ヲ適用スルヲ得サルナリ故ニ會議局ニ於テハ豫審終結ノ言渡ヲ取消シ更ニ無罪ヲ言渡ス可キモノト云フニ在リ又被告人野田豊太郎ニ於テモ亦會議局ノ裁判ヲ不法ナリトシ上告セリ其旨趣ハ檢察官ノ上告ト同意ニシテ松太郎ハ刑法第百十條ニ記載アル囚徒ト云フヘキモノニ非ス云々ト云フニ在リ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ據リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ裁判スル左ノ如シ

本件上告ノ要點ハ刑法第百五十條第一段ノ囚徒ノ逃走ヲ覺ラサル云々ニ係ル囚徒トハ必ス禁錮以上ノ既決人又ハ囚禁閉鎖スルノ効力アル

ル拘留狀收監狀ヲ受ケタル犯人ニ限ルヤ否ヤノ解釋ヲ詳ニスルニアリ其條第二段ニ曰ク若シ重罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ係ル片ハ云々トアリテ是ハ重罪ノ既決囚人ヲ除クノ外凡拘留狀ヲ受ケタル者ハ輕罪ノ刑ニ處セラレタル囚徒ニ限ラス重罪輕罪ノ未決ノ囚徒又ハ其嫌疑アルノ捕ハレ人等現ニ拘留ヲ受ケテ看守又ハ護送者ヲ要スルモノハ一般ニ本條第一段ノ法文中ニ支配セラレ、モノトス上告狀ノ所謂ル必スシモ禁錮ノ既決又ハ囚禁閉鎖以上ノ犯人ニ限ルト謂フヲ得サルナリ現ニ拘留狀ニ記載シアル竊逃犯人ナル松太郎ヲ護送シテ其逃走ヲ覺ラサリシ護送者即チ被告豊太郎ノ所爲ハ刑法第百五十條ニ問擬スヘキモノ即チ豫審終結ノ言渡ニ於テ輕罪裁判所ヘ移ストノ申渡ハ相當ナレハ到底濱田輕罪裁判所會議局ニ於テ檢察官ノ故障ノ申立ニ對シ明治十五年二月十三日言渡シタル判決ハ不法ト謂フニ由ナシ即チ檢察官及被告人野田豊太郎ノ上告ハ治罪法第四百十條ノ場合ニ

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

適合セサル上告ナリ因テ治罪法第四百二十七條ノ成規ニ則リ檢察官
及被告人ノ上告ヲ併セテ棄却ス

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十五年十月十三日

裁判長判事 中島 錫胤 專任判事 關 義 臣

同 鳥居 斷三 同 山根 秀介

同 昌谷 千里 書記 荒木 龍 兆

〔要領〕囚徒ノ逃走罪ヲ犯スヲ二次ニ涉ルモ未ダ前罪ノ判決ヲ經サル限
リハ其後罪ヲ再犯視シ刑ヲ加重ス可キ理由ナケレハ單ニ明治九
年第二十二号公布ニ依リ棒鎖ニ處ス可キ者トス

住所身分職業畧之

松 村 藤 吉

年齢略之

右松村藤吉ノ被告事件ニ付明治十五年五月三十一日大坂輕罪裁判所
ニ於テ被告カ懲役終身服役中明治十四年三月十六日堺監獄ヲ脱シテ
逃走シ其後就縛入監中明治十四年七月十八日再ヒ逃走シタルハ新法
實施前ノ所爲ナルヲ以テ之ヲ舊法ニ照スニ第一次ノ行爲ハ明治九年
第二十二號布告ニ依リ棒鎖三日ニ處スヘキ者又第二次ノ行爲ハ明治
十年第二十五號布告ニ依リ棒鎖十日ニ處スヘキ者即二罪俱發シタル
ヲ以テ舊法ニ罪俱發以重論條ニ依リ一ノ重キ棒鎖十日ニ處斷スヘキ
者ナルヲ以テ明治十四年第八十一號布告第十三條ニ照シ棒鎖十日ニ
處スト言渡シタル裁判ヲ不當ナリトシ檢事補大野吉利カ上告ノ要旨
ハ明治十年第二十五號布告ハ先キニ逃走ノ罪ヲ犯シ已ニ斷決ヲ經テ
再ヒ犯シタル者ヲ罰スルノ律意ナルヘシ然ルニ本案被告ノ所爲ハ先
キニ逃走ノ罪ヲ犯シタルモ未ダ其判決ヲ經ス再ヒ同罪ヲ犯シタルモ
ノナルヲ以テ兩次ノ罪等シク是レ同一ノ刑ニ該ル者ナルニ裁判所ニ
囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

於テ被告人第二次ノ所爲ハ明治十年第二十五號布告ニ依リ棒鎖十日ニ該ル者ト處斷セシハ擬律ノ錯誤アル裁判ナリト云フニアリ對手人松村藤吉ハ大野吉利カ上告趣旨ト意見ヲ同フスル旨ヲ答辨セリ又被告松村藤吉カ上告ノ要旨ハ已決囚ノ逃走ハ二罪俱發例ヲ以テ論スルノ限リニアラサルモノ、如シ又判文ニ舊法ノミヲ據ケ新法ヲ明示サレサルハ刑法第三條第二項ノ元則ニ背戾シタルモノ、如シ夫レ然リ被告ノ逃走罪ハ刑法ニ於テ第四百一一條第四百十二條第四百十三條第四百十四條何レヲ適用スルヤノ區分ヲ明記シ之ヲ舊法ニ比照シ輕キニ因テ處斷セサルハ不法ノ裁判ナリト對手人檢事補大野吉利カ答辨ノ趣旨ハ被告カ本件裁判言渡ヲ以テ刑法第三條及ヒ治罪法第三百四條ニ背キタル者トシタルハ其當ヲ得タルモ被告ノ所爲ニ對シ原裁判所カ二罪俱發例ニ照シ處斷シタルハ素ヨリ當然ナルニ已決囚ノ逃罪ハ二罪俱發例ヲ以テ論スヘキモノニアラズトノ申立ハ更ニ其理アルヲ見スト云フニアリ右二個ノ上告各其主唱スル所ヲ異ニスルモ同シク一個ノ裁判ニ對スル上告ナルヲ以テ茲ニ大審院ニ於テ專任判事ノ報告書ニ據リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ二件ヲ併セ之ヲ審按スルニ原裁判ノ新舊法ヲ比照セサルハ刑法第三條第二項ノ原則ニ觸ル、モノトス又已決囚ノ逃走罪ニ二罪俱發例ヲ用アルヲ得サルノ法文ナク且原判文ヲ閱スルニ事實及ヒ法律ノ理由ヲ付シ治罪法第三百四條ニ背戾シタルノ痕跡アルヲ見サレハ被告藤吉カ右上告ノ趣旨ハ不相立モノトス然ルニ本按被告ノ所爲ニ對シテハ原檢察官意見ノ如ク二次罪ヲ犯スモ未ダ前罪ノ判決ヲ經サル限リハ其後罪ヲ再犯視シ刑ヲ加重スヘキ理由ナケレハ單ニ明治九年第二十二号公布ニ依リ棒鎖三日ニ處スヘキモノナルニ原裁判ノ茲ニ出テカリシハ擬律ノ錯誤アル不法ノ裁判ナリトス因テ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ之ヲ破毀シ本院ニ於テ直ニ判決ヲ爲ス左ノ如シ

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

橋村 藤吉

前ニ辨明スル理由ナルヲ以テ明治九年第二十二号公布及ヒ明治十四年第八十一號公布第十三條ニ依リ棒鎖三日ニ處スル者ナリ
大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月廿八日

裁判長判事 中島盛有 專任判事 石井忠恭

判事 兵頭正慈 判事 土師經典

判事 黒岩直方 書記 田邊 權

○國事犯ノ陰謀ニ關スル罪証隠蔽ノ件

住所身分職業略之

鎌田 猶三

年齢略之

同

佐々木 宇三郎

同

右被告人等ハ河野廣中花香恭次郎平島松尾愛澤寧堅田母野秀顯澤田清之輔等カ政府ヲ顛覆スルノ目的ヲ以テ内亂ノ陰謀ヲ爲シ共ニ血盟シタル盟約書ヲ發見シ之ヲ取隠シタルトノ公訴ニ因リ檢察官ノ意見被告人等ノ答辨辨護人等ノ辨論ヲ聽キ被告人等ノ自狀及ヒ証憑書類ニ基キ高等法院裁判長陪席裁判官評議ノ上判決スルコト左ノ如シ

判決

右被告人等ハ明治十五年十二月中被告人佐々木宇三郎宅ニ於テ河野廣中花香恭次郎平島松尾愛澤寧堅田母野秀顯澤田清之輔等カ内亂ニ關スルノ罪ヲ免カレシメノコトヲ圖リ其罪証ト爲ルヘキ血判セシ盟約書ヲ隠蔽シタル者ト判定ス其証憑ハ左ニ之ヲ明示ス
鎌田猶三ハ明治十六年一月十九日福島警察署ニ於テ其盟約書ハ囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

如何ナルヲ記載セシヤトノ問ニ對シ
 第一條 我黨ハ專制政府ヲ顛覆シ完全ナル立憲政体ヲ立ルヲ目的トス 第二條 我黨ハ如何ナル難義ニ際シ幾年月ヲ經ルト雖モ目的ヲ達セサル中ハ決シテ解散セサルヲ 第三條 我黨員ハ時宜ト場合ニ依リテハ一死ヲ顧慮スルコトナカルヘシ 第四條 前三條ノ結約ヲ違背シタル者ハ斬ニ處スヘシ 第五條 ハ記憶セス

右五ヶ條ハ神明ニ盟ヒ生死ヲ不辭相守ルヘキト
 尤氏名ノ下ニ各血判ヲナセリト答ヘタリ

又明治十六年二月三日福島縣裁判所若松支廳豫審廷ニ於テ福島無名館ニテ河野廣中外五名之血判盟約ヲ見出シタリト信ナルヤトノ問ニ對シ十五年十二月六日午後三時比無名館之床間ニアル箆筒之小引出シ三ツノ内中ノ引出シニ見當リ取置候面シテ同

月九日午前十一時佐々木卯三郎ニ相渡候ト答ヘ又タ匿シ置シハ如何ナル譯カトノ問ニ對シ專制政府ト記載有之斯之如書ヲ見顯ハサレ候節ハ國事犯罪トモ可相成ト存陰蔽之含ニテ匿シ置候ト答ヘタリ又タ明治十六年二月四日汝カ無名館ニ於テ如何ナル手續ニテ河野廣中等ノ誓約書即チ血印セシモノヲ發見シタルヤトノ問ニ對シ自分カ其日同館ニ投スルヤ廣中ノ勾引セラレタル後ニテ當日已ニ家宅搜索ノ跡ナレハ書類等ハ皆已ニ差押ヒラレタリ其五日自分所持ノ書類迄差押ヒラレタルヤト思慮シ各處探索スルニ際シ箆筒ノ引出中其誓約書ナルモノアリ是レ十數枚ノ紙ヲ綴リ表題ヲモ附セス且ツ初メニ少ク字ヲ書シタルカ爲メ先キニ白紙ヲ綴リタルモノト誤認シ警官ノ差押ユル所トナラスシテ此ニ取遣シタルモノト思料シタリ然レ之ヲ閱スルニ政府ヲ顛覆スル云々ノ誓ナレハ若シ發覺セハ即チ法律ノ罪人ヲ免レス則チ囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

之ヲ秘スヘキモノト思料シ館中ノ疊ノ下ニ藏シ置タリ然レドモ之ヲ訴ヒ出ルニ如カサルヘキカト思料シ種々之カ處置方ニ苦ミ一己ノ心ニテ決スル能ハス則チ九日ニ在テ佐々木卯三郎方ニ到リ其處置方ヲ計リタリ然ルニ卯三郎ハ悉皆其處置ヲ擔當スルヲ以テ授ケ去ルヘキ旨申スヲ以テ皆同人ノ爲ス所ニ委テ直チニ之カ關係ヲ絶テタリ畢竟スルニ之ヲ包藏セス過日警察署ノ訊問中敢テ此事ノ訊問ナカリシカ自分ハ之ニ關係セシ始末ヲ自白シタルモノナリト答ヘタリ

佐々木宇三郎ハ明治十六年六月九日本院公判下調廷ニ於テ被告九字三郎勘考セシ歟トノ問ニ對シ勘考セリ明治十五年十二月九日鎌田直造來リシ時ヨリノ手續ヲ更ニ申立テ明治十五年十二月九日鎌田直造ノ使也トテ菅野和七ナル者來リ直造カ何カ談スルコト有テ大事ナルコトナリ故ニ來リ賞ヒダシト云フ自分ハ何ノコ

カハ知ラサレドモ大事ノ談ナレハ他人ノ居ル處ハ宜シカルヤシ故ニ直造ニ來タレト申聞タリ其夜直造來リ盟約書ヲ持參シ見セタルニ相違ナシ然ルニ内亂ヲ起ストノ明文ハナケレドモ政府ヲ顛覆スルトノ文字アリト答ヘ又其文字アリヤトノ問ニ對シ有リ故ニ他見ハ宜シカラス河野廣中花香恭次郎等ハ知己故他人ニ見セサルコト之ヲ預リ然ルニ夫ヲ如何致シ保存シテ本人ヘ返スヘキト種々考ヘ餘ノ處ニ於テ他人ニ見ラレテハ本人等ノ本懐ニ非スト存シ直造ノ申立ノ如ク新聞紙ニ包ミ會津徳利ニ入レテハ見ダレドモ夜中ナリシ故夫ヨリ譬ヒ直造ノ持來リタルモノテアロウトモ土中ニ埋メ又直造カ他人ニ嘶シテハ宜シカラスト直造カ便所ニ行キタル時杉ノ古木ノ下ヘ埋メ然ル後直造カ便所ヨリ歸リタル時余モ歸リタリ此時直造カ埋メタリト思ヒシナラン暫シスルト前申上ル通リ雇人等カ萱ヲ片付居タル處ニ戸長役場ヲ尋テ巡

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

查アリテ直造カ尋テラル、ヤノ摸樣モアリシ故へ出テ行カシニ
 自分モ同村瀬ノ上ト云フ所へ出テ行キタルニ相違ナシト答へ又
 マ福島警察署以來事實ナキヲ申立シハ自分一己ノ罪ヲ遁シ爲
 メナラス一度預リテ隱蔽シタルハ友人ノ情誼ニ於テ河野廣中等
 ノ罪ヲ遁カレシメントノ爲メナリ今更証人トナリ右ノ書類ヲ持
 參スルニ於テハ遺憾ナルカ故ニ是迄陳述致シタルヲハ彼レ等カ
 罪ヲ免カレシメントナ慮リ心ニモナキ僞言ヲ申立タルハ恐入タ
 リト答へタリ又タ明治十六年六月十一日先日汝ノ申立ニ盟約書
 ナ鎌田直造ヨリ受取之ヲ杉ノ古木ノ下ニ埋メ後取出シテ消滅セ
 シメタリト今其盟約書ハ皆無ニ屬セシヤ否トノ問ニ對シ無ナリ
 シナリト答へ又其引裂キタルトカ反古トナセシモノハ如何シタ
 ルヤトノ問ニ對シ消滅セシメ之ヲ出スヲ不能ナリト答へ又タ消
 滅セシメタルヲ詳論申立ユトノ言ニ對シ僅カ一枚計リ故引裂

キ堀ノ中へ投シタリト申立又タ其堀ニ水アリヤトノ問ニ對シ水
 ノ流ル、堀ナリト答へ又タ水中ニ溶解シ搜索シ能ハサル歟トノ
 問ニ對シ僅カハカリノ物故搜索シ能ハスト答へ又タ盟約書ノ文
 言概略ヲ覺へサルヤトノ問ニ對シ委シクハ記憶セスト答へ又タ
 大略ニテ宜シトノ言ニ對シ數百日ヲ經過シ能ク覺へサレハ壓制
 政府ヲ顛覆シ善良ナル政府ト爲スト歟作り出ストカアリシト覺
 ユト申立又壓制政府ヲ顛覆云々トハ書キ起シニアリシヤ否トノ
 問ニ對シ然リト思フト答へ又タ其姓名ヲ乘セタルハ花香恭次郎
 河野廣中平島松尾愛澤寧堅田母野秀顯澤田清之輔ノ六名ナリト
 云フ汝ハ如何記憶スルヤトノ問ニ對シ五名カ六名ト覺へタリ其
 外ニナシ花香ト平島ハ能ク覺へ居タリシナリト答へタリ又タ明
 治十六年六月十二日昨日申立中唯今朝讀アルヲ拜聽シ何分數百
 日ヲ經過セシヲ故其申立ニ前後セシ所アリトノ申立ニ依リ其前
 囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

後スル處充分申立ユトノ言ニ對シ即チ盟約書ノ文面ニ前後アリ
 初メ政府ノ壓制ヲ顛覆シ善良ナル政體ヲ建ツルヲ務ム其後ニ
 數歲月ヲ經ルモ艱難スルモ撓マス盡力ストアリシヤニ覺ヘタリ
 ト申立又タ夫ニ止マル歟トノ問ニ對シ然リト答ヘタリ
 右ニ列舉セシ証憑中無名館之床間ニアル筆筒ノ小引出シ三ツノ内
 中ヲ引出シニ見當リ取置候而シテ同月九日午前十一時佐々木卯三
 郎へ相渡候トノ供述又タ國事犯罪トモ可相成ト存シ陰蔽ノ含ニテ
 匿シ置候トノ供述又タ政府ヲ顛覆スル云々ノ誓ナレハ若シ發覺セ
 ハ則チ法律ノ罪人ヲ免レス則チ之ヲ秘スヘキモノト思科シ館中ノ
 疊ノ下ニ藏シ置タリトノ供述又タ卯三郎ハ悉皆其處置ヲ擔當スル
 チ以テ授ケ去ルヘキ旨申スチ以テ皆同人ノ爲ス所ニ委テ云々トノ
 供述又タ直造來リ盟約書ヲ持參シ見セタルニ相違ナシ然ルニ内亂
 チ起ストノ明文ハナケレトモ政府ヲ顛覆スルトノ文字アリトノ供述

又タ僅カ一枚計リ故引裂キ堀ノ中へ投シタリトノ供述又タ僅カハ
 カリノ物故搜索シ能ハスト供述セシ等ノ模様ヲ以テ之ヲ証憑ノ全
 部ニ照スニ被告事件ハ前又ニ掲ケシ如ク判決ス可キノ証憑充分ナ
 リトス

因テ之ヲ法律ニ照スニ

刑法第五十二條ニ曰ク 他人ノ罪ヲ免カレシメシテ圖リ其罪
 証ト爲ル可キ物件ヲ隱蔽シタル者ハ十一月以上六月以下ノ輕禁
 錮ニ處シ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス
 刑法第一百四條ニ曰ク 二人以上現ニ罪ヲ犯シタル者ハ皆正犯ト爲
 シ各自ニ其刑ヲ科ス

刑法第八十一條ニ曰ク 罪ヲ犯ス時滿十六歲以上二十歲ニ滿サル
 者ハ其罪ヲ宥恕シテ本刑ニ一等ヲ減ス

刑法第七十條ニ曰ク 禁錮罰金ニ該ル者減輕ス可キ時ハ各本條ニ

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

記載シタル刑期金額ノ四分ノ一ヲ減スルヲ以テ一等ト爲シ云々
刑法第二十八條ニ曰ク 拘留ハ云々刑期ハ一日以上十日以下ト爲
シ云々

刑法第七十一條ニ曰ク 禁錮ヲ減盡シタル時ハ拘留ニ處シ罰金ヲ
減盡シタル時ハ科料ニ處ス禁錮罰金ヲ減シテ其短期十日以下算
數一圓九十五錢以下ニ及フ時ハ亦拘留科料ニ處スルヲ得
右ノ理由ナルニ因リ高等法院ニ於テ被告人鎌田猶三佐々木宇三郎ニ
對シ刑法第一百五十二條ニ依リ十一日以上六月以下ノ輕禁錮貳圓以上
貳拾圓以下ノ罰金ノ範圍内ニ於テ處斷ス可キ所鎌田猶三八罪ヲ犯ス
時二十歳ニ滿サルヲ以テ刑法第八十一條ニ依リ本刑ニ一等ヲ減シ刑
法第七十條ニ照シ八日以上四月十五日以下ノ刑期ノ範圍内ニ於テ處
斷スヘキ者ナルモ尙ホ原諒ス可キ情狀アルヲ以テ刑法第八十九條第
一項ニ重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シテ本

刑ヲ減輕スルヲ得刑法第九十條ニ酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等
又ハ二等ヲ減ストアルニ依リ更ニ一等ヲ減シ刑法第七十條ニ照シ刑
法第二十八條刑法第七十一條ニ依リ五日以上三月以下ノ範圍内ニ於
テ拘留五日佐々木宇三郎ハ原諒スヘキ情狀アルヲ以テ刑法第八十九
條第一項ニ重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ者ハ酌量シ
テ本刑ヲ減輕スルヲ得刑法第九十條ニ酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ
一等又ハ二等ヲ減ストアルニ依リ一等ヲ減シ刑法第七十條ニ照シ刑
法第二十八條刑法第七十一條ニ依リ八日以上四月十五日以下ノ範圍
内ニ於テ拘留八日ニ處ス

明治十六年十月二日東京高等法院ニ於テ

檢事渡邊 檢事武内 繼續檢事堀田 正忠 檢事澄川 拙三 立會宣告ス

高等法院裁判長 玉乃世履

高等法院陪席裁判官 元老院議官 河田景與

囚徒逃走ノ罪及ヒ罪人ヲ藏匿スル罪

- 高等法院陪席裁判官 元老院議官 林 友 幸
- 高等法院陪席裁判官 元老院議官 渡 邊 精
- 高等法院陪席裁判官 判事 岡 内 重 俊
- 高等法院陪席裁判官 判事 關 義 臣
- 高等法院陪席裁判官 判事 武 久 昌 孚
- 高等法院書記 大審院書記 荒 木 龍 兆
- 高等法院書記 大審院書記 土 居 侃 夫

○附加刑ノ執行ヲ遁ル、罪

〔要領〕監獄署ノ別房留置場ヲ逃走シタルモノハ刑法附則第三十二條ヲ犯シタルモノニテ即チ刑法第一百五十五條ニ問擬ス可キモノトス

住所身分職業畧之

森 山 岩 太 郎
年 齡 畧 之

同

木 暮 磯 吉

同

淺 野 金 太 郎

同

附加刑ノ執行ヲ遁レタル被告事件ニ付明治十五年六月廿四日東京輕罪裁判所ハ監視規則ニ違背シタル廉ニ付テハ証憑充分ナラストシ無罪ヲ言渡タル裁判ニ對シ檢事補川井忠雄ハ上告セリ其要領ハ被告人共ノ現ニ別房留置中竊カニ脱出セシモノナレハ刑法附則第三十二條ニ揭クタル明文ニ因リ刑法第一百五十五條ニ從ヒ處分スヘキモノナルニ原裁判所ハ別房留置中逃走シタル事實アリト認メナカラ監視ノ規則ニ違背シタル証憑充分ナラストシ無罪ノ言渡ヲ爲シタルハ不當ノ

附加刑ノ執行ヲ遁ル、罪

裁判ナリト云ニアリ

對手人森山岩太郎木暮磯吉淺野金太郎ハ之ニ答辨セズ
大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ因リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按
スルニ

原裁判言渡ニ(曩キニ重禁錮及ヒ監視ニ付スル言渡ヲ受ケ主刑滿限ノ
後引取人之ナキ等ニテ市ヶ谷監獄署ニ止メ置監視中自宅ニ立戻リ度
トノ念慮ヲ懷キ居ル際偶々少年檻ノ窓ヲ破リ脱出シタル者アルヲ認メ
之ヲ好機ト爲シ其跡ヨリ竊ニ脱出シタルハ被告人各自ノ申立看守乙
津七三郎等ノ始末書ニ徴シ明カナリ云々)ト其事實ヲ認メタルモノナ
レハ刑法附則第三十二條ニ監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ
時ハ其期間懲治場ニ留置シ云々トアル規則ヲ犯シ逃走セシモノニ
テ即チ刑法第百五十五條ニ問擬スヘキモノナルニ原裁判所ハ証憑不
充分ナリト斷定シ治罪法第三百五十八條ニ照シ無罪ト言渡タルハ不

法ノ裁判ニテ擬律錯誤タルヲ免カレサルモノト判定シ治罪法第四百
二十九條ニ依リ之ヲ破毀シ直チニ裁判スル左ノ如シ

森山岩太郎

木暮磯吉

淺野金太郎

原裁判所カ明治十五年六月廿四日裁判言渡タル事實ノ理由及ヒ証憑
ニ照シ市ヶ谷監獄別房留置場ヲ逃走シ監視規則ヲ犯シ其當時各齡十
二歳以上十六歳ニ滿タサルモ是非ヲ辨別シテ犯シタルヲ明白ナリ之
ヲ罰スル法律ハ

刑法附則第三十二條監視ニ付スル者住居ナク及ヒ引取人ナキ時ハ其
期間懲治場ニ留置シ工業ヲ爲サシメ又ハ使役ニ供ス住居遠地ニ在
テ歸着スル資力ナキ者亦同シトアルニ違背セシ者ナルニ因リ刑法第
百五十五條監視ニ付ヒテシタル者其規則ニ違背シタル時ハ十五日以

剛加刑ノ執行ヲ通ル、罪

上六月以下ノ重禁錮ニ處ストアルコ該ル而シテ犯時各齡十二歳以上十六歳以下ナルモ辨別アリテ犯シタルモノナルニ依リ同第八十條第二項ニ依リ二等ヲ減輕シ七日以上三月以下トナル因テ森山岩太郎木暮磯吉淺野金太郎ヲ各一月ノ重禁錮ニ處スル者也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月九日

裁判長判事 園田 弘 專任判事 鳥居 斷三

判事 土師 經典 判事 高木 勤

判事 小村 壽太郎 書記 澤野 潛藏

○貨幣ヲ偽造スル罪

(要領)原裁判所カ各個ノ証憑ニヨリ認メタル事實ニ對シ徒ラニ其當否ヲ論難スルモ上告シテ破毀ヲ求ムルノ原因ト爲スヲ得ス

住所身ハ職業略之

熊坂長菴

年齢畧之

内國通用ノ紙幣ヲ偽造行使シタル被告事件ニ付明治十五年十二月八日神奈川重罪裁判所カ刑法第百八十二條初項ニ依リ無期徒刑ニ處ス
ト言渡タル裁判ニ服セス上告セリ其要領ハ紙幣偽造ノ嫌疑ヲ受ケ就
縛ノ際押取セラレタル二圓紙幣ハ明治十一年二月十六日東京四谷荒
木横町石田幸平ナル者貳圓紙幣ヲ携ヘ來リ下總國小野昱ノ進メニ因
リ所持ノ古金五百兩ヲ以テ賣買シ其紙幣ヲ以テ遊蕩ニ費消セシモノ
ニテ所々漫遊シ自家ニ在ルノ日太少ナク且銅版鑄刻ヲ學ヒタル僅ニ
二十日間ニテ印刷ノ術色肉製法等他ニ學ヒタルコアルニアラサレハ
紙幣偽造スルキ暇ナキノミナラス學ヒ得スシテ爲シ得ヘキ事ニアラ
サルニ原裁判所ハ精神錯亂中爲シタル妄説ヲ信シ紙幣偽造者ナリト
シ無期徒刑ヲ言渡サレタルハ不法ナリト思考ス因テ破毀ヲ願フト云

附加刑ノ執行ヲ遁ルル罪 貨幣ヲ偽造スル罪

對手人檢事渥美友成ハ上告趣旨ノ不當ナルヲ辨駁シ原裁判毫モ不法
ニアラスト答辨セリ

大審院ニ於テ專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ上告代言人森大次郎ノ
陳述臨席檢事池上三郎ノ意見ヲ聽キ判決スル左ノ如シ

上告ノ理由トスル處明治十一年以來ハ所々漫遊シ自家ニアルノ日本
少シ且僅ニ銅版鑲刻ハ二十日間學ヒタルノミナレハ其暇ナキノミナ
ラス學ヒ得スシテ爲シ能ハサルコナリト云フニアリト雖年原裁判所

カ各個ノ証憑ニ依リ認メタル事實ニ對シ徒ニ其當否ヲ論難スルニ過
キサレハ上告シテ破毀ヲ求ムルノ原因ト爲スヲ得ス何ントナレハ治

罪法第四百十六條ニ被告ノ白狀官吏ノ檢証調書証據物件証人ノ陳
述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任ストアリテ事實

裁判所ニ任從セシモノナレハナリ其他司法警察官及ヒ豫審判官ニ對

ヲ爲シタル供述ハ精神錯亂中ノ妄說ナルト云フモ果シテ其妄說ニ係
ルヤ否ヤ是亦前ニ辨明スル如ク原裁判所カ証憑ニ依リ認ムル處ニ任
從スル部内ナレハ破毀ヲ求ムル原因ト爲スニ足ラス因テ上告ノ趣意
總テ相立タス

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年十月廿四日

裁判長判事	伴 正 臣	專任判事	鳥居 斷 三
判事	高 木 勤	判事	薄 井 龍 之
判事	小村壽太郎	書記	香 田 能 興

○官印ヲ偽造スル罪

〔要領〕 (一)明治十四年中戸長役場ノ印ヲ偽造シ今其偽印ヲ押捺シタル
モノハ偽造ノ罪既ニ遂ケタルヲ明瞭ナリ

(二)偽印ヲ行使セントシタル罪ニ付債主其印影ノ眞正ナラサル

貨幣ヲ偽造スル罪 官印ヲ偽造スル罪

ヲ疑ヒ其取調ノ爲メ告訴セントスルヲ知テ官ニ首出シタルモノハ發覺前自首シタルモノト謂ハサルヲ得ス

住所身分職業畧之

野口金造

年齢畧之

明治十五年七月十二日高知輕罪裁判所ニ於テ野口金造カ被告事件ヲ審判シ二罪中一ノ重キ偽造官印ヲ使用セントシテ未タ遂ケサルノ罪ヲ論シ刑法第九十五條ニ依リ未遂犯罪ナルヲ以テ二等ヲ減シ二年以上五年以下ノ重禁錮ノ處自首シタルニ因リ本刑ニ一等ヲ減シ仍ホ酌量シテ二等ヲ減シ重禁錮六月監視六月ノ刑ニ處スト言渡シタル裁判ニ服セス被告金造カ上告ヲ爲シタルノ要旨ハ被告人カ金圓ヲ借入レントシタルハ自己ノ利ヲ圖ルニ非ス只實父ノ困窮ヲ助ケントスルノ意ニ出タルナリ其債主ニ渡シタル證書ハ地所抵當ノ公正證書ヲ作

ル迄ノ時間債主ノ承諾ヲ得テ假リニ差入レタル者ニシテ本證書ニ非ス其付箋ニ偽印ヲ押捺シタルモ固ヨリ惡意アリテ詐欺ノ所爲ニ出タルニ非ス即チ罪ヲ犯ス意ナキ所爲ナレハ刑法第七十七條ヲ適用セラルヘキ者ナリト云フニ在リ大審院檢事池上三郎ハ其意見ヲ陳述シ且附帶ノ上告ヲ爲シタリ其旨趣ハ被告人カ自首ハ豫審調書ニ依レハ既ニ發覺後ニ係ルヲ以テ自首減輕ヲ與フ可キモノニアラス又被告カ官印偽造ノ罪ハ既ニ遂ケタルモノナルニ原裁判所ハ仍ホ未遂犯ト爲シ二等ヲ減シ云々ト言渡タルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ依リテ之ヲ判決スルヲ左ノ如シ

被告人カ楠目村戶長役場ノ印ヲ偽造シ及ヒ其偽印ヲ使用セントシタル犯罪ハ事實證據明白ニシテ固ヨリ罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ト謂フコト得ス而シテ上告ノ旨趣ハ一モ治罪法ニ定メタル上告ヲ爲スヲ得ルノ原由アルニ非サルヲ以テ之ヲ採用スルニ由ナシ又被告人カ犯罪ヲ

官印ヲ偽造スル罪

自首シタルハ債主ニ於テ印影ノ真正ナラサルヲ疑ヒ其取調ノ爲メ告
 訴セントスルヲ知テ直ニ警察署ニ首出シタル者ナレハ發覺前自首シ
 タリト謂ハサルヲ得ス故ニ原裁判所カ舊法ニ在テハ人ノ官ニ陳告セ
 ントスルヲ知テ自首スルヲ以テ二等ヲ減シ新法ニ在テハ發覺前自首
 スルヲ以テ一等ヲ減シ處斷ス可シト爲シタルハ相當ナリトス其官印
 ナ偽造セシ所爲ハ明治十四年中ニ於テ戸長役場ノ印ヲ偽造シ今其偽
 印ヲ押捺シタル者ナレハ偽造ノ罪既ニ遂ケタルハ明瞭ナリ然ルニ原
 裁判所カ未タ使用シ遂ケサルヲ以テ二等ヲ減シ云々ト言渡タルハ據
 律ノ錯誤アル不法ニ裁判ナリト雖モ新舊ノ法ヲ比照シ輕キ舊法ニ從
 ヒ且二罪俱發スルニ因リ一ノ重キ偽印ヲ使用セントシテ未タ遂ケサ
 ルノ罪ヲ論シ其偽造ノ罪ニ除棄シテ之ヲ問ハサルヲ以テ亦破毀ノ限
 ニ在テス

右ノ理由ナルニ因リ治罪法第四百二十七條ノ成規ニ從上告ヲ棄却ス

ルモノナリ

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月十七日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 昌谷 千里

判事 山根 秀介 同 土師 經典

同 高木 勤 書記 上田 庸熙

○官ノ文書ヲ偽造スル罪

〔要領〕正犯ヲ幫助シテ偽造証書ノ行使ヲ容易ナラシメタルモノトシテ豫

審終結ヲ會議局ニ於テ認可シタルモ其果シテ行使セシモノナル

ヤ亦或ハ之ヲ何レニ行使シタルヲ等ヲ明示セサルハ則チ事實ノ

理由ヲ付セサル不法ノ判決ナリトス

任所身分職業略之

岡部 宇三郎

官印ヲ偽造スル罪 官ノ文書ヲ偽造スル罪

明治十五年四月二十一日米澤輕罪裁判所會議局ニ於テ右岡部宇三郎
 カ所爲ハ刑法第二百四條同第九條同第八十五條ニ依リ之ヲ處斷ス
 可キモノトシ山形重罪裁判所ニ移ストノ豫審終結ノ言渡ニ就テノ故
 障ニ對シ右宇三郎ハ正犯新田庄兵衛カ証書偽造ノ情ヲ知テ其頼囑ヲ
 許諾シタルモノナレハ便チ庄兵衛カ既ニ之ヲ行使スルヲ得タルハ全
 シ宇三郎カ之ヲ幫助シ其犯罪ヲ容易ナラシメタルモノト爲シ豫審終
 結ノ言渡ヲ認可シタル處右宇三郎ニ於テハ嘗テ庄兵衛カ証書偽造ニ
 干與シタルヲ無ク且ツ毫モ之カ行使ノ幫助ヲ爲シ其犯罪ヲ容易ナラ
 シメタルヲモ無ケレハ刑法第二百四條同第九條等ニ依リ重罪裁判所
 ニ移スノ言渡ヲ受クルノ理由無ク又犯罪ノ首出ニ及ヒタルヲモ之レ
 ナシトノ旨趣ヲ以テ上告ヲ爲セリ同裁判所檢事西村實ニ於テハ上告
 人宇三郎ニ於テ正犯庄兵衛ノ囑托ヲ許諾スルニ非サレハ如何ソ庄兵

衛ニ於テ該偽証ヲ行使スルヲ得ン加之上告人ハ既ニ偽証ヲ領取シタ
 ル末其寫ヲ上申書ニ添ヘ檢事ニ差出シタルモノナレハ何ソ情ヲ知ラ
 スシテ偽書ヲ領取シ又ハ罪ヲ自首シタルニ非ラスシテ只檢事ニ對シ
 詐言ヲ陳述シタルニ止マルト言フヲ得ン故ニ上告人ハ正犯即チ庄兵
 衛ノ從犯ニシテ當然重罪裁判所ノ管轄ヲ受クヘキモノナリトノ意旨
 ナ答辨シタリ本院檢事堀田正忠ニ於テハ原裁判所會議局ニ於テ庄兵
 衛カ既ニ之ヲ行使スルヲ得タルハ汝カ幫助ニ由テ犯罪ヲ容易ナラシ
 メタルヤ云々ト判決セシモ其果シテ行使セシモノナルヤ之ヲ何レニ
 行使シタルヲ等ノ事實ヲ明示セサルハ乃チ事實ノ理由ノ齟齬ナルモ
 ノニシテ不法ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ破毀シ相當ノ裁判所ニ移サレン
 トチ企望スルニ依リ治罪法第四百十三條ニ依リ附帶ノ上告ヲ爲ス旨
 ナ陳述シタリ依テ判決スル左ノ如シ

上告人岡部宇三郎ニ於テハ明治十五年二月十日親族新田庄兵衛ガ嚮

キニ偽造シ置キタル戸長ノ公証シタル証書ヲ將來テ宇三郎ニ附與
 シ以テ債主ノ體面ヲ假裝セシトテ囑托セシニ依リ之ヲ肯ヒ同日原裁
 判所檢事ニ對シ庄兵衛ノ貸金之レアリト詐陳シタルモ其非ナルヲ悟
 リ同年二月十三日右詐陳シタルコトノ非ナルヲ悟リタル始末ヲ同檢事
 ニ自白シタルモノナレハ宇三郎ハ庄兵衛カ虚偽ノ所爲ナル情ヲ知テ
 虚偽ノ契約ヲ承諾シタル者ト謂フ可キモノナルモ庄兵衛ヲ幫助シテ
 之レカ偽造証書ノ行使ヲ容易ナラシメタル者ト謂フテ得可カラサル
 モノ、如シ抑原裁判所會議局ニ於テ庄兵衛カ既ニ之ヲ行使スルヲ得
 タルハ汝カ幫助ニ依テ犯罪ヲ容易ナラシメタリト言渡シ行使セシメ
 タルヤチ明示セサルハ即チ事實ノ理由ヲ付セサルモノニ付キ治罪法
 第四百二十八條ニ依リ明治十五年四月廿一日米澤輕罪裁判所會議局
 ニ於テ右岡部宇三郎ニ言渡シタル判決ヲ破毀シ山形輕罪裁判所ニ移
 シ判決セシムルモノ也

大審院ニ於テ檢事澄川拙三立會宣告ス

明治十五年九月十五日

裁判長 判事 岡内重俊 專任判事 兵頭正慈
 判事 山吉盛典 同 土師經典
 同 木付義路 書記 岩田 鍊

(要領) 犯人ニ下付シタル監視票ハ官文書ノ性格ヲ有セサルカ故ニ犯人
 之ヲ毀棄スルモ官ノ文書ヲ毀棄シタルモノヲ以テ論スルヲ得ヌ
 住所身分職業畧之

奧 清 常

年齡畧之

右清常カ被告事件ニ付明治十六年三月六日鹿兒島重罪裁判所ニ於テ
 被告ハ監視規則ニ違反シ及ヒ監視票ヲ毀棄シタル者トシ監視規則ニ
 背キタルハ刑法第百五十五條ニ依リ十五日以上六月以下ノ重禁錮ニ

官ノ文書ヲ偽造スル罪

處スヘク監視票ヲ毀棄シタル所爲ハ官ノ文書ヲ毀棄シタルモノヲ以テ論シ刑法第二百三條第一項ニ依リ輕懲役ニ處スヘキモノトシ右二罪併發スルニ付刑法第百條ニ依リ一ノ重キニ從ヒ輕懲役ノ處所犯原諒不可キ者トシ本刑ヨリ一ノ輕減シ重禁錮一年六月ニ處シタル裁判ニ對シ本院檢事長邊渡驥ハ司法卿ノ命ニヨリ非常上告ヲ爲シタル旨趣ハ犯人ニ下附シタル監視票ハ官文書ノ性格ヲ有セサルカ故ニ原裁判所ニ於テ被告清常カ監視規則ニ違犯シタルニ刑法第百五十五條ヲ適用シタルハ至當ノ判決ナルモ官文書ヲ毀棄セシ罪アリトシ刑法第二百三條ニ依リ處斷シタルハ即チ治罪法第四百三十五條ニ所謂法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シタル不當ノ裁判ナリト云フニ在リ茲ニ之ヲ審按スルニ刑法附則第二十六條ニ依リ犯人ニ下付スル監視票ノ如キハ元官署ノ調製ニ係ルモノト雖モ已ニ其票ヲ犯人ニ下附シタル後テ之ヲ受ケタル犯人該票ヲ毀棄シタル場合ハ官ノ文書ヲ毀

棄シタル者ヲ以テ論スヘキモノニアラス何トナレハ監視票ノ性質ハ犯人謹慎ヲ表スル爲メ警察署ニ其票ヲ出シ認印ヲ受ケルモノニシテ專ラ監視ノ刑ヲ受ケタル犯人ニ便益ヲ與フル爲メナレハ已ニ其票ヲ犯人ニ下付シタル以上ハ是乃チ犯人ノ所有ニ同シキヲ以テナリ故ニ本院檢事長上告ノ如ク原裁判所ニ於テ被告カ監視規則ニ違反シタル所爲ニ對シ刑法第百五十五條ヲ適用シタルハ相當ナルモ監視票ヲ毀棄シタルヲ以テ官ノ文書ヲ毀棄シタル罪ト斷定シタルハ不法ノ裁判ナリトス因テ本件ハ治罪法第四百三十五條第二項ニ照シ原裁判言渡ヲ破毀シ本院ニ於テ更ニ裁判スル左ノ如シ

奧 清 常

右ハ前ニ辨明スル如クナルニ因リ被告カ監視票ヲ毀棄シタル所爲ハ刑法第二條ニ依リ罪ノ問フ可キナシ其監視規則ニ違反シタル所爲ハ刑法第百五十五條監視ニ付セザレタル者其規則ニ違背シタル時ハ十官ノ文書ヲ偽造スル罪

五人以上六月以下ノ重禁錮ニ處スドアルニ依リ重禁錮六月ニ處スルモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月九日

裁判長判事 中島 盛有 專任判事 石井 忠恭

判事 兵頭 正慈 判事 土師 經典

判事 昌谷 千里 書記 笠 慎三郎

○私印証書ヲ偽造スル罪

要領 應禁ナル賭博場ニテ成立タル貸借ハ固ヨリ其効ヲ有セス故ニ其

証書ノ偽名偽造ニ係ルモ法律ノ支配スル所ニ非ス

右ノ証書ヲ其賭場ニ列スル一人ニ渡シタリト雖モ未タ廣ク世ノ

信用ヲ害セザレハ亦タ行使ノ罪ノ成立ヲサルモノトス

住所身分職業畧之

松本久四郎

年齡畧之

同

奥田增藏

同

右久四郎増藏ニ對シ明治十五年三月十四日鳥取輕罪裁判所ニ於テ裁判シタル顛末ハ被告人松本久四郎奥田増藏ハ明治十五年一月四日鳥取片原町三丁目福光重三郎方ニ於テ久四郎増藏ト謀リ本訴ノ證據物件タル負債主偽名ノ金百圓借用証書ヲ偽造シ小林又市ニ交付シ金五拾圓ニ代ル賭博札二枚ヲ借受シモノト斷定シ刑法第二百十條第二百十二條ニ照シ被告人等ヲ重禁錮四月ニ處シ罰金拾圓ヲ附加シ六月ノ監視ヲ言渡シタリ被告久四郎増藏ハ此裁判ヲ不法ナリトシ上告セリ其旨趣ノ概略ハ自分等ハ同村山本庄平ナル者ト鳥取丹後町養賣渡世

官ノ文書ヲ偽造スル罪 私印私書ヲ偽造スル罪

(氏名不存)方へ立越シ一酌セシ央小林又市ナル者ノ使トシテ福田惣次郎來リ福光重三郎方へ參ル可シト申聞ケタルヨリ何心ナク重三郎方へ同伴セシニ五五人團樂セリ重三郎共自分等へ賭博ヲ懲憑シタルモ自分ハ無一錢ナルヲ以テ再三辭シタルヲ小林又市ヨリ金員ハ何程ニテモ貸渡スト云ヘル賭博ニハ手馴レテ種々謝斷スルモ居合ノ人々ヨリ百方教唆セラレ不長ノ心ヲ起シ同意ヲ表シタリ然テ小林又市ハ証書一通ヲ認メ其債主ハ中本庄平ト記シ金百圓ノ借金証ニテ借主ハ自分共ノ連帶ナリ又市自分共へ示スニ賭博場ノ証文ハ貸借主トモ偽名ヲ以テスル慣例ナリト貸主モ中本八十八ナルヲ中本庄平ト記シアルニ付自分共へ偽名スヘシト申シテ久四郎ハ松本忠六ト増藏ハ松谷松次ト偽名シ其印影ハ屎尿ヲ取扱ノ爲メニ用ユル有合ノモノヲ捺セリ夫ヨリ小林又市ハ五十圓ノ(コマ)札二枚ヲ渡セリ此コマ札ヲ資本トシテ賭博シ自分共ハ許多ノ勝ヲ得タリ(コマ)札ニテ勝(タルナリ)依テ先ニ差入レタ

ル百圓ノ証書ト交換シ度談判ニ及ヒタルニ福田惣次郎山本庄平小林又市等共ニ其場ヲ逃走セリ是明治十五年一月四日夜十二時頃ナリ一月七日福田惣次郎ニ面會シ前証書取戻ヲ求メタルニ小林又市へ照會シ返還スヘシト答ヘタリ又一月二十日福光重三郎自分方へ立越シ該証書ハ金子些少差出セル返戻スヘシト甘言ヲ加ヘ或ハ恐喝セシモ自分共ハ金子ハ一錢モ借用セシコナキヲ以テ一錢モ償フコ不能ト謝絶シタリ其後中本八十八ハ偽証ヲ以テ告訴セリ自分共ハ召喚ニ應シ前陳ノ次第ヲ陳述セシニ法官ハ詐偽ノ証書ヲ以テ金員ヲ詐取シタルト斷定セラレ裁判ヲ受ケタルモ服スル能ハス云々凡テ應禁ノ事ヨリ成立タル契約ハ其效ナキコトハ言テ俟タス公訴ノ証書ハ即チ應禁ヲ犯シタルモノナルニ該証書ヲ以テ本刑ニ處セテシタルハ不服ナリト又ハ該証書ハ賭博場ニ限ルモノニシテ債主負債主トモ偽名スル慣例ト他人ノ教唆ニ應シタルハ無智ノ細民ニテ此義如何ヲ稽悟セスト陳セシ

私印私書ヲ偽造スル罪

其証憑ハ債主ハ中本八十八ナルニ中本庄平ト記シアルヲ以テ所謂應禁ノ契約タルヲ証スルニ足ルベシ然ルニ該証書ハ詐偽ノ証ニテ金錢ヲ詐取シタルト断定セラレタルハ不當ナリト又判文ヲ閱スルニ金五十圓ニ代ル賭博札二枚ヲ借り受ケ云々トハ法官モ被告等ガ賭博セシハ断定セシ所ナルニ証書ヲ詐偽セシトハ主タル契約ノ消滅セシヲ願ニス組織ノ效ナキ契約ノ所爲ニ依リ刑ヒテラレタルハ何ノ法律ニ據ラレタルヤ不法ナリ云々申立タリ大審院ニ於テ公式ヲ履行シ專任判專ノ報告書ニ據リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ裁判スルノ理由ハ本訴偽名ノ借金証書ハ上告人ノ言ニ據ルニ全ク賭博場ニ於テ成立タルモノ、如シ而シテ原裁判言渡書ニ(負債主偽名ノ金百圓借用証書ヲ偽造シ小林又市へ交附シ金五十圓ニ代ル賭博札二枚ヲ借受ケタルモノト断定ス)トアルヲ觀レハ果シテ賭博上ヨリ成立タルコトハ原裁判官カ認メテ以テ疑ハサル所ナリトス抑モ應禁ナル賭博場ニシテ成立タ

ルノ貸借ハ固ヨリ其效ヲ有セサルモノナレハ假令偽名偽造ノ証書ナルモ法律ノ支配スル所ニ非ストス又偽名偽造ノ証書ニシテ小林又市ノ手ニ渡シタルニモセヨ未タ廣ク世ノ信用ニ害ヲ及シタルニモ非レハ亦行使ノ罪ノ成リ立サルモノトス現ニ原裁判所カ又市ニ言渡シタル裁判書ニ(小林又市ハ明治十五年一月四日松本久四郎奥田増藏等カ偽造シタル負債主偽名ノ金百圓借用証書タルヲ知テ明治十五年一月十日中本八十八へ傳遞シタルノ罪証充分ナラサルヲ以テ無罪)トアルニ非スヤ乃チ行使シ遂ケタルモノニ非サルヲ觀ルニ足レリ此ノ如キ筋合ナルニ原裁判所カ被告ノ所爲ヲ刑法第二百十條第二百十二條ニ照シ所斷シタルハ擬律ノ錯誤ニ係ル不法ノ裁判ナリトス仍テ治罪法第四百二十九條ニ據リ原裁判ヲ破毀シ直ニ裁判スル左ノ如シ

松本久四郎

奥田増藏

前文ノ理由ナルニ付被告事件ハ罪トナラサルモノトス因テ刑法第二條ニ照シ放免ス

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年一月十六日

裁判長判事 中島錫胤 專任判事 關義臣
判事 島居斷三 同 山根秀介
同 昌谷千里 書記 中西真淑

(要領) (一)私書偽造ノ罪タル舊法ニ於テハ行使ノ既未ヲ分クスト雖モ新法ニ於テハ偽造既ニ成ルモ未タ行使セサル限りハ其罪成立タサルモノトス然ルニ唯タ變造ノ所爲ノミヲ擧ケ行使ノ模様ヲ明示セス直チニ刑ヲ適用セシハ事實ノ理由不備ニ係ル不法ノ裁判ナリトス

(二)新舊法ヲ比照スル場合ニ於テ舊法ノ輕キニ從フキハ其刑名

モ亦舊法ニ從テ言渡ス可キモノトス

住所身分職業畧之

二 木 市 郎 次

年齡畧之

證書變造事件ニ付明治十五年四月四日松本輕罪裁判所ニ於テ右二本市郎次ニ對シ其所犯新法實施前ニ在ルヲ以テ刑法第二百十條ト舊法即チ改定律例第二百四十六條ヲ比照シ舊法ノ輕ニ從ヒ懲役三十日ニ處ストノ裁判言渡ニ對シ同裁判所檢察官上告ノ要旨ハ舊法ニ依リ懲役三十日ニ該ル者ナレハ明治十四年第八十一號布告ニ照シ重禁錮三十日ニ處スヘキ者ニシテ原裁判ハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ被告入市郎次ハ答辨書ヲ出サスヲ附帶ノ上告ヲ爲シ其要旨ハ該證書ノ變造ハ自己ノ所爲ニアラス差出人タル堅石由平カ自ラ描改セシ者ニテ其事ハ字傍ニ捺シアル印影ヲ見テ知ラルヘキニ原判官ハ此點ヲ查

私印私書ヲ偽造スル罪

究セズ徒々其字面ノ描改シアルノミヲ以テ輒ク被告人カ所爲ナリト
 斷定セラレシハ越權ナリト云フニ在リ又本院檢事ハ兩個ノ上告ニ對
 スル意見ヲ述ヘ且ツ附帶ノ上告ヲ爲シタリ其要旨ハ私書偽造ノ犯罪
 ヲル舊法ニ於テハ行使ノ既未ヲ分タスト雖モ新法ニ於テハ偽造既ニ
 成ルモ未タ行使セサル限リハ之レヲ罰スルヲ得サル者トス而シテ原
 裁判言渡ハ唯變造ノ所爲ノミヲ擧テ最要ナル行使ノ點ヲ明示セズ直
 チニ刑法第二百十條ニ比照シ來テ刑ヲ擬セシハ事實ノ理由ノ不備ナ
 ルヲ以テ破毀セラレノコトヲ希望スト云フニ在リ依テ判決スル左ノ如
 シ

第一條 被告事件果シテ舊法ノ輕キニ從ヒ懲役三十日ニ該ルモノナ
 ラシメハ其刑名モ亦舊法ニ從テ言渡スヘキコトハ刑法第三條ノ本旨
 ニシテ猶ホ明治十四年第八十一號布告第二條末項其舊法ニ依リ禁
 獄ニ處ス可キ時ハ輕禁錮ト言ハスシテ其舊刑名ニ從テ例ノ如シト

雖モ原裁判言渡ハ本院檢事附帶上告ノ如ク該犯罪ノ最要點タル行
 使ノ如何ヲ明示セサレハ之レヲ新法ニ比照シテ罰ス可キ者ナルヤ
 否ヤヲ確認スルニ由ナキヲ以テ原裁判所檢察官カ上告ニ係ル擬律
 ノ點ハ未タ當否ヲ論述ス可カラサルモノトス

第二條 諸般ノ徵憑中ニ就テ其信認スル處ヲ採リ心証ニ供シ以テ事
 實ヲ斷定スルハ事實裁判官カ特有ノ職權タリ故ニ假令ヒ原判官ニ
 於テ字面ノ描改ノミヲ採テ事實ノ判定ヲ爲シタル者トスルモ以テ
 越權ト謂フ可カラサルニ依リ被告人附帶上告ハ理由ナキ者トス

第三條 私書偽造罪ハ舊法其行使ト否トヲ分タスト雖モ新法即チ刑
 法ニ於テハ其行使ニ着手シタル以上ニアラサレハ其罪成立タサル
 者トス然ルニ原裁判言渡書ヲ審按スルニ唯變造シタリトノ所爲ヲ
 擧テ行使ノ模様ヲ明示セズ直チニ刑法第二百十條ニ比照シ來テ刑
 ヲ擬シタリ是レ本院檢事附帶上告ノ通り事實ノ理由不備ニシテ乃

テ治罪法第三百四條ノ規則ヲ侵シタル不法ノ裁判ナリトス
此ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更
ニ適法ノ裁判ヲ受ケシムル爲メ被告事件ヲ長野輕罪裁判所ニ移ス者
也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年三月十日

裁判長判事 大塚 正男 專任判事 高 木 勤

判事 山根 秀介 同 土師 經典

同 昌谷 千里 書記 上田 庸 熙

〔要領〕事實ノ判定ヲ爲スハ裁判官固有ノ特權ナレハ他ヨリ之ヲ動かス
ヲ得ス

偽書ノ効果消滅ニ歸スルモ一旦犯シタル偽造ノ罪ハ湮滅セサル
モノトス

住所身分職業畧之

江 戸 太 一 郎

年 齡 畧 之

右太一郎カ被告事件ニ付明治十五年六月五日松江輕罪裁判所ニ於テ
被告ハ明治十五年一月中江戸〔カタ〕ノ戸主ヲ廢シ江戸孫石衛門ヲ戸主
トスル願書ヲ詐爲シ管轄郡役所ヘ差出認可ヲ得タル者トシ刑法第二
百十條ニ照シ四月ノ重禁錮ニ處シ四圓ノ罰金ヲ附加シ仍ホ同法第二
百十二條ニ依リ六月ノ監視ヲ付スル旨言渡シタル裁判ニ對シ被告太
一郎上告爲シタル要旨ハ右戸主廢立ノ願書ハ〔カタ〕ノ承諾ヲ得テ調成
シタルモノニシテ被告ガ自儘ニ作爲セシモノニアラス殊ニ其印形ハ
管テ〔カタ〕ノ命ニ依リ購求シ與ヘタル同人ノ實印ニ相違アラサレハ刑
法第二百十條等ノ處刑ヲ受クヘキ謂レナキニ之ヲ該條ニ該ル者トナ
シ重禁錮等ノ處斷アリシハ不法ナルノミナラス其刑ヲ言渡ニ右條中

私印私書ヲ偽造スル罪

何レノ項ニ依リシヤチ明示セサルハ即チ法律ノ理由ナクモノニシ
テ是亦違法ノ言渡ト云ハサルヲ得ス又假ニ右願書ヲ被告ノ偽造ニ係
ルモノト見做スモ該願意ノ聞届指令ハ其後管轄郡役所ヨリ取消トナ
リタルニ付テハ偽書ノ效果消滅シ從テ其罪モ墮滅ニ歸スヘケレハ旁
以テ原裁判ノ破毀ヲ求ムト云フニ在リ原裁判所檢事補岸本重整ニ於
テハ原裁判適實ニシテ上告其當ヲ得サルトノ旨趣ヲ答辨セリ茲ニ專
任判事ノ報告書ニ依リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スルヲ左ノ如
シ

原裁判所ニ於テ被告ノ所爲ハ私書偽造シ之ヲ行使セシモノト認定シ
タルハ事實裁判官固有ノ特權ナレハ他ヨリ之ヲ動ス可カラサルハ勿
論假令其偽書ノ效果消滅ニ歸スル速一旦犯シタル偽造ノ罪ハ墮滅ス
ルキモノニアラサレハ是等ノ事由ヲ以テ原裁判ノ破毀ヲ請求シ得可
カラサルモノナリ而テ法律適用ニ至テハ單ニ刑法第二百十條ニ依リ

トセシハ不備ナルモノ、如キト雖モ該條第二項ニ其餘ノ私書ヲ偽造
又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ一年以上一年以下ノ重禁錮ニ處シ
二圓以上二十圓以下ノ罰金ヲ附加ストアリテ其範圍内ニ於テ重禁錮
四月罰金四圓ヲ言渡シタル者ナレハ全ク法律ノ理由ヲ附セサルニア
ラス又齟齬セシ廉之ナキニ付之ヲ以テ破毀ノ原由トナスヲ得サルモ
ノトス仍テ治罪法第四百二十七條ノ規則ニ法リ該上告ハ棄却スル者
ナリ

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年三月廿七日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典

判事 山根秀介 同 高木 勤

同 昌谷千里 書記 岩田 鍊

〔要領〕他人ノ印影ヲ盗用シ金額借用証書ヲ偽造シ其貸主タルモノニ交

私印私書ヲ偽造スル罪

付シタルモ未タ金圓ヲ收受セサル前發覺シタルハ其証書偽造ノ罪ハ未遂犯ニシテ而シテ印影盜用ノ罪ハ既遂犯トス

住所身分職業畧之

小池濱次郎

年齡畧之

同

小池九重郎

同

右兩名カ印影盜用證書偽造ノ被告事件ニ對シ明治十五年七月二十一日長野輕罪裁判所ニ於テ刑法第二百八條第二項ニ照シ未其事ヲ遂ケサルモノトシ同法第二百一十一條第百十二條ニ依リ一等ヲ減シ濱次郎ハ重禁錮四月罰金四圓監視六月九重郎ハ二十歲未滿ナルヲ以テ仍ホ同法第八十一條ニ從ヒ又一等ヲ減シ重禁錮三月罰金三圓監視六月ノ

刑ヲ言渡シタル處同裁判所檢事補小川俊一ニ於テ之ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲シタル要旨ハ印影盜用ノ罪ハ已遂犯ナルヲ未遂犯ナリトシ又証書偽造ノ罪ヲ問ハサリシハ共ニ不當ナリト云フニ在リ茲ニ專任判事ノ報告書ニ據リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ原宣告書ニ依レハ被告小池九重郎ハ實兄小池榮作ノ實印ヲ竊ニ持出シ被告小池濱次郎ト謀リ榮作ヲ負債主トナシタル金額借用証書二通ヲ偽造シ該盜印ヲ押捺シ其內金額九十圓ノ証書一通ヲ金策ノ爲メ濱次郎ヨリ池田豐作ヘ交附シタルモ金員ハ未タ收手セサル前事發露セシモノナリト承審官ニ於テ被告カ犯罪ノ事實ヲ確認スル處ナリ然レハ則チ其証書偽造ノ罪ハ未遂犯ニシテ印影盜用ノ罪ハ已遂犯ト爲シ刑法第二百十條第一項同第二百一十一條及ヒ同法第二百八條第二項同第二百一十二條ニ照シ仍ホ九重郎ハ二十歲未滿ナルヲ以テ同第八十一條ニ依リ本刑ニ一等ヲ減シ處斷ス可キモノトス然ルニ原裁判ハ證書偽造ノ罪

私印私書ヲ偽造スル罪

ヲ不問ニ附シ私印盗用罪ヲ未遂犯トシテ斷了セシハ法律適用ヲ誤タル不當ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ法リ本院ニ於テ直ニ裁判スル左ノ如シ

小池 濱次郎
小池 九重郎

前ニ辨明スル理由ナルヲ以テ被告兩名カ犯罪ノ事實ハ原裁判官ノ確認スル處ニ依リ刑法第二百十條第一項同第二百一十一條及同法第二百八條第二項ニ該ルヲ以テ同法第百條第三項ニ依リ犯罪重キ同第二百八條第二項ニ從ヒ濱次郎ハ重禁錮四月十五日ニ處シ罰金三圓七十五錢ヲ附加ス九重郎ハ二十歳未滿ナルニ依リ本刑ニ一等ヲ減シ重禁錮三月十五日ニ處シ罰金三圓ヲ附加ス仍ホ同法第二百十二條ニ依リ各六月ノ監視ヲ附加スルモノナリ

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年四月九日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典
判事 山根秀介 判事 高木 勤
書記 味岡禮質

(要領) (一)被告人ノ伯父ヲ証人ト爲シ其証言ヲ採用シタルハ治罪法第百八十一條ニ違背シタル越權ノ處分ナリトス
(二)新舊法ヲ比照スル場合ニ於テ舊法ノ刑期新法主刑ノ刑期內ニ在ルハ新法ニ從ヒ處斷ス可キモノトス

住所身分職業畧之
玉垣安太郎

年齡畧之

偽造証書被告事件ニ付明治十五年八月九日神戸輕罪裁判所ニ於テ被告玉垣安太郎カ所爲ヲ審理シ被告人ハ中村久右衛門ニ差入タル金百私印私書ヲ偽造スル罪

十圓ノ借用証書ニ擅ニ玉垣安太郎外二名ヲ記入シ借主ト爲シ持合ノ印章ヲ押捺シタル者ト判定シ所犯新法施行以前ニ在ルヲ以テ刑法第三條ニ原キ新舊法ヲ比照シ舊法ニ於テハ改定律例第二百四十六條ニ依リ不應爲ニ該リ新法ニ於テハ刑法第二百十條第一項ニ依リ犯時十六歲未滿ナルニ付刑法第八十條及ヒ第七十條ニ照シ二等ヲ減シ重禁錮二月以上二年以下ニ該ルヲ以仍ホ明治十四年第八十壹号布告第六條同十二條ニ照シ其輕キ舊法ニ從ヒ不應爲重キニ問ヒ懲役七十日ニ處斷セリ

被告玉垣安太郎ハ之ヲ不法トシ上告ヲ爲シタリ其趣旨ヲ五項ニ開載スルモ之ヲ要スルニ被告人ハ正木シツヨリ金二十五圓ヲ借用シタルヲアレヒ証書ヲ差入タルニアラス中村久右衛門カ所持スル金百十圓ノ証書ハ被告人ノ關與セサル者ナリ其証ハ玉垣善太郎名下ニ押捺シタル同人店判ハ一目以テ其偽造タルヲ知ルニ足ル夫玉垣善太郎ハ

被告人カ同居ノ伯父ニシ且平素商業ノ補助ヲ爲ス者ナレバ若シ善太郎ノ店判ヲ犯罪ノ用ニ供セント欲セハ之ヲ盜捺スル易々タルノミ何ヲ苦ンテ乎其成シ難キ印ヲ偽削シ後ニ犯蹟ヲ表彰スルヲ爲サシヤ是レ事實上看破シ易キ者ナリ且急需ナラサル金圓ニ高利ヲ拂ヒ金百十圓ニ換ユルニ價八十圓ニ相當スル米十石ヲ領収スヘキ謂レモ之レ無キナリ抑本案ニ於テ原裁判所カ資テ以テカアリトスル證據ハ大江友三郎ニ渡シタル明治十五年四月十七日付ノ約定証ニ在リトス該証タルヤ無實証書即チ中村久右衛門カ所持スル連借証書ノ後書アレノヲ慮リ之ヲ取戻サシムルノ情緒切迫ナルヨリ輕易ニ友三郎草稿ノ儘之ヲ認メ渡シタルニ原因セシナリ又正木シツヨリ與ヘタル延期書簡ノ如キハ前ニ借用シタル金二十五圓ノ債主ハ中村久右衛門ノヲ以テ後ニシツヨリ承知シタルヲ以其猶豫ヲ請ヒタルノミ然ルヲ原裁判所ハ證據ヲ示サス輒シ被告人ヲ有罪トシ判決ヲ與ヘタリ其裁判言渡書

ニ舉示スル處ハ証人小西兵太郎外二名ノ証言參考人大江友三郎外一名ノ陳述及ヒ云々トアリテ其証人參考人ノ陳述ハ被告人カ犯罪ハ云々ト証シタルニ非ス然ルニ裁判官ハ何ニ因テ證據ト爲シタル乎其理由ヲ明示セス是レ治罪法第三百四條ニ抵觸スル者ニシテ同法第四百十條第九第十ニ原キ破毀ヲ求ムト謂フニ在リ

對手人檢事補三俣秀彦ハ被告人カ上告趣意ノ要領ハ已ニ公判廷ニ於テ辨論スル處ニシテ口頭無証ノ陳述ニ外ナラス原裁判ハ罪証判然ナルニ因リ事實ヲ明示シ相當ノ刑ヲ言渡シタル者ナレハ不當ノ廉ナキ旨ヲ答辨セリ

大審院檢事長渡邊驥ハ治罪法第四百十三條ニ依リ附帶上告ヲ爲シタリ其要領ハ三項ナリトス第一原裁判言渡書ニ前ニハ証人玉垣善太郎ト爲シ後ニハ被告人伯父ト爲シタリ果シテ伯父タラハ治罪法第百八十一條ニ依リ証人ヲラシムルヲ能ハサル者ナリ第二偽證書ヲ以テ得

タル金圓ハ詐欺取財ニアラスト云フ可カラス第三新舊ノ法ヲ比照シ舊法改定律例第二百四十六條ニ依リ不應爲重キ懲役七十日ニ該ルモノトスレハ刑法第百十條第一項ニ依リ同法第八十條ニ照シ本刑ニ二等ヲ減スレハ重禁錮二月以上二年以下トナル之ヲ明治十四年第八十一号布告ニ照スルハ新法ヲ輕シトス然ルチ舊法ニ依リ處斷セシハ比較ヲ誤リタル裁判ナリト開陳セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ニ從ヒ代言人齊藤孝治カ陳辨ヲ聽クニ上告趣意ヲ擴張シテ曰事實ノ認定ハ判官ノ特權ニ在リト雖モ何ノ証徴モナクシテ恣ニ爲シタル認定ハ固ヨリ上告權内ナリトス抑原裁判官カ認定シタル玉垣安太郎カ犯罪ニ對シ各証人等ハ事實ヲ知ラスト云ヒ參考人等ハ固ト本案被告ノ地位ニ立タル者ナレハ自己ヲ保庇スルハ當然ナリ又證據書類ノ本件ニ關シ証トナラサルヲハ其文意及ヒ事情ニ照シ觀察ヲ下ス時ハ明晰タル可シ然ラハ則原裁判所カ

私印私書ヲ偽造スル罪

犯罪ヲ認定シタルハ何ノ點ニ在ルカ毫モ犯蹟ヲ明示セズシテ擅ニ有罪視シタルハ法律ニ背戾シタリト檢事林三介ハ之ニ答へ陳辨スル處ハ本件上告ハ到底其理由ナキ者ト思考スレモ已ニ附帶上告ニ開示シタル如ク原裁判ハ頗ル瑣瑣アル言渡ニシテ就中其第一第三ノ二原由ニ因リ他ノ相當ノ裁判所ニ移サレシト望ム其第二ノ原由ハ本案審理ヲ待テ自ラ証明スヘシトノ旨ヲ辨明セリ仍テ裁判スルヲ左ノ如シ原裁判所ハ被告人ノ伯父玉垣善太郎ヲ証人ト爲シ其證書ヲ採用シタルハ治罪法第百八十一條ニ違背シ越權ノ處分タルヲ免レヌ又被告人ノ所犯ハ新法施行以前ニ在ルヲ以テ新舊ノ法ヲ比照シ改定律例第百四十六條及ヒ刑法第二百十條第一項同第八十條ヲ引用ス可キ者トスレハ明治十四年第八十一号布告第二條ニ原キ舊法ノ刑罰新法主刑ノ刑期內ニ在ルヲ以テ新法ニ從ハサル可ラス然ルチ舊法ヲ適用シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリトス而シテ其詐欺取財ノ犯罪ナルヤ否ハ本案

審理ヲ盡シタル上ニ非サレハ判定スル能ハス加之本案ハ上告趣意書ニ痛論スル如ク原裁判所ハ証人參考人等ノ陳述云々ト掲載アルモ其採用シタル點ハ那邊ニ在ル歟之ヲ推測スルニ由ナキ者ノ如シ如何トナレハ証人共ハ犯罪ノ事實ヲ証言シタルニ非ス參考人共ハ現ニ被告人ノ依頼ニ應ジ之ヲ承諾シ且專ラ貸借ニ關與シタル事實アレハ敢テ安太郎ノ犯罪ヲ証スルニ足ラス果シ然レハ二通ノ證據書類モ亦遽ニ偏信ス可ラサル者ナレハナリ故ニ事實ニ對スル上告ノ論點ハ採用スルニ由ナシト雖モ原裁判モ又事實ノ理由不備タルヲ免レヌ且玉垣善太郎ノ名下ノ摺印ハ鑑定人チノ其偽タルヲ証言セシメ而シテ其犯罪ハ何人ノ手ニ成リタルヤ裁判言渡書ニハ概シテ被告人カ持合ノ印ヲ押捺シト掲載アレ共偽印ヲ以テ持合印ト同視ス可ラサルハ勿論ニ之レヲ默々ニシタルハ最モ擅横ノ處分ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ專ラ附帶上告ノ論旨ニ原キ治罪法第四百二十八

條ニ從ヒ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ大坂輕罪裁判所ニ移シ審判
セシムル者也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月十八日

裁判長判事 西岡 逾明

專任判事 山根 秀介

判事 大塚 正男

判事 高木 勤

判事 昌谷 千里

書記 山縣 武男

〔要領〕罪ヲ組成スル必要ノ條件ニ付キ事實ノ理由ヲ明示セスシテ刑ヲ
言渡シタルハ治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリト
ス

住所身分職業畧之

初 田 猪 之 吉

年齡畧之

權利義務ニ關スル証書ヲ增加行使シタル被告事件ニ付明治十五年九
月十九日大津輕罪裁判所ニ於テ右被告猪之吉カ所爲ハ本件丁号証復
生講仕法記ト題スル帳簿ノ餘白ヘ前顯ノ講法通云々ノ文字ヲ記入シ
行使シタル犯罪ナリトシ刑法第二百十條初項ニ照シ重禁錮五月罰金
五圓ニ處シ刑法第二百十二條ニ依リ監視六月ニ付シ犯罪ノ用ニ供シ
タル丁号復生講仕法記及戌号柏木八郎平ヨリノ保証書ハ沒収シ差押
タル已号復生講差引証ハ還付スト言渡シタリ被告初田猪之吉ハ該裁
判ニ對シ上告ヲ爲シタル趣旨ハ被告人ニ於テ明治八年中復生講ト唱
ヘ頼母子講ヲ創設シ示來丁号講則ニ原キ繼續シ來リタル處明治十五
年二月一日ニ至リ番外甲号証ノ如ク本講仕法ヲ改正シ更ニ從前ノ加
盟者ヲシテ新簿冊ニ記名調印セシメタルハ即チ丁号簿冊ハ既ニ消滅
ニ屬シタルニ因リ被告人ニ於テ故ラニ明治十五年二月下旬ニ至リ前
顯云々ノ文字ヲ記入スルノ謂レ無ク又其効力モ生セサルナリ假ニ文

私印私書ヲ偽造スル罪

字ヲ増加行使シタリトスルモ他ノ私訴事件ニ付參考ノ爲メ提供シタル迄ニシテ被害者等ニ對シ何ノ損益ヲ及ホスヘキヤ之ヲ再說スレハ加盟者即チ被害者等ハ已ニ明治十五年二月一日ヲ以テ改正新簿ノ約定ニ從ヒ之ヲ履行シ舊簿即チ丁号証仕法記ノ如キハ消滅ニ屬シ何等効力ナキコト言テ俟タス然ルチ原裁判所ハ之ヲ以テ權利義務ニ關スル証書ト爲テ刑法第二百十二條ヲ適用シタルハ事實及ヒ擬律ノ錯誤アル裁判ニ付破毀ヲ求ムト謂フニ在リ對手人檢事補森田勉ハ被告人ニ對シ言渡シタル裁判ハ罪証明白ニシテ毫モ誤謬ナキ旨ヲ答辨セリ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ檢事池上三郎ノ意見ヲ聽クニ上告趣旨ニ對シテハ敢テ陳辨スルチ必要トセス茲ニ刑法第二百十條第一項ヲ適用スル場合ニ於テハ必スヤ其權利義務ニ關スル人即チ被害者ノ誰ナルト其証書ノ性質并ニ効用ト其行使手段如何トノ事實理由ヲ明示セサル可ラス何トナレハ若シ此等ノ要件ヲ具備セサルハ同

條ノ罪ヲ組成セサレハナリ然ルニ原裁判書ニ因リ証書ノ性質ト行使ノ手段ハ聊カ視ルニ足ル處アルモ其最モ必要ノ條件タル被害者ノ誰ナルト變造ニ付テノ効用如何トヲ明示セサルノミナラス戌号柏木八郎平ヨリノ保証書ハ沒収スト言渡シタルモ其沒収スヘキ理由ヲ付セサルハ俱ニ治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリト信スルニ因リ更ニ相當ノ裁判所ニ移サレノコト望ムト開陳セリ仍テ裁判スルコト左ノ如シ

原裁判言渡書ニ因リ訴訟書類ヲ監査スルニ本件復生講仕法記ハ明治八年五月ニ創設約定シタルモ明治十五年二月ニ至リ更ニ帳簿ヲ改製シ加盟調印ヲ爲シタリ故ニ明治八年中調製シタル舊簿ノ連署押印ハ之ヲ抹殺シ自ラ消滅ニ屬シタリ然レハ則チ丁号証增加シタリト云フ文書ハ何ノ効力ヲ有シ又ハ權利義務ニ關スル証書トハ認定シタル歟又柏木八郎平ノ保証書ハ何ノ故ニ沒収セシ歟其理由ヲ知ル由無シ到底

原裁判ハ事實ノ理由ヲ明示セサル不法ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第九ニ定メタル上告ノ原由アル者トス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ京都輕罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムル者也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月十七日

裁判長判事 西岡 遼 明

專任判事 山根 秀介

判事 高木 勤

判事 昌谷 千里

判事 小村 壽太郎

書記 山縣 武男

〔要領〕偽造ノ証書ニ証券印紙ヲ再貼用シタルモ固ヨリ其証書ハ法律上無効ノモノナルヲ以テ再貼用ノ所爲ハ刑法第九十九條ノ問フ所ニアラス

住所身分職業畧之

川 端 嘉 平 次

年 齡 畧 之

証書偽造及證券印紙再貼用被告事件ニ付明治十六年五月三日和歌山輕罪裁判所ニ於テ刑法第二百十條及第二百十二條第八十九條第九十條ニ依リ重禁錮二月罰金二圓監視六月ニ處シ仍ホ明治七年第八十一號布告第十二條ニ依リ罰金十圓ヲ科スト言渡シタル裁判ニ對シ本院檢事長渡邊驥ハ非常上告ヲ爲シタリ其要旨タル本案被告事件ハ私書偽造ト印紙再貼用トノ二罪ナルヲ以テ再貼用ノ罪ハ刑法第九十九條ニ依リ偽造ノ罪ハ同法第二百十條ニ依リ數罪俱發ナルヲ以テ其情狀最重キ一罪ヲ以テ處斷スヘキモノナルニ原裁判所カ刑法第二百十條第二百十二條第八十九條第九十條ニ依リ重禁錮二月罰金二圓ニ處シ監視六月ニ附シ而シテ明治十四年第七十二號布告第六條ノ明文アルニモ係ハラス明治七年第八十一號布告第十二條ニ依リ罰金十圓ト

私印私書ヲ偽造スル罪

ヲ併科シタルハ即チ通常ノ刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル不法ノ裁判ナ
ルヲ以テ之カ破毀ヲ求ムト云フニ在リ仍テ本院檢事加納久宣ノ意見
ヲ聞キ判決スル左ノ如シ

證書偽造ノ罪ト印紙再貼用ノ罪ト併發シタル場合ニ於テハ其偽造ノ
罪ハ刑法第二百十條ニ擬シ再貼用ノ罪ハ明治十四年第七十二號布告
第六條ニ依リ刑法第九十九條ニ擬シ仍ホ數罪俱發例ニ照シ所犯情
狀最重キニ從ヒ處斷スヘキハ論ヲ俟タスト雖モ其證書ノ偽造ニ係リ
法律上無効ノモノナル時ハ證券印紙ヲ貼用スルヲ要セサルハ勿論再
貼用スルモ刑法第九十九條ノ問フ所ニアラサルナリ抑々本件被告
カ所爲ハ原裁判官認定ノ如ク權利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ印紙ヲ
再貼用シテ之ヲ行使シタルモノナレハ原裁判所カ刑法第二百十條及
同法第二百十二條第八十九條第九十條ニ依リ重禁錮二月罰金二圓ニ
處シ監視六月ニ附シタルハ適當ナリト雖モ再貼用ヲ以テ論シタルハ

乃チ罪トナラサル事實ニ對シ刑ヲ科シタル不法ノ裁判ナリト判定ス
右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百三十一條ニ基キ原裁判官言渡中印紙
再貼用被告事件ニ係ル部分ヲ破毀シ其所爲ニ對シテハ本院ニ於テ更
ニ無罪ノ言渡ヲ爲スモノ也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十一月二十四日

- 裁判長判事 鳥居 斷三
- 專任判事 小村 壽太郎
- 判事 伴 正 臣
- 判事 昌 谷 千里
- 判事 園 田 弘
- 書記 松 岡 照之

(要領)一時ノ便宜上ヨリ他ニ協議ヲ爲サスシテ戶長及筆生ノ間ニテ願
書ノ肩書ニ總代人兼ト記載シタルモ更ニ村民ヲ害スルノ意ナケ
レハ民事上ノ關係ニ止マリ刑事上詐爲文書ノ責ヲ負ハシムルヲ
得ス

私印私書ヲ偽造スル罪

住所身分職業畧之

山崎里英

年齡略之

全

栗原金太郎

全

右兩名カ被告事件ニ付明治十六年六月十四日浦和輕罪裁判所於テ被告ハ川越警察署建築理事者タル栗原庄藏ノ依頼ヲ受ケ該建築費ヲ村民ヨリ徵集シテ之ヲ獻納センカ爲メ曾テ村民ニ協議ヲ遂ケタルナリ又惣代人ノ資格ヲ有セサルニ共謀シテ擅ニ金太郎ノ肩書ニ惣代人ト記載シタル獻納金願書ヲ造リ之ヲ埼玉縣廳ニ差出シ遂ニ其許可ヲ得タルノ所爲ニ對シ刑法第二百十條第二項同第二百十二條及ヒ同第八十九條同第九十條ニ照シ二等ヲ減シ被告ヲ重禁錮十六日ニ處シ罰

金二圓ヲ附加シ尙ホ監視六月ニ付スト言渡タル裁判ヲ不當ナリトシ被告等カ上告爲シタル要領ハ被告人山崎里英ハ下與富村戸長ニシテ栗原金太郎ハ筆生ヲ勤ムルモノナリ然ルニ埼玉縣川越警察署新築相成リ其理事者タル栗原省三ヨリ隣村ノ比例即チ一戸廿四錢九厘ノ割合ヲ以テ至急獻納願書可差出旨〔明治十六年六月十一日原裁判所へ捧呈シタル證據書ヲ云フ〕申越サレタリ然ルニ本村ハ明治十五年十二月中村會議員并惣代人等退職シタルヲ以テ之カ協議ヲ爲ス可キ者無之故ニ村民重立タル者ヨリ協議費ニ關スル事柄ハ當分ノ内村民一同ノ決議ヲ待タス斷行致サセ度旨豫テ談シ有之故ニ二百三十有餘名ノ村民悉ク役場ニ招集スルモ徒ラニ雜沓ヲ極メ僅廿四錢九厘ノ事柄ヲ議スルニ一日ヲ消光スルハ其利害不相償ヲ斟酌シテ村民一同ハ圖ラサリシナリ云々又獻納金願書ニ總代人ト記載シタル所以ハ決テ他意アルニ非ス從來協議費ニ關スル事柄ニ付テハ總テ村會ノ決議ヲ經惣代理人之レニ調印シ來リ

私印私書ヲ偽造スル罪

續行久シキヲ以テ知ラス故ニ記載シタルモノニシテ決テ惡意アリテ
 記載セシ者ニ非ス云々續陳シ該刑ニ處分セラレタルハ不當ナリト云
 フニアリ同裁判所檢事岡田豊ハ附帶上告ヲ爲シタリ其要領ハ抑モ被
 告等カ居村ハ村會議員并惣代人退職故ニ村民重立タルモノハ當分ノ
 内協議費等ニ關スル事件ハ村民ノ決議ヲ待タズ斷行スヘキ旨囑托シ
 タルコトハ被告等カ上告書ニ陳述スルノミナラス其付托ヲ爲シタル同
 村渡邊平右衛門外六人ノ證明モ符合セリ然レモ獻金事件ヲ協議費ト
 同視シタルハ一時ノ誤謬粗忽ノミ豈ニ之ヲ有心故造ト云フヘケンヤ
 況ンヤ他人ヲ害スルノ意思ナキヲヤ然レモ裁判官カ文書偽造トナシ
 タルハ其願書ノ肩書ニ戸長并惣代人ト記シタル點ニアルモ其所爲ノ
 果シテ罪ヲ犯スノ意ナクシテ一時ノ誤謬粗忽ニ出テタルコト明ナル上
 ハ其罪ノ成立セサルヤ知ルヘキナリ且本件告訴ノ原由ヲ釋スルニ全
 ク該村二三ノ反對黨カ被告等ヲ忌避スルノ所爲ニ出テタルモノト思

料スト論辨セリ

大審院於テ專任判事ノ報告ニ據リ立會檢事加納久宣ハ檢事岡田豊カ
 附帶上告ノ如ク被告等カ所爲ハ村民ノ爲メ善良ノ意思ヨリ爲シタル
 者ニシテ村民ヲ害セントスルノ意思ヨリ出テタルモノニアラサルハ
 明瞭ナルニ反テ有罪ノ裁判ヲ下シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリトノ意
 見ヲ述ヘタリ因テ之ヲ審按スルニ被告共ハ川越警察署建築費獻金ヲ
 其理事者ヨリ促カサル、モ當時村會議員殘ラズ退職中ニ在ツテ之ヲ
 協議スルニ由ナク又村民悉ク招集スルモ僅カニ一戸廿四錢九厘宛ノ
 出金ニ一日ヲ消光スルハ其利害相償ハサルモノト斟酌シ被告人山崎
 里英ハ戸長栗原金太郎ハ筆生ナルヲ以テ金太郎ノ肩書ニ總代人兼ト
 記載シ獻金願ノ許可ヲ受ケタルニアレハ村民於テ之ヲ專斷ノ所爲ナ
 リト思慮セハ該出金ヲ差出サ、ルモ自己ノ權内ニアリ若シ又之ヲ訴
 訟スル等ノコトアルモ單ニ民事上ニ止ルヘキモノナリ將タ縣廳ヨリス

私印私書ヲ偽造スル罪

ルモ亦敢テ詐爲文書ノ責ヲ負ハシムルニ至ラザルヘシ何ントナルニ
其所爲タル被告於テ毫モ村民ヲ害セントスルノ惡意ニ出テタル念慮
ト認ムヘキ廉ナケレハナリ況ンヤ村會議員殘ラス退職ノ登時ニ在ッ
テ既ニ協議費ノ支出金ハ月長即チ被告人山崎里英ノ斷行ニ任セ過キ
タルユリ協議費ト同視シテ之ヲ專斷シ獻金願書ニ惣代人兼ト記名シ
タルハ原書類ニ就テ見ルモ明ラカナルニ於テオヤ然ルニ原裁判所ハ
被告ニ對シ刑法第二百十條第二項及ヒ同第二百十二條等ヲ適用シタ
ルハ擬律錯誤ノ裁判ナリトス因テ治罪法第四百二十九條ニ則リ原裁
判官渡ノ全部ヲ破毀シ大審院ニ於テ直チニ判決スル左ノ如シ

山崎里英
栗原金太郎

前條ノ理由ナルヲ以テ被告等ハ刑法第七十七條ニ據リ治罪法第三百
五十八條同第二百二十四條ニ從ヒ無罪放免スルモノ也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十二月十一日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 上山惟清
判事 中嶋盛有 判事 伴正臣
判事 土師經典 書記 味岡禮賢

〔要領〕証書變換ノ罪アリト爲スモ其証書ノ効力如何ト行使未行使トノ
事實ノ理由ヲ明示スルニ非サレハ未タ以テ罪ノ成否ヲ判定スル
ニ由ナキモノトス

証書變換被告事件ニ付明治十五年九月廿六日高知輕罪裁判所ニ於テ
右被告前田鳴子ハ澤田恭助名義ノ借用証書中受人ノ名下押印ナキヲ
以テ有合ノ印ヲ擅ニ押捺シ其証書ノ体面ヲ變換シタル者ト判定シ刑
法第二百十條第一項ニ依リ重禁錮六月ニ處シ罰金拾圓ヲ附加シ仍ホ
同法第二百十二條ニ依リ監視十月ニ付ストノ裁判官渡ヲ爲シダリ

私印私書ヲ偽造スル罪

被告前田鳴子ハ右裁判ニ對シ上告ヲ爲シタリ其趣旨タルヤ被告ハ告
 訴人澤田恭助ヨリ差入レアル借用證書ニ受人美正治三郎ノ名下ニ捺
 印ナキヲ以テ其体面ヲ完備ナラシメシメテ爲メ治三郎ノ名下ニ有合ノ印
 ナ押捺シタルマテニシテ其受人ニ對シ義務ノ執行ヲ請求スルノ念慮
 更ニ之レナク且被告カ押捺シタル印影ハ受人治三郎ノ眞印ト全ク其
 形体ヲ異ニシ毫モ權利義務ニ關係ヲ及ホスヘキモノニ非ザレハ之ヲ
 以テ權利義務ニ關スル變換ト謂テ得サルナリ然レハ原裁判所カ刑法
 第二百十條ヲ適用シ刑ノ言渡ヲ爲シタルハ不當ノ裁量シキモノニシ
 テ即チ事實理由ノ不備ト擬律ノ錯誤ト二箇ノ點ニ付破毀ノ原由アル
 不法ノ裁判ナリト謂フニ在リ

原檢察官ハ被告カ犯罪ノ證據明確ナルヲ以テ上告ノ趣旨ハ到底其効
 ナキモノノ思量トスル旨答辨セリ本院檢事加納久宣ハ其意見ヲ陳述シ
 且附帶ノ上告ヲ爲シテ曰刑法第二百十條ニ賣買貸借贈遺交換其他權

利義務ニ關スル證書ヲ偽造シ又ハ増減變換シテ行使シタル者ハ云々
 ト在テ偽造若クハ増減變換ト行使トノ二箇ノ條件具備スルニ非サレ
 ハ本條ノ罪ヲ組成セサルナリ原裁判言渡ニ因リ證書變換ノ事實ハ見
 ルニ足ルヘキモ果シテ其證書ヲ行使シタル者ナルヤ否ハ其理由ノ明
 示ナキヲ以テ之ヲ知ルニ由ナシ畢竟原裁判言渡ハ事實ノ理由ヲ缺キ
 タル不法ノ裁判ナルニ付之ヲ破毀シ相當ノ裁判所ニ移スノ言渡アラ
 ノヲ求ムト仍テ判決スル左ノ如シ

抑モ證書變換ノ罪ヲ構造センニハ其證書ノ効力如何ト行使未行使ト
 ノ事實理由ヲ明示セサル可カラス何トナレハ若シ其證書ノ偽造ニ係
 リ法律上無効ノモノナル時ハ之ヲ變換スルモ權利義務ニ關係ヲ及ホ
 スイナク又有効ノ證書トスルモ行使ノ所爲ナキニ於テハ刑法第二百
 十條ノ罪ヲ組成セサルヲ以テナリ本件被告ニ對シ原裁判所カ言渡シ
 タル裁判ヲ閱スルニ明治十四年三月十日付借主澤田恭助受人美正治

私印私書ヲ偽造スル罪

三郎トアル金三百五拾圓ノ證書ニ受人治三郎名下ニ押印ナキヲ以テ
 明治十五年三月二十八日印判師楠瀬一樹ヨリ買取リタル印判ヲ擅ニ
 押捺シ證書ノ体面ヲ變換シタルヲ(中略)明白ナリト確認ス云々トアリ
 ト雖其變換ニ係ル證書ハ澤田恭助ト被告トノ間ニ成立チタル真正ノ
 モノナル歟又如何ナル手段ヲ以テ其証書ヲ行使シタル歟其理由
 ノ明示ナキヲ以テ罪ノ成否ヲ判定スルニ由ナシ要スルニ原裁判言渡ハ
 事實ノ理由不備ニ係ル不法ノ裁判ニシテ則チ治罪法第四百十條第九
 項ニ當ル破毀ノ原由有ルモノトス因テ同法第四百二十八條ニ基キ原
 裁判ノ全部ヲ破毀シ被告事件ヲ松山輕罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシ
 ムモノ也

大察院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十二月廿八日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 小村 壽太郎

判事 伴 正 臣 判事 薄 井 龍之

判事 園 田 弘 書記 澤 野 潛 藏

(要領)被告事件ノ判定ヲ爲スニ事實適當ノ理由又其適當ノ証憑ヲ舉示

セサルハ治罪法第三百四條ノ法律ニ背反シタルモノトス

犯罪ヲ徵スルニ足ラサルモノヲ以テ斷罪ノ証憑ニ援引シタルハ

越權ノ處分ニ係ルモノトス

住所身分職業畧之

檢 井 幸 三 郎

年齡畧之

右幸三郎カ偽造証書行使被告事件ニ對シ明治十六年一月十八日高田
 輕罪裁判所ニ於テ裁判シタル判文ニ曰ク(前略)被告ハ明治七年中庄五
 郎名前ノ返リ証書ヲ偽造シ同人ノ印影ヲ盜用シ証書偽造シ置キ庄五
 郎ノ死去シタルヲ奇貨トシ明治十五年二月ニ至リ當時ノ戶主ナル茂

私印私書ヲ偽造スル罪

太郎ニ係リ高田始審裁判所へ出訴ナシタルモノトス因テ之ヲ法律ニ照スニ人ノ印影ヲ盗用シ証書偽造シタル所爲ハ刑法實施以前ニ係ルヲ以テ舊法ハ改定律例第二百五條及第二百四十六條ニ依リ并懲役七十日ニ該ルモ三年ヲ歴テ發覺シタルヲ以テ同法舊惡減免例圖ニ照シ其罪ヲ免スルト雖モ右偽証ヲ行使シタル所爲ハ刑法第二十條ニ四月以上四年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ附加ストアルニ依リ被告幸三郎ヲ重禁錮十月罰金十圓ニ處シ同法第二百十二條ニ依リ監視一年ヲ附スト言渡シタリ被告幸三郎ハ此裁判ヲ不法ナリトシ上告セリ其旨趣ハ原裁判所カ被告ヲ有罪トセラレタル點ハ七項ニ外ナラス其一告訴人ニ於テハ返リ証ハ偽造ニ係ル旨陳述セシトノリ其二証人楡井喜十郎ニ於テハ返リ証ニ受人ニ立テタルノ無之同人名下ノ印影ハ輪郭ノミニテ不明ナリトノリ其三証人戸長尾島賞傳治ニ於テハ明治七年中ノ割賦取立帳ニハ四郎治ノ名前記載シテ

明治八年六月中ノ民費割賦帳ニハ庄五郎ノ名前記載シアレハ八年中ニ至リ庄五郎へ譲リ渡シタルモノト思ハルトノリ其四鑑定人小林利太森尙行ニ於テ返リ証ノ筆跡ハ庄五郎ノ手跡ニアラサルトノリ其五返リ証ニ明治七年申ノ二月日トアレモ明治七年ノ十二支ハ成ナリトノリ其六四郎治ト口約ナシタル証憑ナキトノリ其七源金ヲ渡シ四郎治カ所有權ヲ得タルモノヲシテ所有權ナキ庄五郎ニ於テ該証書ヲ渡スヘキ道理ナキトノリ右七個ノ點ニ依リ被告ハ七年中庄五郎名前ノ豫リ証書ヲ偽造シ同人ノ印影ヲ盗用シ証書ヲ偽造シ置キ庄五郎ノ死去シタルヲ奇貨トシ云々ト裁判セラレタルハ事實ノ理由齟齬セシモノト謂ハサルヲ得ストテ右第一ヨリ第七ニ至ル辨駁ヲ爲セリ第一ハ告訴人カ偽証書ナリトノ一言ヲ以テ上告人即被告カ犯罪構造ノ一具トセラレタルハ何等ノ理由有テノコトナルヤ原判文中其明示ナキヲ以テ眞理ノ在ル所ヲ知ルニ由ナシト雖トモ抑告訴人ハ返リ証ヲ差

入タル當人ニアラサレハ決テ其眞偽ヲ知ルノ道理ナシ右返リ証ヲ差入タルヤ否ヤハ亡庄五郎ニアレハ其眞偽ヲ知ラサル告訴人カ一片ノ言ヲ以テ犯罪ノ用具トナシ裁判セラレタルハ事實ノ理由ヲ明示セサル裁判ナリトノ事第二檢井喜十郎ノ証言トハ如何ナル証言シヤ受人ニ立チタルコトナシト言フコ止リテ上告人ニ印影ヲ盜用サレタリトノ言ニ非ス云々其喜十郎ノ受印ハ盜用ニ係ルモノトスルモ其盜印セシハ亡庄五郎ナルヤ上告人ナルヤ知ルニ由ナキモノナリ其故ハ上告人カ第二號証ニ(庄五郎ニ印形ヲ預ケタルコトモアレハ其節盜用セラレタルモノカ自分ハ知ラス)ト喜十郎カ証明セシニ非スヤ夫レ然リ此証人喜十郎ノ言ハ上告人利益トナルモ決テ不利益トナルヘキ証言ニ非ス上告人ノ罪ヲ斷スル用具トハ毫モナラサルヤ明了ナリ將タ喜十郎ノ受人タルヤ田地返リ証ノ効力ヲ論スルトキハ甚ダ必用ヲ欠クモノニシテ云々何ソ上告人カ苦心シテ盜用スヘキ道理アラサルナリ然ルニ

上告人即被告ノ利益ナル第二號証ト受人ノ有効無効ヲ判セス却テ有罪ノ証トナシ罪ヲ斷了セラレタルハ理由ヲ明示セス且理由ニ齟齬アル裁判ナリトノコト第三戸長尾島貴傳治ノ証言ニ民費取立帳ニ明治七年度ハ四郎治ノ名前記載シアリトノ一點ヲ以テ犯罪構造ノ一証トセラレタルハ頗ル不當ノ裁判ナリトス其故ハ從前ハ家名相續ト同時ニ財産相續ヲ爲スノ正式ノ例アルハ曾テ聞カス云々將タ亡庄五郎カ戸主トナリタルハ明治五年ナルコトハ告訴人其他各証人ノ陳述ニヨリテ明カナリ其際不動産ノ所有權モ得タルモノナリ然ルニ明治七年度ノ割賦取立帳ニ四郎治ノ名前カ記載アリシハ其當時ノ戸長カ疎漏ニ係ルモノ其疎漏タリシコトヲ証スルニハ枚舉ニ違アラスト雖トモ今其一二例ヲ舉クシテハ(要點ニ非スニ)ハ零ス云々以テ亡庄五郎カ明治七年中不動産所有權ノ有無ヲ斷定スル程ノ證據トスルニ足ラサルヤ明カナリ何トナレハ第六號証(零ス)ノ如ク明治十年年度ニ於テ地價帖整頓ノ後スラモ一ハ以

テ舊所有者タル死亡人ノ名ヲ以テ不動産ノ賣買ヲナシ一ハ以テ死亡人ノ名義ヲ以テ民費ヲ取立ル程ノ疎漏千萬ナル村落ノ戸長ナレハ云々事實理由ニ齟齬アル裁判ナリトノ第四鑑定人小林利太森尙行ノ鑑定ニ云々トアレヒ上告人ハ第一號証ノ手跡ハ何人カ書キタルモノナルヤ知ラズ又亡庄五郎ノ手跡トモ覺ヘスト豫審ニ申立タル迄ニテ亡庄五郎ノ手跡ナリトハ毫モ主張セサルナリ故ニ實ニ無用ノ鑑定ニシテ上告人ノ罪ヲ斷スル用具トハナラサルナリ云々事實理由ニ齟齬アル裁判ナリトノ事第五第一號証ニ申ノ二月トアレヒ七年度ハ成ニシテ申ニアラストテ之レヲ偽証ノ證據トセラレタルハ抑モ何等ノ理由ナルヤ凡ソ害惡ノ所爲ヲ爲スモノハ成ルヘク發露セサルニ注意スルハ人情ノ然ル所ナリ此理ニ由テ觀レハ偽證ヲ爲シ田地ヲ謀リ取ラントスル巧ミナルモノカ七年度ノ成カ申カノ如キ知り居ルハ普通ノ理ナリ若シ推知スル能ハサレハ書載セサルナリ何トナレハ田地返リ

証ニ十二支ノ必用ナラサルコトハ誰モ能ク知り居ルナリ然ルニ申ノ字ヲ記載セシハ其正當ノ所爲ナルヲ以テ執筆者知ラス知ラス從來ノ慣習ニテ相逢ノ申ノ字ヲ書載セシモ上告人ニ於テ必用ノ場合ニ非サルコト此等ノ點ニ眼ヲ付ケス今日ノ况狀ヲ顯シタルナリ論シテ此ニ至レハ此申ノ字ハ正當ノ場合ニアルヘキカ不正ノ場合ニアルヘキカトナレハ前言ノ如ク不正者ハ可成罪惡ノ發露ヲ防クニ注意ヲ爲スモノナレハ此等ノコトハナサ、ル等ナリ故ニ正當ノ所爲ノ申ノ字タルコトハ論理上明了ナリ然ルニ此申ノ字アルヲ以テ一罪構造ノ證據トシ罪ヲ斷セラレタル事實ニ依リ理由ノ齟齬アル裁判ナリトノ事第六楡井四郎治ハ豫審廷ニ上告人ト問答ノ際自白セシ如ク上告人カ所有スル漆ノ木ノ皮ヲ盜ミ見咎メラレ姦ヲ隱セシ程ノ不正ノ人ナレハ口約アルモ其証ナキチ奇貨トシ其實ニ反シタル陳述ヲ爲スナリ又口約アリト言ハ、自己ノ不利益ナルヲ以テ口約ナシト云フカ如キハ人情ノ然ル所

ナリ是等ノ口約ナキト云フ言ヲ以テ偽造罪ノ一具トナシヘキモノニ
 アラサレハ云々四郎治ハ告訴人ノ祖父ニシテ本案ニ付民事被告人ノ
 性質ヲ負フモノ旁四郎治カ口約ナキト云フカ如キハ斷罪ノ証トスル
 ニ足ラズ然ルニ普通證人ノ如クセラレ罪ヲ斷セラレタルハ不法ノ裁
 判ナリトノ事第七一旦源金ヲ出シ四郎治カ所有權ヲ得タルモノナレ
 ハ何ソ所有權ナキ庄五郎カ返リ証書ヲ渡スノ理ナシ云々ト裁判セラ
 レタルハ頗ル其當ヲ得サルナリ其故ハ亡庄五郎カ明治七年中不動產
 ノ所有權有無ノ點ハ前文第三ニ於テ辨駁シタレハ茲ニ贅セス其亡
 庄五郎ハ所有權ナキモノト假定スルモ同人ハ明治五年中戸主トナリ
 既ニ七年ハ亡庄五郎ハ四十九歳ニシテ四郎治ハ七十六歳ナリ此場合
 ニ於テ一家ノ利害ヲ擔任スル戸主庄五郎カ返リ証書ヲ渡スカ如キハ
 普通ノ道理况ンヤ所有權アル庄五郎ニ於テオヤ然ルニ返リ証ヲ渡ス
 道理ナシト判定セラレタルハ事實ニ由リ理由ノ齟齬アル裁判ナリト

ノ事右ノ如ク原裁判所カ犯罪ノ証憑トシテ明示セラレタル七個ノ點
 ニ對シ前段詳述辨駁セシ如ク一モ証書偽造盜印ノ証憑トナルモノナ
 シ抑モ原裁判ハ治罪法第三百四條ニ違背シ及ヒ第四百十條第九項ニ
 相當スルモノニ付原裁判ノ破毀ヲ求ムト云フニ在リ尙追申書ヲ以テ
 代官人ヲ差出シ上告旨趣ヲ擴張スル云々申立タリ對手人原檢事補堀
 小太郎ハ原裁判ハ適當ナリト答辨セリ
 大審院ニ於テ明治十七年二月二十七日治罪法第四百二十五條ノ公式
 ナ履行シ代官人本多潤ノ陳述隨テ立會檢事池上三郎ノ意見ヲ聽キ裁
 判スル左ノ如シ

上告ノ旨趣ニ因リ原判文ヲ觀ルニ原裁判所於テ被告幸三郎カ亡庄五
 郎ノ返リ証ヲ偽造シ亡庄五郎ノ印影ヲ盗用シタリト判定セシ其証憑
 ハ前上告文ニ掲ケシ七個ノ點ニ過キス此七個ノ事實ハ原一件書類ニ
 就テ細ニ監査スルニ此七個ノ點ハ一モ以テ被告カ証書ヲ偽造シ印影

私印私書ヲ偽造スル罪

盜用セシ証憑ト爲スニ足ラサルカ如シ然ルニ原裁判所カ被告ヲ証書
 偽造者印影盜用者ト判定セリ此場合ニ於テハ其偽造及ヒ盜印セシ事
 實適當ノ理由又其適當ノ証憑ヲ明示スヘキ筈ナルニ其判文ニ此事實
 ニ係ル適當ノ理由モ証憑モ舉示セサリシハ治罪法第三百四條ノ法律
 ニ背キタルモノトス而シテ原裁判所カ其判文ニ掲ケタル所謂七個ノ
 點ハ前段判定ノ如ク証書偽造印影盜用ノ証憑ト爲スニ足ラサルニ此
 七個ノ點ヲ以テ証書偽造印影盜用セシ証憑ニ援引シタルハ越權ノ處
 分ニ係ル不法ノ裁判ナリトス又テ假令返リ証ノ或ハ檢井茂太郎ニ對
 シ其効力ナキニ販スルトキト雖モ被告人カ現ニ証書偽造セシ証憑現
 ニ盜印セシ徵候ナキニ於テハ罪トナラサルモノ、如シ隨テ刑ヲ言渡
 シタルハ亦擬律ノ錯誤ニ係ルカ如シ要スルニ本件ハ治罪法第四百十
 條第十一項ニ據リテ破毀ノ原由アリトス因テ治罪法第四百二十八條
 ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更ニ相當ノ裁判ヲ受ケシムル爲メ本件ヲ長野

輕罪裁判所ニ移ス

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十七年三月五日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 關義臣

判事 鳥居斷三 判事 山本昌行

判事 昌谷千里 書記 香田能興

(要領) 承審官カ職權ヲ以テ爲シタル事實ノ判定及ヒ証憑ノ採擇ニ對シ

之カ當否ヲ訴フル如キハ上告ノ原由ト爲スヲ得ス

住所身分職業畧之

久保田八五郎

年齡畧之

右八五郎カ被告事件ニ付明治十六年四月二十三日靜岡輕罪裁判所ニ
 於テ被告ハ金員受取証書ヲ變造シタルモノト判定シ刑法第二百十條

私印私書ヲ偽造スル罪

第二百十二條ニ照シ重禁錮四月罰金四圓監視六月ノ刑ヲ言渡シタル
 裁判ニ對シ被告八五郎上告ヲ爲スノ要旨ハ被告カ受取書ヲ變造シタル
 ルノ証憑毫モ之ナキニ原裁判所ハ告訴人カ無實ノ陳述又ハ不充分ナ
 ル豫審調書等ニ依リ無罪ノ被告ヲ有罪ナリトセラレシハ不當ナリト
 又追伸書ヲ以テ檢察官ノ答辨書ニ依レハ重禁錮四月ニ處シ罰金四圓
 ナ附加セラレタリトアレトモ被告ハ罰金ノ言渡ヲ受ケタルコトナシ因
 是觀之ハ原裁判ハ擬律ニ錯誤アルハ明白ナリト云フニ在リ原檢察官
 ハ上告ノ旨趣ハ其理由ナキ旨答辨セリ茲ニ大審院ニ於テ專任判事ノ
 報告及ヒ立會檢事ノ意見ヲ聽キ判決スル左ノ如シ
 上告ノ旨趣ハ承審官カ職權ヲ以テ爲シタル事實ノ判定及ヒ証憑ノ採
 擇ニ對シ之カ當否ヲ訴フニ過キサレハ治罪法第四百十條各項目外ニ
 涉ルモノニシテ上告ノ原由ト爲スヲ得ス又罰金ノ言渡ナキハ擬律錯
 誤云々申立ツト雖トモ公判始末書ニ徵スレハ被告ニ對シ重禁錮四月

ニ處シ罰金四圓ヲ附加シ尙監視六月ニ付スル旨申渡シタルト明掲シ
 アルノミナラス裁判言渡書ノ謄本ニモ罰金四圓ヲ附加シタルコトハ明
 記シアリテ毫モ擬律ニ錯誤アルコトナシ故ニ上告ノ旨趣ハ惣テ相立サ
 ルモノトス因テ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ本按上告ハ之ヲ棄却ス
 ルモノ也

於大審院檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十七年三月廿九日

裁判長判事 岡内重俊印 專任判事 土師經典印
 判事 石井忠恭印 判事 兵頭正慈印
 判事 小村壽太郎印 書記 笠 慎三郎印

○身分ヲ詐稱スル罪

(要領)警察署ノ雇ト詐稱シタルモノハ即チ官職ヲ詐稱シタルモノニシ
 テ刑法第二百三十一條ニ依リ處斷ス可キモノトス

私印私書ヲ偽造スル罪 身分ヲ詐稱スル罪

住所身分職業略之

石塚吉造

年齢略之

右石塚吉造カ明治十五年一月二日及ヒ同月十六日同郡久下田村又ハ同郡城廻村ノ旅人宿ニ於テ結城分署雇ト詐稱シタル事件ニ對シ土浦輕罪裁判所ハ茨城縣明治十四年乙番外布達第一條ヲ犯シタル違警罪ナリトシ治罪法第三百五十九條ニ依リ科料金壹圓ニ處斷シタリ檢事補恒川脩一郎カ上告ノ要領ハ右被告人ノ詐稱シタル分署雇ナル者ハ固ヨリ官名ニ非スト雖ヒ該分署ハ茨城縣下妻警察署ノ分署ニシテ其雇ト詐稱スルハ即チ官署ニ奉仕シ職務ニ從事スルノ言ヒナリ焉ン前顯番外布達ノ屬籍身分ヲ詐稱スルモノト同視スルヲ得ヘケンヤ因テ刑法第二百三十二條ニ照シ輕罪ノ刑ニ處スヘキニ原裁判所カ違警罪ノ言渡ヲ爲シタルハ是レ擬律ノ錯誤アル不當ノ裁判也トノ一點ニ

アリ而シテ本院檢事林三介ニ於テハ右上告ノ旨概チ擴張スルノ陳述ヲ爲シタリ

今之ヲ審案スルニ右被告吉造ノ所爲ヲ以テ職務ヲ詐稱スルモノト爲スヘキコトハ前題上告旨趣ノ說明アルノミナラス是レ理ノ甚タ略易キモノナルヲ以テ更ニ多辨ヲ要セサルモ刑法第二百三十二條ノ說明ニ付テハ本案ノ最モ必用ナルモノトス

抑モ該條ハ其官職位階ノ三個ヲ連稱詐冒スルモノハ勿論其一箇ヲ詐稱スル者ニモ亦之ヲ適用スヘキノ法律也因テ原裁判ハ擬律ノ錯誤タルモノトシ治罪法第四百二十九條ニ依リ土浦輕罪裁判所ニ於テ明治十五年一月廿四日石塚吉造ニ言渡シタル裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ更ニ左ノ裁判ヲ言渡スモノ也

石塚吉造

前題ノ理由ナルヲ以テ被告人吉造カ所爲ハ官職ヲ詐稱シタルノ罪ニ身分ヲ詐稱スル罪

シテ所犯二次ナルニ付刑法第二百三十二條同第百條ニ依リ數罪俱發ノ例ニ照スモ其情狀相等シク一ニ從テ處斷シ乃チ輕禁錮十五日以上二月以下罰金二圓以上二十圓以下ニ相當スルヲ以テ一月ノ輕禁錮ニ處シ二圓ノ罰金ヲ附加スルモノ也

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十五年八月廿九日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 木付義路

判事 山吉盛典 判事 兵頭正慈

判事 土師經典 書記 上田庸熙

○公選ノ投票ヲ偽造スル罪

〔要領〕寺惣代ヲ撰フニ際シ其投票ヲ偽造シタルモ固ヨリ政事上ニ關スル投票トハ大ニ其性質ヲ異ニスルヲ以テ其所爲ハ刑法上之ヲ討ス可キモノニアラストス

住所身分職業畧之

松田友藏

年齡畧之

右友藏カ被告事件ニ付明治十五年八月十日津山輕罪裁判所ニ於テ被告ハ明治十四年岡山縣甲第百三十三号布達ニ社寺檀家中衆望ノ歸スル者三名以上相撰戸長役場へ届出云々トアルニ因リ弘法寺ニ於テ同寺惣代撰學會ヲ開キ其投票人ノ甲元又三郎外十八名ノ來會セサルニ違一紙ニ同名共ノ氏名ヲ記載シ之ニ代印ヲ爲シテ投票セシ者ナリト判定シ刑法第二百三十三條ニ照シ重禁錮一月罰金五圓ノ刑ヲ言渡シタル裁判ヲ不當ナリトシ被告友藏カ上告ヲ爲スノ要旨ハ被告カ所爲ハ寺惣代ヲ撰フニ際シ檀家中ノ相談會ニ成立セシ投票ニシテ公選ノ投票ニアラサレハ刑法上罪トナルヘキモノニアラスト云フニアリ茲ニ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ據リ立會檢事ノ意見ヲ聽キ之ヲ

身分ヲ詐稱スル罪 公選ノ投票ヲ偽造スル罪

審按スルニ刑法第二百三十三條ニ公撰ノ投票ヲ偽造シ又ハ其數ヲ増減シタル者ハ云々トアル其投票ハ政令ヲ以テ選拔スルノ投票ヲ謂フモノニシテ人民ノ協議上ニ成立スル投票ヲ指稱スルノ法意ニハアラサルナリ又明治十四年岡山縣甲第百三十三號布達ヲ按スルニ社寺惣代人ノ儀氏子檀家氏子檀家ナキ者ハ信徒相應ノ財産ヲ有シ衆望ノ歸スル者ヲ三名以上相撰ミ戸長役場へ届出今後該社寺ノ願届等ハ渾テ連署ヲ以テ可差出云々トアリテ其布達ノ精神タルヤ社寺ノ願届等ハ氏子檀家中ノ總代ニ連署セシムルヲ要スルニ依リ其總代ヲ豫メ相撰ヒ戸長役場へ届出テ置シ可キトノ趣意ニシテ總代ヲ撰フニ公同ノ投票ヲ以テ之ヲ定ムルノ方法ヲ布令シタルモノニアラサルヤ明カナリ本件被告松田友藏カ偽造セシ投票ハ檀家中協議上ヨリ成立タルモノニシテ政事上ニ關スル投票トハ大ニ其性質ヲ異ニスルヲ以テ其所爲ハ刑法上之ヲ圖スヘキモノニアラスト然ルニ原裁判官ハ右ノ事實

ヲ認メナカテ刑法第二百三十三條ヲ適用シ刑ノ言渡ヲ爲シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ破毀シ治罪法第四百二十九條ニ法リ本院ニ於テ直ニ裁判スル左ノ如シ

松田友藏

右ノ理由ナルニ依リ刑法第二條及ヒ治罪法第三百五十八條同第二百二十四條ニ依リ無罪赦免スルモノナリ

於大審院檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年八月九日

裁判長判事 石井忠恭 專任判事 土師經典
 判事 中島盛有 判事 鳥居斷三
 判事 兵頭正慈 書記 陰山秀司

○官吏人民ニ對スル罪

要領 毆打ニ因リ創傷シタルモノト判定シ面シテ其創傷ノ爲メ疾病休

公選ノ投票ヲ偽造スル罪 官吏人民ニ對スル罪

業ニ係リタルヤ否ヤヲ明示セス又其適用シタル法律ノ正條ヲ掲示セサルハ所謂事實ノ理由及ヒ法律ノ理由ヲ付セサルモノニシテ即チ治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業略之

土橋兼孝

年齢略之

同

谷勝明

同

同

松下惣松

同

毆打創傷被告事件ニ付明治十六年二月十日大坂輕罪裁判所ニ於テ士

橋兼孝谷勝明ニ對シ刑法第二百八十二條ニ依リ處斷スヘキモ身体ニ創傷ヲ爲シタルヲ以同條第二項及ヒ同第三百一一條第三項ニ照シ十三日以上一月七日以下ノ重禁錮ニ處スヘキ刑ニ比較シ其重キニ從ヒ各重禁錮四月罰金五圓ニ處スト言渡シ松下惣松ニ對シテハ刑法第二百八十條ニ依リ處斷スヘキモ身体ニ傷ヲナシタルヲ以テ同條第二項及ヒ同第三百一一條第三項ニ照シ十三日以上一月七日以下ノ重禁錮ニ處スヘキ刑ニ比較シ其重キニ從ヒ處斷スヘキ處情狀原諒スヘキモノアルヲ以テ同第九十條ニ依リ本刑ニ二等ヲ減シ重禁錮一月十五日罰金二圓ニ處スト言渡シタル裁判ニ服セス各上告セル要領ハ抑モ被害者ヲシテ其罪狀ヲ陳述セシメシメカ爲メ加ヘタル創傷ハ被告共ノ所爲ニ非ス初メ被害者カ警察署ヲ逃走ノ際巡查カ追跡捕縛セシモ仍ホ逃走ノ景狀アルヲ以テ捕縛シタルコトハ既ニ公判廷ニ於テ追捕ノ巡查カ供出シタルヲ見レハ其捕繩ノ爲メニ負ヒタル創傷タルコト明白ナリ且惣

官吏人民ニ對スル罪

松ハ警察署ノ雇夫ニシテ護送者ノ資格ヲ有スル者ニ非ス是其事實ト
 裁判ノ理由ト齟齬セルノミナラス公判ノ際檢察官二名出廷アリシハ
 裁判所ノ構成規則ニ背戾シ仍ホ被告事件ニ關スル調書ヲ朗讀セシメ
 サリシハ不當ノ裁判タリ依テ破毀ヲ求ムト云フニ在リ
 對手人檢事補坂村蕃ハ右上告ノ不理ナルヲ逐一辨駁シ而附帶上告ヲ
 爲シテ曰松下惣松カ裁判言渡ヲ見ルニ蓋シ二個ノ犯罪アリトス依テ
 其第一ノ罪ハ刑法第三百一條第三項ニ依リ第二ノ罪ハ同第二百八十
 條ニ依リ處斷スヘキチ第一二ノ犯罪各同一ノモノト爲シ判定シタル
 ハ不當ニ付該部分ノ破毀ヲ求ムト
 大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ據リ立會檢事ノ意見ヲ聽クニ其附帶
 上告ニ曰各被告ヘノ言渡シニ該創傷ノ爲メ疾病休業ニ係リタルヤ否
 ノ事實ヲ明示セス又其法律ノ理由ニ單ニ其重キニ從テ處斷スヘキモ
 ノナリ云々重禁錮云ノ罰金云々トアリテ數罪俱發ノ例ヲ用ヒス殊ニ

其判決ニ法律ノ正條ヲ掲ケサリシハ法律ノ理由ヲ付セサルモノナル
 チ以テ治罪法第四百十條第九項ノ理由ニ觸ル、ニ付原裁判ノ破毀ヲ
 望ムト依テ判決スル左ノ如シ

上告ノ要旨ハ被告事件ニ關スル調書ヲ朗讀セシメス立會檢事ノ二名
 ナル云々被害者森文太郎ノ創傷ハ被告ノ所爲ニ非ス且惣松カ如キハ
 假令苛酷ノ處爲チ以テ創傷ヲ加ヘシモノト爲スモ只一個人ノ所業タ
 ルニ過キスノ護送者ノ資格ヲ有セザレハ刑法第二百八十條ヲ適用ス
 ヘキニ非スト云フト雖モ果テ調書ノ朗讀ヲ緊要トセハ之ヲ請求スヘ
 キニ其請求アリシヲ見ス又立會檢事ハ仮令二名ナリシモ其二名ナル
 チ禁スルノ法文ナク況ヤ其公判始末書ヲ閱スルニ立會檢事ハ一人ニ
 シテ二人ニハ非サルオヤ又被害者ノ創傷ハ被告ノ行爲ニ無之惣松ハ
 護送者ノ資格ヲ有セス云々ニ至リテハ第一事實ノ點ニ關シ適否ヲ論
 難スルモノニシテ事實判官ノ職權内ニ侵入スルモノナレハ上告ノ原

由ト爲スヲ得ス第二ハ其惣松ナル者假令警察署ノ雇ヒナルモ當時同署ノ繩夫ニシテ護送者ノ一人タルニ相違アラサレハ其資格チ有スルハ勿論ナリトス依テ被告上告ノ趣旨ハ惣テ相立ス加フルニ原檢事補ノ附帶上告ニ於ケルモ原裁判即チ松下惣松ヘノ言渡シニ其重キニ從テ處斷スヘキ處云々トアルニ依テ見レハ該上告ノ如ク二罪皆同一ノモノト認メ處斷セシモノニ非サルカ如シ然而原判文中土橋兼孝并ニ谷勝明ニ對シテハ被害者丈太郎ノ腕部ニ創傷チ爲シ又松下惣松ニ對シテハ丈太郎ノ脛ニ蹴傷チ負ハシタルモノト認定ストアリテ而二ツナカラ其傷ノ爲メ疾病休業ニ係リタルヤ否ヤノ事實チ明示セス又其法律ノ理由チ舉グルニ方テ其重キニ從テ處斷スヘキモノナリ云々重禁錮ニ處シ罰金チ附加ス云々トアルノミニシテ適用ノ正條チ揭示セサルハ所謂ル法律ノ理由チ付セルモノニシテ治罪法第四百十條第九項ノ原由アルモノトス依テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ之ヲ破毀シ

適當ノ裁判チ受ケシメシカ爲メ京都輕罪裁判所ニ移ス者也

大審院檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月十七日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 伴 正 臣

判事 薄井 龍之 同 園田 弘

同 小村 壽太郎 書記 香田 能興

身體財産ニ對スル重罪輕罪之部

○謀殺故殺ノ罪

要領裁判言渡書中ニ被告人ノ未ダ曾テ申供セサル語チ加ヘ以テ刑ヲ

適用シタルハ治罪法第四百十條第十項ニ定メタル越權ノ處分ヲ

ルチ免レサルモノトス

數罪俱發ノ場合ニ於テ法律チ適用スルコ其各條項チ記載セサル

ハ法律ノ理由チ明示セサルモノトス

官吏人民ニ對スル罪 謀殺故殺ノ罪

住所身分職業畧之

表 谷 嘉 十 郎

年 齡 畧 之

人ヲ殺傷シ及ヒ窃盜犯罪ノ被告事件ニ付明治十五年十月廿七日和歌山重罪裁判所ニ於テ右嘉十郎カ明治十五年八月十八日夜前田奥之丞宅ニ一泊シ同家雇人西畑松太郎ヲ殺害シ藤本岩吉ヲ傷ケ奥之丞所有ノ金圓ヲ盜取シタル所爲ニ對シ被告人ハ強盜ヲ犯スニ便利ナル爲メ人ヲ故殺シ及ヒ人ヲ故殺セシメテ遂ケス而テ金圓ヲ強取シタル者右二罪ノ内輕キ者ハ論セス故殺ノ罪ヲ論シ刑法第二百九十九條ニ依リ死刑ニ處スト裁判言渡シタリ

被告表谷嘉十郎ハ該裁判ニ對シ上告爲シタリ其要領ハ被告ハ人ヲ殺傷シ金圓ヲ盜取シタルコトハ相違ナシト雖モ其原因タル一時醉魔ノ爲メ知覺精神ヲ喪失シタル所爲ニシテ故ヲニ斯ル兇惡ノ念慮ア

キテ犯シタルニ非レハ宜ク刑法第八十九條ニ照シ酌量減輕アルヘシト云フニ在リ對手人檢事千葉貞幹ハ被告人ノ上告ハ故意ヲ以テ罪ヲ犯シタルニ非レハ酌量減輕アルヘシト云フ情願ニ過キス如斯上告ハ治罪法ノ許サ、ル所ナリト答辨シ大審院檢事林三介ハ本案ノ意見ニ述ルニ先チ附帶上告ヲ爲スヘキ件アリトテ其趣旨ヲ陳辨シテ曰ク被告ノ所爲ニ對シ原裁判言渡書ニ被告人ノ金圓ヲ強取スルノ念慮アル者ト事實ヲ舉示シ而シテ其法律適用ニ至テハ強盜ヲ犯スニ便利ナル爲メ云々刑法第二百九十六條ニ依リ死刑ニ處スト言渡シテ強盜ヲ犯人カ所爲ハ毫モ強盜ヲ犯シタル事實ノ徵スヘキナキノミナラス裁判官ニ於テモ原素盜心ヲ生シタル者ト判定セシメ非スヤ然ルハ強盜ヲ犯スニ便利ナル爲メ云々金圓ヲ強取シタル者トシ刑法第二百九十六條ヲ適用シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナルニ因リ破毀シテ相當ノ言渡シアラントテ望ムト上告代言人高梨哲四郎ハ上告趣意ヲ擴張シ併テ

謀殺故殺 罪

附帶上告ニ對シ答辨セリ其要點ハ上告本人ノ訴フル處ハ單ニ人ヲ殺傷シタルハ惡意アリテ犯シタルニ非スト云フノ一點ニ止ルト雖ヒ抑被告ノ罪ハ身體ニ對スル罪及ヒ財産ニ對スル罪ヲ犯シ數罪俱發セシ者ナリ其身體ニ對スル罪トハ何ソヤ西畑松太郎ヲ殺シ藤本岩吉ヲ殺サントシテ遂ケサル是ナリ又財産ニ對スル罪トハ乃チ前田與之丞カ所有ノ金若干ヲ盜取シタル是ナリ而シテ其所爲ニ對シ原裁判所ノ言渡書中俄ニ盜心ヲ生シ松太郎ニ見咎メテレンコトヲ恐レ忽殺意ヲ起シ云々ト被告自ラ供述シタル如クニ捏造シ其末文ニ於テ強盜ヲ犯スニ便利ナル爲メ人ヲ殺殺シ及ヒ故殺セントシテ遂ケスト掲載セリ然レハ原書類就中被告人ノ調書ニ於テ人ヲ殺傷シ又金圓ヲ盜取シタルコトハ明瞭ナレ松太郎ニ見咎メテレンコトヲ恐レト云フノ陳述ヲ爲シタルコト各書類中毫モ記載セサル所ナリ是レ裁判官ハ被告人カホク發セサル言語ヲ加エ之ヲ以テ刑法第二百九十六條ニ準擬シタル者ト云フ可シ

夫レ被告人カ松太郎ヲ殺シ岩吉ヲ殺サントシテ遂ケス面シテ竊盜ヲ犯シタルハ固ヨリ松太郎外一名ハ舊識ニシテ且一家ニ同臥シ縱ヒ自ラ竊盜ヲ爲シ得ルヲ忽チ發露スヘキヲ恐レ事後ノ犯跡ヲ蔽ハシカ爲メニ先ツ兩名ヲ殺傷シタルコトハ事實ニ於テ理ノ甚ク觀易キモノニシテ乃チ刑法第二百九十四條ニ掲ケタル故殺ノ罪ニ該リ其竊盜ノ罪ト俱ニ發シタルヲ以テ裁判上一ノ重キ故殺ノ罪ニ依リ無期徒刑ニ處セラレヘキ者ト思考ス又被告人ノ所爲ハ竊盜ヲ爲スヘキ障礙物ヲ除去セシカ爲メ人ヲ殺傷シ便利ヲ圖リタルコトハ一モ見ルヘキノ證據アルコトナシ故コ附帶上告ニ於テ強盜ニ非ストノ論旨ハ同意ナリト雖モ刑法第二百九十六條ヲ適用スヘキ罪アリトノ陳辨ハ上告代人ノ不當ナリトシ以テ排斥スル所以ナリ到底前顯ノ如ク原裁判ハ擬律ノ錯誤アル者ナレハ更ニ相當ノ判決アラシコトヲ企望ストノ趣旨ヲ反覆論究セリ本院檢事ハ再ヒ附帶上告ノ主意ヲ辨明シ且原裁判所カ數罪俱發ノ

謀殺故殺ノ罪

犯罪ニ對シ逐一法律ノ適用ヲ明示セス單ニ二罪ノ内輕キ者ハ論セスト爲シタルハ不當ノ裁判ナレハ治罪法第四百二十九條及ヒ第四百三十一條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ而シテ本案上告及ヒ擴張ノ趣意ハ事實ノ點ニ涉リ論難スルニ止ル者ト思料スルニ因リ棄却ノ言渡アルヘシトノ意見ヲ陳述セリ仍テ判決スルコト左ノ如シ

本件ヲ審按スルニ原裁判所言渡中被告人ノ事實ヲ明示スルニ一睡シテ目ヲ覺シ貯金ノコトニ心付俄ニ盜心ヲ生シ云々トシ而シテ其末文ニ至リ被告ハ強盜ヲ犯スニ便利ナル爲メ人ヲ故殺シ云々ト掲ケタルハ事實ノ理由齟齬スル者ナリ又右三罪ノ内輕キ者ハ論セス故殺ノ罪ヲ論シ刑法第二百九十六條ヲ適用シ數罪俱發ナルニ各條項ヲ記載セザルハ法律ノ理由ヲ明示セサル者ナリ以上ノ理由ニ原キ本院檢事附帶上告ノ趣旨ハ擬律ノ錯誤ニ出タル不當ノ裁判ナリト論辨スレモ右ハ擬律ノ錯誤ト謂フ可ラスシテ治罪法第四百十條第九項ノ場合ニ適當

スル原由アル者トス又被告人カ兇惡心アリテ人ヲ殺シタルニ非サレハ酌量減輕アルヘシトノ上告旨趣ハ採用スヘキ理由ナシト雖トモ其代言人カ上告趣意ヲ擴張シタル言ニ曰ク裁判言渡書ニ被告人カ未ダ曾テ陳述セサルニ松太郎ニ見谷メラレンコトヲ恐レノ語ヲ加エ以テ刑法第二百九十六條ニ比援シ且被告人ハ強盜ヲ犯スニ便利ナル爲メ云々ト掲載アレヒ被告人ハ竊盜罪ノ發覺センコトヲ恐レ人ヲ殺傷シタル者刑法第二百九十四條ニ所謂故殺罪ナレハ原裁判ハ擬律ノ錯誤ナリト論告スルニ在リ抑被告人カ前田與之丞宅ニ止宿中金員ヲ盜取スベクト剃刀ヲ取來リ與ノ間ニ伏シ居タル松太郎外一名ヲ殺傷シ豫テ見認メ置タル松太郎カ寐床ノ下ニアル鍵ヲ取出シ右鍵ヲ以テ與ノ間戸棚ノ引出ヲ開キ金圓ヲ盜取シタル所爲ハ刑法第二百九十四條ニ據テタル故殺ノ罪ニ止ルモノ歟又ハ刑法第二百九十六條重罪輕罪ヲ犯スニ便利ナル爲メ故殺爲シタルモノ歟共ニ推測上ニ涉ルヲ以テ是等ハ

事實裁判官ノ心證ニ任從スヘキ者ナリト雖モ被告人カ未ダ曾テ申供セサルニ松太郎ニ見答メラレシテ恐レト明記シタルハ專斷ニシテ乃テ治罪法第四百十條第十一項ニ定メタル越權ノ處分タルヲ免レサル者トス

右ノ理由ナルニ因リ原裁判ハ治罪法第四百十條第九項及ヒ第十一項ニ適當スル上告ノ原由アル者トシ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ和歌山重罪裁判所カ表谷嘉十郎ニ言渡シタル裁判ノ全部ヲ破毀シ更ニ大坂重罪裁判所ニ移シ審判セシムルモノ也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年三月廿六日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介
判事 大塚 正男 判事 高木 勤
判事 昌谷 千里 書記 上田 庸熙

(要領)殺意ナクシテ故サラニ人ヲ創傷シタルモノハ目的ノ如何ヲ問ハス現ニ生シタル結果ニ因リ其罪ヲ定ムト雖モ其創傷ノ殺意ニ出タルヲ明確ナルニ於テハ乃テ豫謀ニ係ルト否トテ分テ謀殺又ハ故殺ノ未遂犯ヲ以テ論ス可キモノトス

住所身分職業畧之

梅田 七五郎

年齡略之

故殺未遂犯罪被告事件ニ付明治十五年七月二十二日横濱輕罪裁判所會議局ニ於テ被告カ殺意ヲ以テ小山庄次郎ヲ創傷シタル所爲ハ刑法第二百九十四條及第百十二條ニ照シ故殺罪ノ未遂犯ヲ以テ論スヘキモノトシ豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ヲ棄却シタリ
原檢察官ハ右判決ニ對シ上告ヲ爲シタリ其要領ニ曰重罪ヲ犯サントシテ其目的ヲ遂ケサルモノト雖モ一概ニ未遂犯罪ヲ以テ論ス可キトス

謀殺故殺ノ罪

抑モ故殺ノ如キハ人ヲ殺害スルニ於テ初メテ以テ立スヘキ犯罪ニシテ其傷ヲ成スニ止ルモノハ殺意ノ有無ニ拘ハラス毆打創傷ニ擬スヘキモノトス然ルニ原裁判所會議局カ重罪ノ未ダ遂ケサル者ハ其罪質ノ如何ニ論ナク都テ未遂犯ヲ以テ論スルヲ得ヘキモノ、如ク法律ヲ誤解シ被告事件豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ヲ棄却シタルハ頗ル其當ヲ失シタル判決ナルヲ以テ之カ破毀ヲ求ムト

本院檢事加納久宣ハ其意見ヲ陳述シテ曰原一件書類ヲ閱スルニ被告カ所爲タル故殺ノ意ニ出テタルヤ毫モ疑ヲ容レサル所ナレハ其罪ハ故殺ノ未遂犯ヲ以テ論スヘキモノトス故ニ本件上告ハ之ヲ棄却アラソクテ望ムト茲ニ之ヲ審案シ判決スル左ノ如シ

殺意ナクシテ故サレハ人ヲ創傷シタル者ハ目的ノ如何ヲ問ハズ現ニ生シタル結果ニ因リ其罪科ヲ定ムルト雖モ其創傷ノ殺害ノ意ニ出テタルコト明確ナルニ於テハ豫謀ニ係ルト否トテ分テ謀殺又ハ故殺ノ未

遂犯ヲ以テ論スヘキナリ抑モ故殺ノ未遂犯ヲ構成セシニハ三個ノ條件ヲ要ス第一殺意第二其執行ニ着手シタルヲ第三意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ其目的ヲ遂ケサルヲ是ナリ本件被告ハ憤怒ニ乘シテ忽然殺意ヲ發シ被害者ニ重傷ヲ成スモ意外ノ舛錯ニ因リ死ニ致スノ目的ヲ遂ケ得サリシモノナリ其所爲ハ刑法第二百九十四條及同第一百十三條第百十二條ニ問擬スヘキ故殺罪ノ未遂犯ニシテ其罪質構成ノ諸原素具備セシク多辨ヲ要セスシテ明ナリ故ニ原裁判所會議局カ被告事件ヲ重罪裁判所ニ移ストノ豫審終結ノ言渡ヲ認可シタルハ至當ニシテ毫モ破毀ノ原由ナキモノトス因テ上告無旨相立ス

右ノ理由ニ原キ本件上告ハ之ヲ棄却スルモノ也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年九月七日

裁判長判事 鳥居 斷 三 專任判事 小村 壽太郎

謀殺故殺ノ罪

判事 中島盛有

判事 伴正臣

判事 薄井龍之

書記 澤野潛藏

〔要領〕公訴狀ニ掲ケタル數事件ニ付キ逐一之カ判決ヲ爲サ、ルハ治罪法第四百十條第七項ノ場合ニ適當スル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

中野 カメ

年齡畧之

同

桑原 トロ

同

同

森岡 トロ

同

明治十六年九月二十四日廣島重罪裁判所ニ於テ右三名ノ被告事件ヲ審判シ中野カメハ佐伯タケユリ貫受ケタル女兒ヲ殺害シ及ヒ該兒ノ生存スル旨ヲ以テタケ方ユリ金圓ヲ請求セシ所爲ニ付刑法第二百九十二條同第三百九十條同第一百十二條及同第一百條ニ照シ一ノ重キ第二百九十二條ノ罪ニ依リ死刑ニ處シ桑原トロハ該女兒ノ死セシ翌日仍ホ生存スル如ク作り佐伯タケ方ニテ金圓ヲ請求シタル所爲ニ付刑法第三百九十條同第三百九十四條同第一百十二條ニ依リ重禁錮三年罰金五圓監視一年森岡トロハ中野カメカ木下秋次郎ト云ヘル小兒ヲ貫受ル時己レ貫人ノ如ク假裝シ該兒ニ附ケ來ル金員物件ノ分配ヲ受ケタル所爲ニ付刑法第三百九十條同第三百九十四條ニ依リ重禁錮四年罰金拾圓監視一年ニ處斷セリ

同裁判所檢事加納謙ハ右裁判ヲ不當ナリトシ上告ヲ爲シタリ其旨趣タル中野カメニ對シテハ公訴狀ニ記載シタル如ク第一明治十五年五

謀殺故殺ノ罪

月中産後三四日ヲ經タル氏名不知者ノ小兒ヲ貰受テ大島キヌヲ殺唆シ殺害セシメ第二同年十二月中木下米藏私生兒木下秋次郎ヲ貰受ケ是亦大島キヌニ殺害セシメ第三同年十二月二十日佐伯タケノ女兒ヲ殺死シタル以上三事件ヲ公訴シ公廷辨論ノ際モ該三箇ノ所爲アルヲ縷陳シ其法律適用ヲ乞タルニ唯第三ノ事件ノミヲ裁判シ他ノ二事件ヲ判決セサルハ治罪法第四百十條第七ニ適合スル不法ノ裁判也又桑原トヨハ中野カメカ財ヲ得ン爲メ人ノ子女ヲ貰受ケ之ヲ殺死スルノ情ヲ知テ媒介シカメノ犯罪ヲ容易ナラシメタル者ト思料シ謀殺從犯ナリトノ公訴シタリ而シテ原裁判言渡書中〔中野カメ森岡トヨカ平素貧困ニシテ正當ニ子ヲ養フ能ハサルヲ知リナカラ口錢ニ迷ヒ〕云々トアリテ其後段ニ〔其夜カメカ該兒ノ死セシメテ知リナカラ〕云々トアル此十數字ハ其文意ノアル所ヲ解スル能ハスト雖前後ノ文勢ニ依テ考フレハトヨハカメカ該兒ヲ殺死セシメテ知リト云ノ趣意ナルヘクノ之ヲ前

文正當云々ニ對照スレハ始メヨリ正當養育ニ反スル不正當ノ所爲即チ殺意アリシヲ知レリト爲ス者ノ如ク然レモ到底充分ニ事實ノ理由ヲ付セサル裁判ナレハ治罪法第四百十條第九ニ相當スル原由アリ又森岡トヨハ第一明治十五年十二月中野カメカ大島キヌニ殺害セシメタル木下秋次郎ヲ貰受ル節其情ヲ知リ犯罪ヲ容易ナラシメ第二同年十二月二十日カメカ佐伯タケノ兒ヲ殺害スル情ヲ知リ其犯罪ヲ容易ナラシメタル以上二事件ハ共ニ謀殺ノ從犯ナリトシテ公訴シタルニ其第一ノ事件ノミヲ裁判シ第二ノ事件ノ判決ヲ與ヘサルハ不當ナリト云ニ在リ

大審院ニ於テ立會檢事加納久宣ノ意見及院長ノ職權ニ依リ撰任セラレタル代言人桑島加全ノ答辨ヲ聽クニ檢事ハ本案上告ノ論旨ハ相當ナリト陳述シ代言人ハ中野カメノ原裁判ニ對シ附帶ノ上告ヲ爲シ訴訟書類中被告カメカ該兒ヲ殺スヘキ意ヲ以テ貰受ケシトノ申供モ見

ヘス又謀殺ノ情况モナク且ツ原裁判言渡ノ如ク「カメ」カ目的ハ金ヲ得ルニ在リトスレハ未タ其金ヲ得ルニ先ツ其兒ヲ殺害スルノ謂レナク又豫メ殺意アレハ森岡トヨニ依頼シテ其乳ヲ與ヘ抱寝等ヲ爲サシムヘキ筈ナキニ是等ノ依頼ヲ爲シ其末自分ニ之ヲ抱寝シタル情狀ハ其却テ意ナキヲ証スヘキ者ナルニ之ヲ謀殺犯アリト判定シタルハ不法ノ裁判ニシテ治罪法第四百十條第九ニ適合スル上告ノ理由アリト論告セリ因テ判決スル左ノ如シ

原檢察官カ上告論旨ノ如ク本按被告中野カメニ係ル公訴ハ三個ノ事件ニシテ森岡トヨニ係ル公訴ハ二個ノ事件ナルコトハ其公訴狀及ヒ公判始末書ニ據リ分明ナリ然ルニ森岡トヨニ對シ木下秋次郎ニ關スル事件ノミチ裁判シ佐伯タケノ兒ニ關スル事件ノ判定ヲ爲サス中野カメニ對シテハ佐伯タケノ兒ニ關スル事件ノミチ裁判シ木下秋次郎外一兒ニ關スル事件ノ判定ヲ爲サルハ共ニ治罪法第四百十條第七ノ

場合ニ適當スル不法ノ裁判ナリトス又附帶上告ニ論舉スル情况ノ如キハ未タ必ズ殺意ナキ證ト認ム可カラザルノミチテ却テ訴訟書類中其謀殺犯タルノ證徴間々之アルカ如キモ是等ノ取捨ハ尙ホ事實裁量ノ審理判定ニ任從スルト雖抑謀殺罪ヲ組成スルニハ其決意及ヒ豫謀及ヒ殺害ノ結果アルヲ必要ナリトス然ルニ中野カメニ對スル原裁判ニ於ケル謀殺罪ノ斷定ヲ爲シナカラ其事實上單ニ殺害シタル一事ノミチ掲ケテ決意及ヒ謀殺ノ點ヲ明示セサルハ即チ治罪法第四百十條第九ノ原由アル者トス又桑原トヨノ裁判言渡ニ舉示シタル所ヲ見ルニ「被告ハ中野カメ森岡トヨカ正當ニ子ヲ養フコト能ハサルヲ知リナカラ云々該兒ヲカメニ遣シ其夜カメカ該兒ノ死セシコトヲ知リナカラ其翌該兒ノ生存シタル如ク詐リ」云々トアリ是原裁判官ハ被告桑原トヨニ於テ中野カメカ該兒ヲ殺死シタル事情ヲ知レリト認視シタル者ナルヤ又ハ止タ其死去セシト云フノミチ知レリト認視セシ者ナル

ヤ明瞭ナラス是事實理由ノ明示ヲ缺キタル言渡ニシテ亦治罪法第四百十條第九ニ適合スル不法ノ裁判ナリトス右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ニ依リ中野カヲ桑原トヨ森岡トヨニ言渡シタル原裁判ノ全部ヲ破毀シ被告事件ヲ岡山重罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムル者也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十二月三日

裁判長判事 大塚 正男 專任判事 山根 秀介

判事 中島 盛有 判事 昌谷 千里

判事 園田 弘 書記 上田 庸熙

要領凡故殺ナルモノハ曾テ積憤久怨アルト否トヲ論セス怒氣一時ニ激發シ自ラ抑制スルニ違ナク倏焉殘害ヲ行ヒタル者ヲ云フ若シ夫レ潛思靜慮豫メ意ヲ決シ謀ヲ定メ而シテ後ヲ始メテ事ヲ行フカ

如キハ則チ謀殺ニシテ故殺ト云フヲ得サルモノトス

住所身分職業畧之

清 水 幸 藏

年齡畧之

明治十五年七月廿日宇都宮輕罪裁判所ニ開キタル朽木重罪裁判所ニ於テ右被告人清水幸藏カ謀殺未遂犯罪事件ノ公訴ヲ審理シ被告人ハ島田安平ノ薪ヲ竊取シタルコトアリトテ島田由太郎ヨリ同居ヲ謝絶セラル又同時ニ妻イノヨリ離別ヲ請ハレタルヲ以テ被告人ハ由太郎トイノカ姦通セシヨリ事姦ニ至リシ者ト速了シ憤懣ニ堪ヘス由太郎及ヒイノヲ殺サントノ念ヲ起シ明治十五年三月三日居村出立暗ニ訣別ノ意ニ寓シ郷里ニ至リ親ヲ省ルモ怒氣鬱勃靜慮ニ違ナク歸路明治十五年三月六日朽木町ニ於テ西瓜庵丁ヲ買求メ途中痛シ酒ヲ飲ミ歸宅スルヤ否由太郎ヘ切付アルモ由太郎ノ抗拒ニ依リ其目的ヲ遂ケ得ス

謀殺故殺ノ罪

終ニ走リテ小金井分署へ首出シタル者ト判定シ刑法第二百九十四條
 第一百十二條第一百十三條第八十九條第九十條第八十五條ニ依リ輕懲役
 六年ニ處ストノ言渡ヲ爲シタリ
 原裁判所檢事河野通樸ハ該裁判ヲ不當ト爲シ上告ヲ爲シタリ其要旨
 ハ本案被告事件ハ謀殺未遂犯罪ニシテ故殺犯ニハアラサルナリ何ト
 ナレハ被告人カ殺害ノ念ヲ生シタルト其事ヲ行ヒタルトハ前後六日
 間ニシテ充分ニ靜思熟慮ノ違アリ加之被告人カ公判廷ノ自白ニ依ル
 モ靜思熟慮既ニ殺害ノ意ヲ決シタルカ爲メ他ノ用ナキ遠路父母ヲ省
 ニ訣別ノ意ヲ表シ了リ之ニテ死後寸毫モ遺憾ナシト思惟シ遂ニ兇器
 ヲ求メ以テ其事ヲ行ヒシモノニシテ怒氣鬱勃靜思熟慮ニ違ナキ模様
 タモアルコトナシ然ルニ原裁判所ハ怒氣云々ノ一句ヲ掲ケ來リ強テ故
 殺ノ未遂犯ト爲シタルハ不當ナルニ因リ原裁判ヲ破毀シ更ニ相當ノ
 裁判ヲラシメテ求メト謂フニ在リ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ規則ヲ履行シ檢事林三介ノ意
 見ヲ聽クニ被告人カ所爲ハ故殺未遂犯ニ非スシテ謀殺未遂犯タル
 コトハ原判文ニ舉示シタル事實ニ於テ明瞭ナレハ上告ノ旨趣相當ナリ
 然レモ本件ハ情狀原諒スヘキモノアルヲ以テ酌量減輕アラソト望
 ムト陳述シ代言人梅田謹藏ハ被告人カ所爲ハ島田由太郎ト妻イノト
 同衾シ居タルヲ撞見シ茲ニ始メテ殺意ヲ起シ持合セタル西瓜庖丁ヲ
 用テ負傷セシメタルモノナレハ即チ故殺未遂犯ヲ以テ論スヘキ者ナ
 リト辯明シ且附帶上告ヲ爲シタリ其旨趣ハ本件故殺ノ元素ハ乃チ妻
 イノカ由太郎ト姦通シタルニアレハ故殺未遂犯ヲ以テ本刑ト爲シ刑
 法第三百十一條第三百十三條ニ依リ宥減輕ヲ爲スヘキ者ナリ然ル
 ニ原裁判ノ茲ニ出テサルハ不當ナリト云フニ在リ依テ之ヲ審按スルニ
 凡故殺ナルモノハ曾テ積憤久怨アルト否トヲ論セス怒氣一時ニ激發
 シ自ラ抑制スルニ違ナク倏焉殘害ヲ行ヒタル者ヲ謂フ若シ夫レ潛思

靜慮豫メ意ヲ決シ謀ヲ定メ而後チ始メテ事ヲ行フカ如キハ謀殺ニシ
 テ故殺ト謂フチ得ス本案被告事件ニ付原裁判所カ判定シタル事實チ
 視ルニ怒氣鬱勃靜慮ニ違ナシトノ一句ヲ掲ケアルモ其一句ノ前ニ在
 テハ既ニ殺意ヲ決シ其後ニ在テハ兇器ヲ購求ストアルニ據レハ靜思
 熟慮豫メ謀テ後チ事ヲ行ヒタル者ナルヤ明晰ナリ然ハ則チ本案ノ事
 實ハ謀殺未遂犯罪ニシテ故殺ノ未遂犯ニ非サレハ刑法第二百九十二
 條刑法第一百十二條刑法第一百十三條ニ照シ處斷ス可キ者ナリトス然ル
 ニ原裁判所カ故殺未遂犯ト爲シ刑法第二百九十四條等ニ依リ處分シタ
 ルハ擬律ニ錯誤アル不當ノ裁判ニシテ上告ノ旨趣允當ナリトス而シ
 テ附帶上告ニ係ル妻、イノ「カ島田由太郎ト姦通シタリト」ノ「ハ證據ノ
 更ニ見ルヘキモノナキノミナラス原裁判所カ判定シタル事實外ニ涉
 ル論告ナレハ之ヲ採用スルニ由ナキ者トス
 右ノ理由ナルチ以テ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判言渡ヲ破毀シ

直チニ本院ニ於テ裁判言渡ヲ爲ス「左ノ如シ
 清水 幸 藏

前ニ辨明スル如クナルニ因リ刑法第二百九十二條豫メ謀テ人ヲ殺シ
 タル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑ニ處ス刑法第一百十二條罪ヲ犯サントシ
 テ己ニ其事ヲ行フト雖ヒ犯人意外ノ障礙若クハ舛錯ニ因リ未ダ遂ケ
 サル時ハ已ニ遂ケタル者ノ刑ニ一等又ハ二等ヲ減ストアルニ照シ死
 刑ヨリ二等ヲ減シ有期徒刑ニ處ス可キ處所犯情狀原諒ス可キ者アル
 チ以テ刑法第八十九條重罪輕罪違警罪ヲ分タス所犯情狀原諒ス可キ
 者ハ酌量シテ本刑ヲ減輕スル「チ得法律ニ於テ本刑ヲ加重シ又ハ減
 ス可キ者ト雖ヒ其酌量ス可キ時ハ仍ホ之ヲ減輕スル「チ得刑法第九
 十條酌量減輕ス可キ者ハ本刑ニ一等又ハ二等ヲ減輕ストアルニ依リ
 尙ホ一等ヲ酌減シ重懲役九年ニ處スル者也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

謀殺故殺ノ罪

明治十六年十二月五日

裁判長判事 山根 秀介 專任判事 大塚 正男

判事 昌谷 千里 判事 園田 弘

判事 小村 壽太郎 書記 石田 轍郎

(要領)犯罪ノ方法及ヒ其模様ニ徴シ謀殺タルノ事實ヲ認メナカラ之ヲ

故殺ニ問擬シタルハ擬律ノ錯誤ニ係ルモノトス

住所身分職業畧之

市 川 幸 吉

年齡畧之

明治十六年十一月二日静岡重罪裁判所ニ於テ市川幸吉カ被告事件ヲ
審理シ被告幸吉ノ鉄延棒ヲ以テ異母弟市川信吉ヲ毆打殺害シタルノ
所爲アリトシ刑法第二百九十四條ヲ適用シ無期徒刑ニ處ストノ言渡ヲ
爲シタリ原裁判所檢察官檢事補檜崎景佑ハ之ヲ不法ナリト上告爲シタ

ルノ要旨ハ本件ノ謀殺タル所以ハ被告ノ自白犯罪ノ方法及ヒ其模様
ニ徴シテ明晰疑ヲ容レサルノミナラス原判文ニ依ルモ亦謀殺罪タル
ノ諸元素ヲ具備セリト認ムルニ足レリ夫レ斯ノ如ク事實ニ徴シ判文
ニ照スモ其謀殺タルノ事實掩フヘカラス然ルテ刑法第二百九十二條
ニ照依セスシテ同法第二百九十四條ヲ適施セシハ即チ擬律錯誤ノ裁
判ナレハ之カ破毀ヲ求ムト謂フニ在リ

大審院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ法式ヲ履行シ立會檢事池上三
郎ノ意見ヲ聽クニ原檢察官上告旨趣ノ如ク本案被告事件ハ謀殺罪ヲ
組織スル決心豫備決行ノ三元素ヲ具備シ謀殺犯ナルヲ明瞭ナルニ原
裁判官ハ此ノ事實ヲ認メナカラ刑法第二百九十四條ヲ適用シタルハ
擬律ニ錯誤アルモノナレハ原裁判ヲ破毀シ本院ニ於テ相當ノ裁判ア
ラントチ請求ス尤モ被告カ所爲ハ弟信吉ノ不貞ニシテ父兄ノ懲戒ニ
遵ハサルヨリ遂ニ此ノ兇行ヲ爲シタル者ニシテ他ノ財貨ヲ貪リ或ハ

私怨ヲ懷キ漫ニ人ヲ兇殺スルカ如キ惡漢ノ比ニ非ラズ事情諒恕スヘキモノアレハ刑法第八十九條第九十條ニ照シ本刑ニ一等ヲ減シ無期徒刑ニ處セラレシテ希望スル旨ヲ陳述セリ

代官人大矢早利ハ本案原判文ヲ視ルニ明カニ謀殺ノ事實ヲ掲ケナカラ擬スルニ故殺ノ律ヲ以テシタル上ハ上告ノ原由アルモノナレハ本院ニ於テ宜シク之ヲ改正シ相當ノ判決ヲ與ヘラルヘキモノナルモ元來被告カ事茲ニ及フ所以ノモノハ弟信吉カ竊盜其他不長ノ行アリ遂ニ親屬ノ面目ヲ失スルニ至ラシテ憂フル等ノ情切ナルニ出テ彼ノ兇暴人ヲ殘害スル匪徒ト同一視スヘカラス到底其情狀大ニ憫諒ス可キ所アル者ナレハ本刑ニ二等ヲ減輕シ有期徒刑ノ最下點ニ處セラレシテ請求スル旨陳辨セリ

本件ヲ審案スルニ原判文中被告市川幸吉ハ異母弟ニシテ十二年九月ナル市川信吉カ平常心底宜シカラス屢教諭スレモ聞入サルノミナラ

明治十六年四月二十四日朝父明治郎商用兼伊豆國温泉へ出立不在ナルニ午后何レへ出タルヤ諸所搜索スルモ相分ラス其翌即チ明治十六年四月廿五日猶ホ歸宅セカルヲ以テ聊カ憤怒ヲ生シ其夜ニ至リ信吉居所相分リ即チ連レ戻リ前夜行キ先キ等ヲ詰問スル際信吉ノ袂ニ紙鳶ノ糸杵ヲ所持シ居ルヲ見出シ尙ホ之ヲ詰問スルニ内野村渡邊嘉平次門前ヨリ盜ミ來リシ旨陳述スルヲ聽キ益憤怒ニ堪ヘズ此儘生カシ置カハ後來マテ親兄弟ノ面目ニ關スヘクト思ヒ此時殺意ヲ生シ盜ミシ家へ詫ヒニ行ク可クトテ直チニ連レ立チ其際商品ノ鉄延棒長三尺八分幅一寸六分厚四分ナルヲ密ニ持出テ居村宇三社ノ東道ニ至リ該鉄延棒ヲ以テ信吉ノ横面ヲ打チ其倒レシ所ヲ仍ホ打据へ殺害シタル事實ニシテ云々トアルニ據レハ則チ被告ハ弟信吉カ不長ノ行ヲ增長シ父兄ニ耻辱ヲ與フルノ憂慮切ナルヨリ夙ニ殺意ヲ決シ之カ計畫ヲ按シ密カニ兇器ヲ用意シ故ヲニ之ヲ蹇闕ニ誘出シ以テ殺害ヲ行フタ

ルノ顛末ニシテ謀殺犯ヲ組織スル三元素即チ決心豫備決行ヲ具備シ
タルノ事實タルハ昭々手蔽フ可カラストス然ルチ原裁判官ニ於テ斯
ル事實ヲ認メ其判文ニ掲ケナカラ之チ刑法第二百九十四條ノ故殺犯
ニ問擬シタルハ即チ擬律ノ錯誤アル不當ノ裁判ニシテ治罪法第四百
十條第十項ニ適應スル破毀ノ原由アルモノトス右ノ理由ナルチ以テ
治罪法第四百二十九條ノ規則ニ從ヒ原裁判ノ全部ヲ破毀シ大審院ニ
於テ直チニ判決ヲ爲ス左ノ如シ

市川 幸吉

被告幸吉カ所爲ハ原裁判官カ認定セル事實ニ因リ謀殺犯ナルチ以テ
刑法第二百九十二條豫メ謀テ人ヲ殺シタル者ハ謀殺ノ罪ト爲シ死刑
ニ處ストアルニ依リ死刑ニ處スヘキ所犯情狀原諒スヘキアルチ以
テ刑法第八十九條重罪輕罪違警罪ヲ分メス所犯情狀原諒ス可キ者ハ
酌量シテ本刑ヲ減輕スルヲ得刑法第九十條酌量減輕ス可キ者ハ本

刑ニ一等又ハ二等ヲ減ス刑法第六十七條重罪ノ刑ハ左ノ等級ニ照シ
テ加減ス一死刑二無期徒刑三有期徒刑云々刑法第十七條第二項有期
徒刑ハ十二年以上十五年以下ト爲ストアルニ依照シ本刑ニ二等ヲ減
シ有期徒刑十五年ニ處スル者ナリ

但犯罪ノ用ニ供シタル鉄延棒ハ刑法第四十三條ニ依リ之チ沒収ス
大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十七年二月一日

裁判長判事	岡内重俊	專任判事	中島盛有
判事	大塚正男	判事	山本昌行
判事	上山惟清	書記	石田鞆郎

○毆打創傷ノ罪

(要領)人チ毆打シテ傷ヲ負セタルモ其傷ノ爲メ疾病休業ニ至リタルヤ
否ヤノ事實ヲ明示セスシテ刑法第三百一條第二項ヲ適用シタル

謀殺故殺ノ罪

即ち治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

角山新助

年齢畧之

明治十五年二月廿三日濱田輕罪裁判所ハ右新助ニ對シ毆打創傷ノ罪アリトシテ刑法第三百一一條第二項ニ依リ一月ノ重禁錮ニ處スト宣告セシ裁判ヲ不法ナリトシ濱田輕罪裁判所檢事補松本堅葉カ上告セシ理由ハ毆打創傷セシモ疾病休業ニ至ラシメタル證左ナキノミナラズ却テ疾病休業ニ至ラサルトノ檢證官吏ノ調書アルニ之カ休業ニ至ルト否トテ分別セス刑ヲ科シタルト云フニアリ對手人角山新助ニ於テモ檢察官ノ意見ノ如ク思量スル處ナリト答辨シ大審院檢事堀田正忠ニ於テハ原檢察官ノ意見ヲ擴張シ事實理由ヲ缺キタル裁判ナレハ破毀シテ他ノ相當ノ裁判所ニ移サレノコト望ムト陳辨セリ茲

刑法第三百一一條治罪法第三百四條ヲ參看シ裁判スル左ノ如シ
原裁判言渡ヲ閱スルニ新助カ羽柴彌十郎ト爭論ノ末手ヲ以テ同人ヲ毆打シ云々被害者彌十郎カ被告ニ毆打サレ傷ヲ受ケタリト申立ル耳ナラス証人阪本ツチ外三人陳述及ヒ當時ノ實況ニ就テ表徴スルニ毆打シテ傷ヲ負ハセタル罪アルモノト確認ス云々爾シテ其末尾ニ至リ突然刑法第三百一一條第二項云々トアリ抑モ刑法第三百一一條第二項ハ疾病休業ノ時間二十日ニ至ラサル者云々トアツテ其創傷ニ係ルモ疾病休業ノ二十日ニ至ラサル者ヲ罰スヘキ法文ナレハ其疾病休業ニ至ラサルヤ又ハ疾病休業ニ至ルモ其時間二十日ニ及ハサルヤヲ確認明揭シ始メテ其法文ニ適スルモノナルニ其事實理由ノ主眼タルヘキヲ論セス濫リニ刑法第三百一一條第二項ヲ適用セシハ治罪法第三百四條裁判所ニ於テ刑ノ言渡ヲ爲スニ事實及ヒ法律ニ依リ其理由ヲ明示シトアルニ法文ニ背反シタル事實理由ヲ缺キタル不法ノ裁判ナリトス

毆打創傷ノ罪

右理由ニ原キ治罪法第四百十條第九項同第四百二十八條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ適法ノ裁判ヲ受ケシムル爲メ廣島輕罪裁判所ニ移スモノ也

大審院ニ於テ檢事堀田正忠立會宣告ス

明治十五年九月十二日

裁判長判事 坂本 政均 專任判事 鳥居 斷三

判事 關 義臣 同 山根 秀介

同 昌谷 千里 書記 河波 秘雄

〔要領〕事實ノ判定ニ對シ其當否ヲ論スルモ上告ノ理由ト爲スヲ得ス

住所身分職業畧之

大場 與三郎

年齡畧之

毆打創傷被告事件ニ付明治十五年六月六日水戸輕罪裁判所カ刑法第

三百一條第二項ニ依リ重禁錮一月ニ處スト云ヒ渡シタル裁判ニ服セス上告セリ其要領ハ入野隸藏ヲ毆傷セシハ身体財産ニ對シ暴行ヲ受クルニ因リ之ヲ防衛スル爲メ止ムヲ得サルニ出タル者ナルコトハ其事蹟ト證據トヲ照徹セハ明了ナリ即チ刑法第三百十五條第一項及ヒ第三百十四條ニ適當スルモノニテ罪ヲ論スヘキニ非ルニ水戸輕罪裁判所ハ證據トスヘカラサルヲ證據トシ罪ヲ處セラレタルハ不法ナリト云ヒ對手人檢事補若井平世ニ於テハ上告趣旨ノ如ク果シテ其ノ身体ニ受ケタル暴行ヲ防衛セシ者ト見ルヘキ証左アラサレハ原裁判ヲ不當ナリト答辨セリ大審院ニ於テ專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ上告代言人今泉丘元ハ上告趣意ヲ擴張辨明シ仍ホ刑法第七十五條ニ抗拒ス可ラカサルノ所爲ハ其罪ヲ論セストアルニモ相當スヘキモノナリト追申ス立會檢事加納久宣ニ於テハ原裁判所カ認定セシ事實ニ對シ其當否ヲ論シ且其証憑ヲ不適當ナリト難スルニ事實判官ノ權内ナル

毆打創傷ノ罪

處分ナレハ不服ヲ申立ルモ上告ノ理由ト爲スタ得サレハ第一ニ棄却
 アラントシテ望ムト陳辨セリ因テ成規ノ如ク會議ノ上茲ニ判決ス上告
 ノ理由トシテ原裁判所カ認定セシ事實ニ對シ其當否ヲ論スルモ事實
 判官ノ正當ナル權内ニテ其腦裏ニ感スル處ノ心證ヲ資リ確認セシモ
 ノナレハ他ヨリ侵入シ得ヘカラサルハ論ヲ俟マス就中其證憑ノ論辨
 ニ至リテハ治罪法第四百十六條ニ被告人白狀官吏ノ檢証調書證據物
 件証人ノ陳述鑑定人ノ申立其他諸般ノ徵憑ハ裁判官ノ判定ニ任スト
 アリテ是亦輒シ動シ得ヘカラサルハ著明ナリ到底治罪法第四百十條
 第一乃至十一項ニ定メタル上告ヲ爲スノ規則ニ適當セサレハ上告ノ
 趣旨總テ相立タス
 右ノ如ク成ルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ依リ上告ヲ棄却スルモ
 ノナリ

大審院ニ於テ檢事加納八宣立會宣告ス

明治十六年二月一日

裁判長判事 關 義 臣 專任判事 鳥 居 巖 三

判事 伴 正 臣 同 土 師 經 典

同 小村壽太郎 書記 野澤 潜 藏

〔要領〕人ヲ毆傷シタルモ其疾病時間幾日ナルヲ証明セス又刑法第三
 百一條ヲ適用スルモ其何項タルヲ明示セサルハ即チ事實ノ理由
 ト法律ノ理由トナ付セサル不法ノ裁判ナリトス
 又官署ノ命令ヲ執行スル巡查ニ負傷セシメタルモノハ刑法第百
 三十九條第百四十條第三百一條ヲ適用ス可キニ單ニ第三百一條
 ニ依照セシハ擬律ノ錯誤ニ係ルモノトス

住所身分職業畧之

梅 津 源 十 郎

年 齡 畧 之

毆打創傷ノ罪

右源十郎カ被告事件ニ付明治十五年三月廿二日德島重罪裁判所ニ於テ被告ハ明治十五年一月廿七日巡查今田万吉ニ銃創ヲ爲負タル所爲ニ對シ殺意アリテ犯シタリトノコトニ至テハ其証憑不充分ナリトシ刑法第三百一條ニ依リ三年ノ重禁錮ニ處シ且犯罪ノ用ニ供シタルビズトル及ヒ犯罪ノ用ニ供スル目的ヲ以テ所持スル物品ハ沒收ストノ言渡ヲナシタル處原裁判所檢察事野中久徵ハ右裁判ヲ不當ナリトシ明治十五年三月廿五日上告ヲナセリ其要旨ハ第一被告カ明治十五年二月二日德島縣警察署ニ於テ爲シタル口供中屋敷内ニ逃ケ入リシ故逃ケ道之ナク最早追付カレントスルニ付巡查ヲ打斃シ逃走セント決シ携ル所ノピストル銃ヲ二發相發シタルモ終ニ逮捕セラレタル事又窮迫ノ餘リ一時打殺シテナリトモ其場ヲ逃レント發砲シタルコトアリテ如斯自由獨意ノ白狀証據ニ對シ打消スヘキ徵憑排却スヘキ事實モナキニ原裁判官カ刑法第三百一條ヲ當行シ判決ヲ下シタルハ不法ノ甚

シキモノト第二犯罪ノ用ニ供シ及犯罪ノ用ニ供スル目的ヲ以テ所持スル物品ハ被告ノ所有タルコト判然ナラサルニ沒收ノ言渡ヲ爲シタルハ是亦不法ノ判決ナルヲ以テ破毀ヲ求ムト云フニ在リ被告答辨ノ要旨被告ハ固ヨリ殺害ノ故意ナキヲ以テ三年ノ重禁錮ニ處セラレタルハ至當ノ裁判ナルヲ以テ之ニ反スル原檢察官ノ上告趣意ハ不當ナリト云フニ過キス

大審院檢察事池上三郎ニ於テハ右上告ニ對スル意見ヲ陳述シ且附帶ノ上告ヲ爲シタリ其要旨ハ

第一被告カ巡查今田万吉ニ負傷セシメタル疾病時間ヲ證明セズシテ重禁錮三年ヲ言渡シタルハ事實ノ理由ヲ付セサル裁判言渡ナリ

第二被告カ犯罪ニ對シ刑法第三百條一ヲ適用シタルモ其一二三項中ニ於テ何項ヲ適用スルカヲ明示セサルハ法律ノ理由ヲ付セサル裁判言渡ナリ

毆打創傷ノ罪

第三巡查今田万吉カ被告ヲ捕縛スルヤ官署ノ命令ヲ執行スルモノナ
リ此執行者ナル巡查ニ對シ暴行ヲ爲シ毆傷シタルモノナレハ刑法第
百三十九條第四百十條第三百一條ヲ適用セサル可カラサルニ單ニ第
三百一條ニ依照ゼシハ擬律ノ錯誤ナリトス

以上陳述スル如ク治罪法第四百十條九項十項ニ掲ケル上告ノ理由ア
ルモノニ付治罪法第四百二十八條ノ規則ニ從ヒ原裁判言渡ヲ破毀シ
他ノ裁判所ニ移スノ言渡アラソク希望スト陳述シタリ

代言人飯塚銀彌答辨ノ要領ハ原檢察官上告及ヒ本院檢事ノ附帶上告
俱ニ不理ニシテ原裁判ハ完全無缺ト云フニ過キス尤モ犯罪ノ用ニ供
スル目的ヲ以テ所持スル物品沒收ノ點ニ至テハ檢事ト同意見ナリト
陳述セリ仍テ之ヲ判決スル左ノ如シ

原裁判所ニ於テ被告梅津源十郎カ巡查今田万吉ニ負傷セシ所爲ハ故殺
ノ意アリテ犯シタリトノイニ至テハ其証憑不十分ナリト認定セシハ

ハ固ヨリ事實裁判官ノ特權ニシテ輒ク他ヨリ之ヲ非難シ得可カラサ
ルモノナルヤ勿論ナリト雖モ右万吉カ負傷ノ爲メ疾病時間幾日ナル
トチ證明セス又刑法第三百一條ヲ適用スルモ其一二三項中ニ於テ何
項ヲ適用スル歟チ明示セサリシハ事實ノ理由ト法律ノ理由トチ付セ
サル耳ナラス刑法第三百二十九條第四百十條第三百一條ヲ適用スヘキ
ニ單ニ同法第三百一條ニ依照セシハ擬律ノ錯誤ト云フヘク旁以テ不
法ノ裁判ナリトス將被告ガ犯罪ノ用ニ供シタルピストル銃其用ニ供
スル目的ヲ以テ所持スル物品ハ沒收ストノ言渡シアルモ相當官吏ノ
作リタル調書其他ノ書類ヲ監査スルニ被告同行者石丸徳太郎所持品
トアリテ公判ノ結果シテ徳太郎ノ所有ニ係ルヤ否ヤチ審明シタルモ
ノナシ由是觀之右ノ理由審理シタル上ニアラサレハ未以テ沒收ノ當
否ヲ論決スルニ由ナキモノトス

前ニ辨明スル理由ナルチ以テ治罪法第四百廿八條ノ規則ニ從ヒ原裁

判言渡全部ヲ破毀シ廣島輕罪裁判所ニ移シテ更ニ審判セシムルモノナリ

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年三月十六日

裁判長判事 土師 經典 專任判事 石井 忠 恭

判事 高木 勤 同 昌谷 千里

同 園田 弘 書記 岩田 鍊

〔要領〕毆打創傷ノ如キ其原因ノ異ナルニ從テ之ヲ罰スルニモ亦各法律ノ明文アレハ其事實ノ理由ヲ詳悉シ始テ當該ス可キ法律ヲ擬ス可キモノナルニ其事實ノ理由ヲ付セス且一切ノ証憑モ明示セスシテ刑ヲ言渡シタルハ治罪法第三百四條ニ背反シタル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

野田 金 五 郎

年齢略之

毆打創傷被告事件ニ付明治十五年六月二十九日一宮治安裁判所ニ於テ名古屋輕罪裁判所カ刑法第三百一條ニ依リ一等ヲ減シ重禁錮二十一日ニ處スト言渡シタル裁判ニ服セス上告セリ其要領ハ兩夜暗黒ナルニ横牆ヲ踰ヘ邸内ニ足音近ツクニヨリ賊ナリト認メ捕縛セシモノナレハ刑法第三百十五條第二項ニ依リ處斷セラルヘキモノナルニ刑法第三百一條ニ依リ單ニ毆打創傷ノ罪ナリトシ處斷セラレタルハ不當ナリト云ヒ又上告追伸書ヲ以テ原判文ハ如何ナル事實ヨリ(ムメ)ノ忍ヒニ來ル乘シ毆打シタルヤ一ツモ觀ルベキ事實ヲ掲ケス疾病休業ノ時間ニ至テハ數日間臥褥セシト示サレタルモ其臥褥ノ日數ヲ示サス且是等ノ証憑ヲ明示セシレサルハ治罪法第四百十條第九項ニ依リ破毀アラソフテ願フト云フニアリ對手人檢察官警部下政恒ハ上告ノ

殺打創傷ノ罪

旨趣ハ言テ左右ニ托シ不論罪ノ處分アラソフヲ申立ルト雖モ捕縛ノ後毆打セシモノニテ故意ニ出タル明瞭ナレハ原裁判ヲ以テ至當ナリ
テ 思料スト答辨セリ大審院ニ於テ專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ上
呈代言人中島又五郎ノ陳述立會檢事池上三郎ノ意見ヲ聽キ判決スル
左ノ如シ

上告追伸ノ理由ニ付原裁判言渡ヲ聞スルニ(暗夜咫尺ヲ辨セサルニ人
ノ足音スルハ正ク賊ナリト思惟シ云々實父利八カ多年親密ナルカ爲
メ該夜偶々尋テ來リシ旨聞知シタリト申供スルモ父利八並被傷者
及ヒ現場ヘ立會セシ者ノ陳述檢察官ノ意見ヲ參案スルモ被告カ「ムメ
ノ忍ヒ來ルニ乘シ毆打シテ右手腕骨ヨリ腕骨ノ部ニ至リ其他數ヶ所
ニ傷ヲ負ハセ數日間臥褥ニ至ラシメタル証憑ニ於テ充分ナリ云々」ト
アルモ毆打創傷ノ如キ豫メ謀テ爲セルモノト卒然事ニ觸レ爲セルモ
ノト又ハ門戶牆壁ヲ踰越損壞スル者ヲ防止スルニ出テタル者ト各其

原因ナクシテハアルヘカラス從テ之ヲ罰スル法律ノ明文アルアレハ其
事實ノ理由ヲ詳悉シ始テ當該スヘキ法律ヲ擬施スヘキモノナルニ原
裁判所ハ其事實ノ理由ヲ備ヘス且一切ノ証憑ヲ明示セズ輒シ刑法第
三百一條ヲ適用シ重禁錮二十二日ヲ言渡タルハ治罪法第三百四條ニ
違反セシ不法ノ裁判ナリトス其他刑法第三百十五條第三項ニ依リ處
斷セラルヘキモノナリト云フモ前ニ辨明スル如ク既ニ全部ヲ破毀ス
ヘキ原由アルヲ以テ別ニ辨明與ヘス

右ノ理由ナルニ依リ治罪法第四百二十八條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ適
法ノ裁判ヲ受ケシメシカ爲メ岐阜輕罪裁判所ヘ移ス者也
大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年五月十日

裁判長判事 伴 正臣 專任判事 鳥居斷三

判事 石井忠恭 同 土師經典

毆打創傷ノ罪

同 小村壽太郎 書記 澤野潛藏

(要領)人ヲ刃傷シ三指ヲ切斷スルニ至ラシメタル如キハ即チ身体ヲ殘
虧シテ癱疾ニ致シタルモノト謂ハサルヲ得ス故ニ其所爲ハ刑法
第三百條末項ニ依リ處斷ス可キモノトス

住所身分職業畧之

小俣 彌 三郎

年齡畧之

明治十五年九月十五日横濱輕罪裁判ニ於テ小俣彌三郎カ毆打創傷被
告事件ヲ審判シ數罪中一ノ重キ艱母(タミ)ヲ刃傷シタル罪ヲ論シ刑法
第三百一條第一項ニ依リ同第三百六十三條ニ照シ本刑ニ二等ヲ加ヘ
重禁錮一年六月ニ處スト言渡シタル裁判ニ對シ同裁判所檢事補島村
文耕ハ上告ヲ爲シタリ其要旨ハ被告人カ負傷セシメタル艱母(タミ)ノ傷
痕ヲ點檢スルニ醫師診斷書ノ如ク左手ノ中指示指環指ハ不治ノ創傷

ニシテ指頭ヨリ第三關節ヲ切斷シ全ク脱落セシメ即チ癱疾ニ致シタ
ル者ナレハ刑法第三百條同第三百六十三條ニ該ル重罪犯ナルニ裁判
官ハ二十日以上疾病休業ニ至ラシメタル輕罪ナリト爲シ處斷シタル
ハ不當ナリト云フニ在リ大審院檢事林三介ハ原裁判ヲ相當ナリトシ
被害者(タミ)ノ創傷ハ醫師ノ診斷書ニモ癱疾ナリト鑑定シタルニ非ス
而シテ裁判官ニ於テ癱疾ニ非スト事實ヲ判定セシモノナレハ其事實
ニ侵入シ判定ノ當否ヲ論スルコトヲ得サルモノトス且手指ヲ切斷スル
モ一肢ヲ折傷シタルニ非サレハ固ヨリ癱疾ヲ以テスルノ限ニ在ラス
トノ意見ヲ陳述シ被告代理人志摩萬治郎ハ上告ヲ不當ナリトシ刑法
第三百條ニ一目ヲ瞎シ一耳聾シ一肢ヲ折リ其他云々トアルハ先ツ
一目一耳一肢ノ項目ヲ掲ケ其餘之ト同視スルニ足ルノ重傷ヲ指スモ
ノニ其項目ニ拘ハラス何等ノ輕傷ト雖モ其他云々中ニ包含スト謂
フコトヲ得ス即チ本按事件ノ如キハ同條ヲ適用ス可キ者ニ非ス且裁判

殺打創傷ノ罪

中癡疾ニ非スト判定セシ事實ハ他ヨリ之ヲ動カスヲ得ストノ旨趣
ヲ辨明シタリ依テ之ヲ判決スルヲ左ノ如シ

刑法第三百條未項ニ一目ヲ瞎シ一耳ヲ聾シ又ハ一肢ヲ折リ其他自體
ヲ殘虧シテ癡疾ニ致シタル者云々トアリテ人ヲ創傷シ其身體ヲ毀損
シテ其部分ニ於ケル重要ナル能力ヲ虧缺シ畢生不具之人ト爲ラシメ
タル所爲ハ総テ同條ニ間擬スヘキ者ニシテ單ニ一目一耳一肢ノミニ
限リ癡疾ト論定スルノ律意ニ非サルナリ本件被告人カ輟母マミヲ刃
傷シ三指ヲ切斷スルニ至ラシメタルカ如キ即チ身体ヲ殘虧シテ癡疾
ニ致シタル者ト謂ハサルヲ得ス而シテ被告人ノ犯罪ハ警察署ノ調書
醫師ノ診斷書及ヒ關係人ノ陳述等ニ依リ其情況ヲ察スレハ或ハ一時
精神錯亂ニ出テタルノ所爲ニ似タリト雖ヒ其犯罪ノ性質ハ刑法第三
百六十三條ノ末文ニ該當スル重罪タルヲ免レス抑事實ヲ判定スルハ
裁判官ニ任從スル所ト雖ヒ本件ノ如キ現ニ三指ヲ切斷シ其不具ノ人

ナルヲ一目瞭然タル者ニ於テ其癡疾ナリヤ否ハ仍ホ裁判官ノ判定ニ
任從ス可キ者ト謂フヲ得サルナリ故ニ原裁判所カ被告人ノ所爲ニ
對シ刑法第三百條ノ明又アルニ抱ハラス單ニ二十日以上疾病休業ニ
至ラシメタル者ト斷定シ輕罪ノ處分ヲ爲シタルハ管轄違ニ係ル不法
ノ裁判ナリトス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十八條ノ成規ニ從ヒ原裁判官渡
ノ全部ヲ破毀シ本案被告事件ヲ神奈川重罪裁判所ニ移シ更ニ審判セ
シムルモノナリ

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月二十三日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 昌谷 千里

判事 山根 秀介 判事 高木 勤

判事 園田 弘 書記 山縣 武男

毆打創傷ノ罪

〔要領〕

(一) 殺意ナキノ証據充分ナルモ、縱令器物ノ用法及ヒ現場ノ景

況ニ於テ避ク可カラサル危險又慘酷ナル所爲アル殺害ト雖

モ之ヲ故殺ト爲スヲ得ス

(二) 自己ノ身体ニ暴行ヲ受ケタルモ既ニ他人ノ爲メニ引分ケラ

レ多少時間ヲ經過シタル後ヲ尙ホ怒ニ乘シ暴行人ヲ毆打シ

タル如キハ刑法第三百九條ヲ適用スルノ限リニアラス

住所身分職業畧之

菅 谷 熊 吉

年齢畧之

明治十五年六月三十日東京重罪裁判所ニ於テ右菅谷熊吉カ被告事件
ヲ審判シ菅谷熊吉ハ薪割ヲ用テ伊澤清吉ノ左耳上部ヲ毆打シ因テ死
ニ致シタル者ト爲シ刑法第二百九十九條ニ依リ重懲役九年ニ處ストノ
言渡ヲ爲シテ東京重罪裁判所檢事岡本豐章ハ之ヲ不當ノ裁判ナリ

トシ上告ヲ爲セリ其要點ハ本件ノ所爲ニ對シ重罪裁判所カ刑法第二
百九十九條ノ罪アリト判決シタルハ全ノ刑法第二百九十四條ヲ誤解シ
タルニ原因ス抑モ故殺ノ罪ニ就テハ殺意アルヲ証明スルハ極メテ必要
ナリ而シテ其殺意タル必スシモ犯者ニシテ我ハ被害者ノ生命ヲ絶ツト其
決意ヲ表スルヲ限リ之ヲ認視スヘキニアラサルナリ若シ被害者ノ死避
ク可カラサルノ結果即チ危險ノ場所又ハ慘酷ナル器械ノ用法ニ出テ
タル場合ハ故意アリタリキト爲サ、ル可カラサルナリ故ニ本件ノ如
キハ刑法第二百九十四條ヲ適用シ處分ス可キ者ナリ然ルニ原裁判所
カ刑法第二百九十九條ヲ適用シタルハ法律ヲ誤用シタル者ナリト云
フニ在リ對手人菅谷熊吉カ答辨ノ要領上告ノ論旨ハ單行ノ論理ニ止マ
リ事物各自ノ情ト理トヲ參酌シタル者ニアラサレハ本件適當ノ論理テ
リト云フ可カラス若シ被害者ニ於テ被上告人ニ對シ一モ暴行ヲ加ヘ
ズ被上告人ニ於テ上告狀明記シタルカ如キ所ノ兇行ニ出タル者ナラ

毆打創傷ノ罪

ハ上告ノ論理或ハ其當ヲ得ム本件ノ如キハ被害者ヨリ過甚ノ暴行
 凌辱ヲ受ケ憤怒ニ堪ヘサルニ事ノ輕重大小ヲ顧ルノ違ナシ其憤怒
 ナ漏スノ結果偶々被害者ヲ死ニ致シタル者ニ始終殺意ナキ場合ニ
 於テハ故殺ヲ以テ論ス可キ者ニ非スト謂フニ在リ被上告代言人白石
 剛ハ答辨ノ趣旨ヲ擴張シ被上告人ノ所爲ハ故殺ヲ以テ論ス可キ者ニ
 非スト論辨シ且附帶上告ヲ爲シタリ其要旨ハ被上告人カ所爲ハ自己
 ノ身体ニ暴行ヲ受ケタルニ原因シタル者ナレハ刑法第三百九條ヲ適
 用シ其罪ヲ宥恕スヘキ者ナルニ原裁判此ニ出テサルハ不當ナリト云
 フニ在リ本院檢事池上三郎ノ意見ヲ聽キ之ヲ判決スル左ノ如シ
 凡器物ノ用法及ヒ現場ノ景況ニ於テ避ク可カラサルノ危險又慘酷ナ
 ル所爲ヲ行ヒタル殺害ハ法律ノ推測ヲ以テ有意ノ故殺ナリト認定ス
 ルヲ得然レモ被上告人ニ於テ毫モ殺意ナキノ證據充分ナル片ハ器物
 ノ用法又ハ現場ノ景況ノニ拘ハリ概シ故殺ノ所爲ナリト審斷ス可

カラサルナリ本案菅谷熊吉カ被告事件ハ器物ノ用法及ヒ現場ノ景況
 ニ於テハ避ク可カラサル慘酷ノ所爲アリト雖モ原裁判所ニ於テ舉示
 シタル所ノ書類ヲ視ルニ其初メ被害者伊澤清吉カ爲メニ下駄ヲ以テ
 其面部ヲ殴打セラレ流血スルニ至ルモ神田五軒町巡査派出所ニ訴出
 其出張ヲ請求シタル等ノ事實ニ據レハ其平穩ノ處分ヲ乞フ意ニテ毫
 モ其兇害ノ意ナキヲ見ルニ足レリ而シテ被上告人カ飲酒歸宅ノ際被
 害者伊澤清吉カ臺所ニ睡臥シタルヲ見テ憤怒仍ホ止マズ急遽思慮ス
 ルニ違ナシ殺害ヲ以テ伊澤清吉ヲ殴打シ死ニ致シタル者ニシテ其殺
 意ナキハ亦原裁判所カ認定シタル所ナリ因テ刑法第二百九十九條ヲ
 適用シタルハ相當ノ裁判ニシテ上告ノ旨趣ハ相立サル者ト爲ス
 又刑法第三百九條ハ自己ノ身体ニ暴行ヲ受ケタルニヨリ直ニ怒ヲ發
 シ云々トアリテ本件ノ如キ其暴行ヲ受ケタルモ既ニ他人ノ爲メニ引
 分ケラレ被害者ハ臺所ニ睡臥シタル景況アリテ多少時間ヲ經過シタ

ル所爲ニ對シ適用スヘキ者ニ非サレハ附帶上告ノ旨趣モ亦相立サル者ト爲ス

右ノ理由ナルヲ以テ治罪法第四百二十七條ニ從ヒ上告ヲ棄却スル者也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年七月廿六日

裁判長判事 西岡 逾明

專任判事 大塚 正男

判事 山根 秀介

同 高木 勤

同 昌谷 千里

書記 津田 重熙

要領 毆打創傷ノ如キハ被害者ノ傷痕ノミヲ以テ被告人ヲ刑ス可カラズ必ズ其毆傷ヲ成スノ起因及ヒ其器具且現場ノ模様等ヲ詳悉スルニアラサレハ未ダ以テ罪ノ成否ヲ判定スルニ由ナキモノトス

住所身分職業略之

四 方 常 吉

年齢略之

毆傷犯罪被告事件ニ付明治十五年九月十四日神戸輕罪裁判所ニ於テ右被告人ハ明治十五年七月廿五日自己邸内ニ於テ黑崎園太郎ヲ毆テ頭部ニ傷ヲ負セ二十日ニ至ラサル間疾病セシメシ者ト判定シ刑法第三百一條ニ照シ重禁錮一月ニ處スト言渡シタリ
被告四方常吉ハ該裁判ニ對シ上告ヲ爲シタルノ要領ハ被害者黑崎園太郎ヲ毆打セサルハ現場目撃シタル水島梅吉鈴木忠ハカ公判廷ニ於テ爲シタル證言ニ因リ明確ナルノミナラス本件ノ起因タルヤ被害者園太郎ハ被告人カ雇人ニシテ平素惰慢雇主即チ自分ノ指示ヲ用キ
明治十五年七月廿五日將ニ失火ニ至ラントスルノ災ヲ釀成シタルニ因リ一時呵責シ警察署ニ召連レ訴ヘント爲シタル處自ラ自宅境界ノ高塚ヲ乘越ヘ逃逸セリ被害者ノ傷ハ其際ニ成シタル者ナル可シ其

毆打創傷ノ罪

證ハ園太郎口供ニトウシテ向ヘ落テタルカ評臆セストアルニ因リ之
ヲ見ルモ自傷タルヲ明瞭ナリ然ルチ原裁判所ハ被告人ニ對シ刑ノ言
渡ヲ爲シタルハ不法ノ裁判ニ付破毀ヲ求ムト謂フニ在リ對手人檢事
補吉川直簡カ答辨ノ要旨同上告ノ趣意トスル處ハ事實認定上ノ當否
ニアレハ上告ノ理由不相立者ト陳述セリ

大審院ニ於テ治罪法第四百廿五條ノ規則ヲ履行シ檢事池上三郎ノ意
見ヲ聽クニ上告ノ論旨ハ不相立者ト思考スレト原裁判亦其當ヲ得
リト謂ヒ難シ何トナレハ被告人カ毆打ノ用ニ供シタル器物ノ何タル
ト其負ハセタル疾傷ノ形容等ヲ明示セサルハ即チ事實ノ理由ヲ缺キ
タル判定ニ付破毀ノ原由アル者ト認メ附帶ノ上告ヲ爲ス旨ヲ開陳セ
リ仍テ判決スルヲ左ノ如シ

凡毆打創傷ヲ爲シタル場合ニ在テハ被害者ノ傷痕ノミヲ以テ被告人
ヲ刑ス可ラサルハ論ヲ俟ス其毆傷ヲ成スノ起因及ヒ其器具現場ノ摸

様ヲ詳悉セサレハ罪ノ成立ヘキヤ否ヲ判定スルニ由ナキ者ナリ本件
ノ如キ原裁判言渡書ニハ止テ黑崎園太郎ヲ毆チ頭部ニ傷ヲ負ヒ病疾
時間二十日ニ至ラサル者トノミ提ケテ事實ノ理由ヲ明示セサルハ治
罪法第四百十條第九項ニ定タル上告ノ原由アル者トス依テ治罪法第
四百二十八條ニ從ヒ原裁判言渡ノ全部ヲ破毀シ更ニ大坂輕罪裁判所
ニ移シ審判セシムル也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

明治十六年九月十三日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介

判事 中島 盛有 判事 高木 勤

判事 昌谷 千里 書記 飯島 偉

(要領)人ヲ毆傷死ニ致シタルモ其殺意ノ有無ヲ審明セサレハ之カ判定
ヲ爲スニ由ナシ是即チ治罪法第三百四條ニ背反シテ事實ノ理由

毆打創傷ノ罪

ヲ明示セサルモノトス

住所身分職業畧之

高野源吉

年齢畧之

毆打死ニ致シタル被告事件ニ付明治十五年八月二十六日群馬重罪裁判所ニ於テ刑法第二百九十九條第八十一條ニ依リ輕懲役六年ニ處スト言渡シタル裁判ニ對シ檢事石川重玄ハ之ヲ不當ナリトシ上告セル要領ハ凡ソ罪ヲ斷スルハ其形跡ニ就テセサルヘカラス而被告カ所爲タル重大ナル薪割斧ヲ以被害者カ睡臥ヲ機會トシ痛ク毆撃シ以死ニ致シタルハ故殺犯ト言ハサルヲ得ス如何トナレハ被告カ平素被害者ヨリ屢蒙ル罵詈毆打等ノ耻辱ヲ復讐セシ爲ニシテ僅カニ毆打ニ止ムルノ意ナラハ傍ヲニ在ル薪又ハ棒ヲ用ヒテ足ルヘキニ殊更ニ該兇器ヲ撰ミタルヲ以見レハ故殺ノ形跡タル言テ俟タス且証人ノ陳述ニ據

ルモ亦明確ナレハ刑法第二百九十四條第八十一條ニ依ラサルヲ得ス然ルヲ原裁判所ハ同第二百九十九條ヲ適用シテ處斷ニ及ヒタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ對手人高野源吉ニ於テハ抑故殺トハ臨時殺意ヲ起シテ其ノ行爲アル者ヲ云フナリ而被告ニ於テハ毫モ殺意アルニ非ス只毆打スルノ意ニ止マレリト答辨ス

大審院檢事長渡邊驥ハ附帶上告ヲ爲テ曰被告ノ處爲タルヤ原檢察官上告趣意ノ如ク故殺ト認ムヘキモノアルモ其之ヲ死ニ致シタル當時果シテ故意ニ出テタルヤ否審明ヲ詳カニセサルヲ以之ヲ知ルニ由無シ是即チ事實ノ理由ヲ付セサル裁判ナリト思考スルヲ以治罪法第四百二十八條ニ從ヒ之ヲ破毀シ他ノ重罪裁判所ニ移スノ言渡アラソクヲ望ムト

大審院ニ於テ立會檢事ノ意見上告代言人ノ陳述ヲ聽クニ檢事林三介ニ於テハ檢事長渡邊驥附帶上告ノ趣旨ト總テ同論ナリト云ヒ代言人河

毆打創傷ノ罪

村訶ハ凡獄ヲ折ムルハ必ス處爲ノ結果ノミニ偏スヘカラスシテ其念慮如何ヲ省セサルヘカラス而被告ハ固ヨリ殺意ノアルニ非スシテ只復讐ヲ爲スノ主意ナレハ之ヲ行フニ方リテ薪或ハ棒ヲ取ラス重量ノ斧ヲ用ヒタルモ強ク毆打ニ堪ユル物ヲ撰ミタルニ外ナラスシテ是人情ノ常ナレハ單ヘニ此結果ノ爲メニ故殺ノ念慮アリシモノト定ムヘカラス又原裁判言渡ニ於ルモ鬪毆殺タルノ理由ハ充分學示セルモノニテ素ヨリ故殺ニ非サレハ其理由ヲ詳明スル謂レ無キニ付間然スルナシト云フニ在リ依テ判決スル左ノ如シ

原裁判言渡書ヲ見ルニ福造ノ假寢ヲ見ルヤ復讐ノ念ヲ生シ傍ナル眞木割斧ヲ執テ痛ク頭部ヲ毆傷シ因テ福造ヲ死ニ致シタルモノト判定ストアリ而其行爲タルヤ致死ニ堪ユル兇器ヲ撰ンテ打々之ヲ毆殺シタルモノナルヲ以觀ルトキハ被害者カ寢臥ノ機會ヲ得タルニ及ンテ已ニ殺意ヲ生シ傷殺セシモノニシテ所謂故殺犯ナルヲ免カル、能ハ

サルカ如シト雖檢事長渡邊驥附帶上告ノ如ク原言渡書ニハ漠然復讐ノ念ヲ生シトアルノミニテ當時果テ殺意有無ノ詳明ヲ缺漏セルニ付之カ判定ヲ爲スニ由無キモノトス是即チ治罪法第三百四條事實ノ理由ヲ明示セサルモノナルニヨリ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更ニ相當ノ裁判ヲ受ケシメシカ爲メ浦和重罪裁判所ニ移スモノ也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年九月廿一日

裁判長判事 鳥居 斷三 專任判事 伴 正 臣

判事 薄井 龍之 判事 園田 弘

判事 小村 壽太郎 書記 香田 龍興

○殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

〔要領〕馬骨暴行ヲ受クルニ因リ忽然怒ヲ發シ其馬骨暴行ヲ爲シタルモ

毆打創傷ノ罪 殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

ノヲ毆傷シ其疾病休業二十日ニ至ラサルモノハ刑法第三百九條及
ヒ第三百十三條ニ照シ減等ス可キモノナルニ單ニ第三百一條第
二項ニ依リ處斷シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

佐 賀 卯 平

年 齡 畧 之

毆打創傷被告事件ニ付明治十五年七月二十四日若松輕罪裁判所ニ於
テ被告人ノ所爲ハ自宅ニ於テ安達富吉ト口論ノ末薪ヲ以テ富吉ニ面
部ニ毆傷セラレタルヨリ傍ニ在リタル割木ヲ以テ富吉ノ頭部ヲ毆傷
シ疾病休業二十日間ニ至ラシメタル罪刑法第三百一條第二項ニ照シ
重禁錮一年ニ處スト言渡セリ
原裁判所檢事補清水民次郎ハ該裁判ニ對シ上告ヲ爲シテ曰抑被告カ
犯罪ノ性質ハ毆傷ナリト雖モ其事實ニ至テハ敵手安達富吉カ酌訂ニ

乘シテ罵詈暴言至ラサル無シ剩ヘ薪ヲ以テ被告人ノ面部ヲ打傷シタ
ルニ因リ直ニ怒ヲ發シ富吉ヲ毆傷シタル者ナリ苟モ如此暴亂ニ遭遇
シ之ニ激向スルハ人情ノ最モ然ラサルヲ得サル處ニシテ即チ刑法第
三百九條第三百十三條ヲ適用スヘキヲ當然ナリ然ルチ原裁判玆ニ出
テサルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト言ハサルヲ得ス仍テ破毀ヲ求ムト對
手人佐賀卯平ニ於テモ上告ノ趣旨ニ異論無之旨答辨セリ
大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ檢事加納久宣ノ意見ヲ聽クニ本
件ハ上告ノ論旨至當ニシテ且原裁判官ニ於テモ已ニ被告人ハ最初安
達富吉ヨリ毆傷サレタルヲ以テ直ニ怒ヲ發シ富吉ヲ毆傷シタルノ事
實ヲ認メナカラ宥恕ノ法ヲ適用セサルハ不當ナルニ付直チニ相當ノ
裁判アラノヲ望ムト辨明セリ

本件上告ヲ審按スルニ被告人ノ所爲ハ安達富吉ヨリ罵詈暴行ヲ
受クルニ因リ忽然怒ヲ發シ暴行人富吉ヲ毆傷シ其疾病休業二十日ニ

殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

至ラサルヲハ原裁判言渡書ニ原キ訴訟書類ニ就テ判然確認スルニ足
ル然ルニ原裁判官ハ尋常毆傷ト誤認シ單ニ刑法第三百一條第二項
ニ依リ被告人ヲ處斷セシハ擬律錯誤ノ裁判ニシテ上告ノ趣旨ヲ允當
ナリトス仍テ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ大審院ニ於テ
直チニ裁判スルヲ左ノ如シ

佐賀卯平

前ニ辨明スル理由ナルヲ以テ被告人ノ所爲ハ刑法第三百一條第二
項ニ依リ一月以上一年以下ノ重禁錮ニ該ルモ自己ノ身体ニ暴行ヲ受
クルニ因リ直ニ怒ヲ發シ暴行人ヲ毆傷シタル者ナレハ刑法第三百九
條同第三百十三條ニ照シ本刑ニ三等ヲ減シ仍ホ情狀ヲ原諒シ刑法第
八十九條同第九十條ニ依リ本刑ニ一等ヲ減シ通シテ四等ヲ減シ刑法
第七十條同第七十一條ニ則リ拘留ニ換ヘ被告人ヲ拘留二日ニ處スル者
也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年八月二十日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介

判事 大塚 正男 判事 石井 忠恭

判事 高木 勤 書記 石田 轍郎

(要領)自己ノ身体ニ暴行ヲ受クルニ因リ直ニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺害シ
タルモノハ刑法第三百九條及ヒ第三百十三條ニ照シ其罪ヲ宥恕
大可キモノナルニ止テ酌量減輕ノ情狀アルモノトシテ刑ヲ適用
シタルハ擬律ノ錯誤ニ係ルモノトス

住所身分職業畧之

渡邊 辰次郎

年齢畧之

故殺被告事件ニ付明治十五年七月二十四日福島重罪裁判所カ刑法第

殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

二百九十四條同第八十一條同第八十九條同第九十條ニ依リ輕懲役七年ニ處スト言渡タル裁判ニ對シ檢事田中玄又ハ上告セリ其要領ハ被告辰次郎ハ佐藤基宅ニ於テ太田幸藏菅野忠治ニ謂レナキ難題ヲ言ヒ掛ケラシタル末毆打凌辱ヲ受ケ怒ヲ發シ幸藏ヲ殺害セシ事實ニテ刑法第二百九十四條ヲ適用セシハ允當ナルモ毆打凌辱ヲ受ケタルモノト認メナカラ同第三百九條及ヒ同第三百十三條ヲ適施セサルハ擬律ノ錯誤ナリトス因テ破毀ヲ求ムト云フニアリ

對手人渡邊辰次郎ハ之ニ答辨セズ
大審院ニ於テ專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ立會檢事林三介ノ意見被告代官人平野春江ノ陳述ヲ聽キ之ヲ審按スルニ

原裁判言渡ニ(中略)被告カチニ差圖ノ我カ頭ヲ打タセリトノ苦情ヲ云ヒ掛ケ被告ハ否ラスト答居ル傍ラヨリ幸藏ハ渡邊カ辰次郎打タセタルニ相違ナシト發言シ打懸レハ續テ忠治モ打懸リ終ニ捻伏セ

ラル無躰ニ打擲セラル、儘ニナリ居タルチ戸主共且其場ニ居合セタル四栗伊之助太田留藏等カ仲裁ニ入り既ニ歸宅ナサント其場ヲ立戸外ニ出ルヤ又モ幸藏忠治追來リ未ダグヅ、シテ居ルカ半殺ニシテ遣ラント兩人ニ打掛ケラレ云々トアリテ被告辰次郎カ幸藏ヲ殺害セシ事實ハ彼レ等カ挑發ニ原因セシ故殺ナリト認メタレハ宜ク刑法第三百九條自己ノ身体ニ暴行ヲ受クルニ因リ直チニ怒ヲ發シ暴行人ヲ殺傷シタル者ハ其罪ヲ宥恕ストアルヲ適用スヘキモノナルニ原裁判所ハ之ヲ酌量減輕ノ情狀アルモノトシ刑法第二百九十四條同第八十一條同第八十九條同第九十條ニノミ照依シ處斷シタルハ擬律錯誤ノ裁判ナリト判定ス因テ治罪法第四百二十九條ニ依リ之カ全部ヲ破毀シ直チニ裁判スル左ノ如シ

渡邊辰次郎

原裁判言渡ニ掲ケタル事實ノ理由及ヒ証憑ニ照シ特別ニ宥恕スヘキ

殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪

故殺ノ罪ヲ犯シ其犯時齡二十歳ニ滿タサルコト明白ナリ即チ此ノ事實ヲ罰スル法律ハ

刑法第二百九十四條故意ヲ以テ人ヲ殺シタル者ハ故殺ノ罪ト爲シ無期徒刑ニ處ス而シテ宥恕スヘキ事實アルニ因リ同第三百九條及ヒ同第三百十三條ニ依リ本刑ニ三等ヲ減シ輕懲役ニ該ル犯時齡二十歳ニ滿タサルヲ以テ同第八十一條ニ依リ輕懲役ヨリ一等ヲ減シ同第六十九條ニ照シ二年以上五年以下ノ重禁錮トナル仍ホ原諒スヘキ情狀アルヲ以テ同第八十九條同第九十條ニ依リ又二等ヲ減シ一年以上二年六月以下ノ重禁錮ニ相當ス

以上ノ理由ナルヲ以テ被告渡邊辰次郎チ一年ノ重禁錮ニ處スル者也但犯罪ノ用ニ供シタル刀ハ刑法第四十四條ニ依リ所有主ニ還付スル爲訴訟費用ハ同第四十五條ニ依リ其全部ヲ被告辰次郎ニ科ス大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年九月五日

裁判長判事 伴 正 臣 專任判事 鳥 居 巖 三

判事 薄 井 龍 之 判事 昌 谷 千 里

判事 小 村 壽 太 郎 書記 香 田 龍 興

○過失殺傷ノ罪

〔要領〕(一)刑法第三百十七條ヲ適用センニハ必ズ其所爲ノ法律ニ於テ罰ス可キ過失ニ出タルモノナルヤ否ヤ其理由ヲ明示セサル可カラズ何トナレハ若シ法律ニ於テ罰ス可キ過失ノ所爲ナキニ於テハ誤テ人ヲ殺傷スルモ法律ノ問フ所ニアラサレハナリ

(二)過失殺傷ノ如キ無意犯ノ場合ニ於テ偶然殺傷ノ用ト爲リタル器物ハ刑法第四十三條ニ所謂犯罪ノ用ニ供シタル物件ナリトシテ之ヲ沒收スルヲ得ス

殺傷ニ關スル宥恕及ヒ不論罪 過失殺傷ノ罪

(三)罪ヲ犯シ被害者ニ確知セラレタル後官ニ自守スルモ其効ナシト雖モ被害者ニ於テ何人ノ所爲タルコトヲ覺知セシトノ確証ナキ以上ハ假令被害者ノ親屬ニ於テ之ヲ確認シタルモ自首減輕ヲ與フルノ障礙トナルコトナシ

住所身分職業畧之

森川小八

年齢畧之

過失殺被告事件ニ付明治十五年十一月二十九日山田輕罪裁判所カ刑法第三百十七條ニ依リ仍ホ同法第八十五條及第八十九條第九十條ニ照シ通ノ本刑ニ三等ヲ減シ罰金七圓ニ處シ其犯罪ノ用ニ供シタル銃砲一挺ハ官ニ沒收スト言渡シタル裁判ニ對シ原檢事補柏田諫見ハ上告ヲ爲シタリ其要領ハ第一過失殺傷ノ罪ヲ斷スルヤ必ス其過失ノ方法如何ヲ審究セサルヘカラス何トナレハ若シ法律上罰スヘキ過失ノ所

爲ナキニ於テハ誤テ人ヲ殺傷スルモ收テ法律ノ問フ所ニ非サレハナリ然ルニ原裁判所ニ於テ被告カ所爲ハ如何ナル過失ニ出テタルヤ其理由ヲ明示セサルノミナラス犯罪ノ用ニ供シタル銃砲ヲ沒收セシハ何等ノ法律ニ依ルモノナルカ其正條ヲ掲ケサリシハ乃チ治罪法第三百四條ニ違背セル不法ノ裁判ナリ第二刑法第八十五條ノ發覺トハ官ニ發覺セシ場合ヲ云フノミナラス被害者ニ於テ犯人ノ誰タルヲ確認セシ場合モ同一ニ論スヘキモノニシテ本案ノ如キ被害者及其親屬等ニ於テ確知セラレタル後官ニ自首スルモ其効ナキコトハ固ヨリ言テ俟サルナリ然ルニ原裁判所カ自首減輕ヲ與ヘタルハ擬律ノ錯誤ナリト云フニ在リ仍テ本院ニ於テ治罪法第四百二十五條ノ定式ヲ履行シ之ヲ判決スルコト左ノ如シ

刑法第三百十七條ニ疎虞懈怠又ハ規則慣習ヲ遵守セス過失ニ因テ人ヲ殺シタル者ニ云々ト在リ抑モ本條ハ罪ヲ犯ス意ナキノ所爲ヲ罰スル

法律ニシテ其所爲ノ注意ヲ用ヒ又ハ規則慣習ヲ遵守スルニ因テ避ク
 ルヲ得ヘキ結果ヲ生シタル場合ニ非サレハ之ヲ適用スルヲ得サル
 モノトス本案被告ニ對シ原裁判所カ言渡シタル判文ヲ閱スルニ〔前略〕
 神路山官林宇後口ニ越立シ猪鹿ヲ狩タリ其際一疋ノ鹿被告カ面前ヲ
 通過スルヲ狙ヒ一發ヲ放タル處誤テ蒲葛村平民中津鉄次郎妻キク〔テ
 傷ケ其傷疾ノ爲メ〕キクハ死去ナシタリ云々ト在リト雖其所爲ハ果
 法律ニ於テ罰スヘキ過失ニ出テタルモノナルヤ否ヤ其理由ノ明示ナキ
 ナ以テ之ヲ知ルニ由ナシ又沒收ノ言渡テ爲スニ當リ其正條ヲ掲ケサ
 ルヲ以テ果シテ刑法第四十三條ニ依リタルモノナルヤ否ヤハ得テ知
 ルヘカラスト雖モ若シ本條ヲ適用セシモノトセハ是擬律錯誤ノ甚シ
 キモノト謂ハサルヲ得ス何ントナレハ本條ノ所謂犯罪ノ用ニ供シタ
 ル物件トハ罪ヲ犯スノ目的ヲ以テ其成就ヲ容易ナラシメ又ハ其勢力
 ヲ加ヘンカ爲メ使用シタルモノ、謂ニシテ過失殺傷ノ如キ無意犯ノ

場合ニ於テ偶然其用トナリタル物件ヲ謂フニ非サレハナリ又罪ヲ犯
 シ被害者ニ確知セラレタル後官ニ自首スルモ其効ナキトハ原檢察官
 論旨ノ如クナレト本案被害者ハ創傷ヲ受ケ凡ソ三時間ヲ經過シテ絶
 命シタルモノニシテ何人ノ所爲タルヲ覺知セシトノ確証ナキ以上ハ
 被害者ノ親屬等ニ於テ之ヲ確認シタルモ自首減輕ヲ與フルノ障礙ト
 ナルコトナシ要スルニ原裁判ハ治罪法第四百十條第九項ノ場合ニ相當
 スル上告ノ原由アルモノトス因テ同法第四百二十八條ニ基キ之ヲ破
 毀シ被告事件ヲ名古屋輕罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムルモノ也
 大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十七年二月十二日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 小村壽太郎
 判事 石井忠恭 判事 土師經典
 判事 兵頭正慈 書記 笹本榮藏
 過失殺傷ノ罪

○猥褻姦淫重婚ノ罪

〔要領〕姦婦ト指稱スルモノ死去シタル場合ニ於テハ其共犯人即チ姦夫

ト思料スルモノノミニ對スル公訴ハ成立タサルモノトス

住所身分職業略之

福室芳太郎

年齢略之

右芳太郎カ被告事件ニ付明治十六年一月二十九日東京輕罪裁判所カ
犯姦ノ罪アリト認メ刑法第三百五十三條ニ依リ一年ノ重禁錮ニ處ス
ト言渡シタル裁判ニ服セス上告セリ其要領ハ被告芳太郎ニ於テハ未
ダ嘗テ有夫姦ノ罪ヲ犯シタルコアルニアラス然ルニ原裁判所ハ不適
當ノ証人ノ陳述ヲ採リ以テ有罪ナリトノ判定ヲ與ヘラレタルハ不法
ナリト云ヒ又本件ハ治罪法第九條第一項ニ因リ公訴ハ消滅シタル
モノナリ何ントナレハ姦婦ナリトセラレタル岸鍋太郎カ妻フサハ公

訴ノ起ラサル前其本夫鍋太郎ニ殺害セラレタルハナリ然ラハ即チフ
サハ一應ノ訊問モ受ケス且ツ辨護ヲモ爲サ、ル死者ニ對シ姦罪ヲ犯
セシモノトシ裁判ヲ與フ可ラサルモノナルニ原裁判ハ之カ公訴ヲ受
理シ被告芳太郎ニ刑ヲ言渡サレタルハ治罪法第四百十條第五ニ明記
アル如ク法律ニ違背シタル判定ナリト云ヒ又追伸書ヲ呈供シ上告趣旨
ヲ敷衍シ加フルニ原裁判言渡ハ當法廷ニ於テ自白スル當時ノ情況其
手續云々トノミ示サレタルハ事實理由ノ不備ナリト云ヒ仍ホ再三追
伸書ヲ差出スモ到底上告趣旨ヲ擴充スルニ外ナラス
對手人檢事補伊藤重保ハ上告趣旨ノ不當ナルヲ辨駁シ原裁判毫モ不
當ニアラスト答辨セリ

大審院ニ於テ專任判事鳥居斷三ノ報告ニ因リ上告代言人鳩山和夫ノ
辨明立會檢事林三介ノ意見ヲ聽キ之ヲ審按スルニ芳太郎カ被告事實
ナルヤ其姦婦ナリト指稱セラレタル鍋太郎カ妻フサハ本案起訴以前

猥褻姦淫重婚ノ罪

錦太郎カ殺害スル處ニテ一應ノ訊問ヲ受ケス且辨護ヲモ爲カ、ルヨ
 明瞭ナリ其一應ノ訊問ナク辨護ヲモ爲シ能ハサル死者ニ對シ犯姦ノ
 罪アリトノ汚名ヲ負ハシムル何ソ法理ノ聽スヘキ處ナランヤ然ラハ
 人妻姦ノ罪ヲ構造スヘキ基礎タル人妻タル者ハ何人タルヤ訊問セ
 シ上ニ非サレハ起訴者ノ共犯人ト思考セシ被告芳太郎ノミニ對スル
 公訴ノ成立得ヘキモノニアラサルコト理ノ最モ見易キ處ナルニ原裁判
 所ハ探テ以テ犯姦ノ罪アルモノト斷了セシハ所謂法律ニ背キ公訴ヲ
 受理シタルモノニテ治罪法第四百十條第五ニ該當スル上告ノ原由ア
 ル裁判ナリト判定ス前說明スル如ク既ニ破毀ノ原因ヲ具ヘタレハ他
 ノ上告趣意ニ付別ニ贅言セス
 以上ノ如クナルヲ以テ治罪法第四百二十九條ニ依リ原裁判ヲ破毀シ
 直ニ被告福室芳太郎ニ免訴ヲ言渡ス者也
 大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十七年三月廿六日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 鳥居斷三

判事 關義 臣 判事 昌谷千里

判事 薄井龍之 書記 石井忠敏

○証告及ヒ誹毀ノ罪

要領事實ノ認定ハ承審官ノ特權ニ屬シ越權其他不法ノ所爲アルニ非
 サレハ大審院ノ監査ヲ得可キモノニ非ス
 民事上成立タル証書ヲ詐取シタリトノ証告罪ヲ斷スルニ付キ其
 証書ノ有効無効ヲ取調フルコト必要ナル場合ニ民事上ノ證據ニ依
 ラスシテ一ニ心証ノミニ基キテ其証書ヲ無効トシタルモ越權ノ
 處分ト爲スヲ得ス

住所身分職業畧之

山中 藤吉

猥褻姦淫重婚ノ罪 証告及ヒ誹毀ノ罪

右藤吉カ被告事件ニ對シ明治十五年三月廿四日神戶輕罪裁判所ニ於テ檢察官ノ陳述被告人ノ供白証據書類豫審調書等ニ依リ被告藤吉ハ先キニ石本彌助ニ賣渡シタル田畑三反六畝六步ヲ明治十一年十月中父太郎右工門俱々承諾ノ上姉婿ナル西畑吉介カ買取ル際右彌介ヨリ曾テ太郎右工門ニ宛テ該田畑ノ賣戻ノ約定証書ハ彌介ニ返還シ置キ明治十三年三月中杉岡淳志ニ頼ミ該賣戻ノ証書ヲ彌介ヨリ借用シ尙ホ淳志ニ依頼シ該田畑買戻シノ一件仲裁ヲ爲シ貫ヒ居テ處明治十四年一月彌介ノ代人ナル橋本廣太郎カ該証書ノ返戻ヲ淳志ニ促シタル末同人ニ於テ木村專一ノ手ヲ經テ返還シタルモノナルニ明治十五年一月七日右彌介廣太郎ノ兩名ニテ該証書ヲ專一ヨリ欺取リタルモノナリト告訴シタル右兩名ヲ誣告シタルモノト判定シ刑法第三百五十五條第二百二十條第二項ニ依リ重禁錮八月ニ處シ罰金十圓

ヲ附加シ更ニ刑法第四十五條治罪法第三十七條ニ依リ公訴裁判費用一圓四拾錢ヲ納完スヘキノ言渡ヲ爲シタリ

右裁判ヲ不當ナリトシ被告藤吉カ上告ノ趣意書ハ其第一條ニ明治十年一月中田畑六反壹畝十九步ヲ彌介ニ賣預ケニ爲シタルコト云ヒ其第二條ニ明治十一年十月中該田畑ヲ姉婿吉介カ買取ルコトハ承知セザルトノコト云ヒ其第三條ニ該証書ハ容易ニ他人ニ示シタルコトモナキ程ニテ彌介ニ返シタルコトナケレハ又々借用スヘキノ答ナキニ其詐取セシ犯罪人等ノ片言ノミヲ信シ判決セラレタルハ殘念ナリト云フ云フニ而シテ右三條ノ如ク自分ノ告訴ハ實事ナルニ誣告ナリト言渡サレタルハ不當ナリト云フニ在リ檢事補三俣秀彦カ答辨ノ旨趣ハ該上告ハ事實上ノミニ係リ治罪法第四百十條ニ定メタル上告ヲ爲スノ場合ニ適合セサルニ付別ニ本按ノ辨論ヲ要セズト云フニ在リ本院檢事堀田正忠ニ於テハ原裁判所檢察官ノ答辨ノ如ク被告ノ上告ハ相立タズ

誣告及ヒ誹毀ノ罪

ルトノ意見ヲ述ヘ而シテ更ニ附帶ノ上告ヲ爲シタリ其旨趣ハ抑モ本
 件ハ純然タル民事犯ニテナルモ六ニ民事ニ關係スルモノナリ即チ
 被告人ハ其實石本彌介〔第一ノ〕ヨリ西畑吉介〔第二ノ〕ニ田畑ヲ賣渡ス
 ヲ承諾シ曾テ石本彌介ヨリ受取リタル買戻シ証書ノ無効トナリシニ
 因リ之ヲ彌介ニ返却セシモノトセハ或ハ誣告ノ罪アルヘシト雖モ其
 買戻証書ノ無効トナラス之ヲ彌介ニ返濟セシニアラサルハ唯ダ被
 告人ヨリ彌介ハ右証書ヲ欺取セリト告訴セシノミヲ以テ誣告ノ罪ア
 リト爲ルヲ得サルヘシ因テ本件ハ右証書ノ有効無効ヲ取調フルト最
 モ緊要ナリトス原裁判ハ其無効トスルノ事實ヲ掲ケタルモ此點ハ純
 粹ノ民事ナルハ其判定ハ裁判官ノ心証ノミニ放任スルヲ得ス故ニ其
 言渡書ニ掲載スル證據書類ヲ檢スルニ一モ該証ノ無効タルヲ証スル
 ニ足ルモノナシ然ルニ原裁判所ニ於テ直ニ右証書ハ無効ナリ被告人
 ハ彌介ニ返却シナカラ同人ニ於テ之ヲ詐取セリト告訴シタリト判決

セ
 シハ越權ノ處分ニ屬スルヲ以テ破毀ノ上他ノ裁判所ニ移スヲ企
 望スト

因テ之ヲ審按スルニ被告藤吉カ上告ノ旨趣ハ單ニ自己ノ告訴ハ實事
 ナリト云フニ在リテ果シテ實事タルノ証憑毫モ無之ノミナラス其事
 實ノ認定ハ承審官即チ原裁判所ノ特權ニ屬シ越權其他不法ノ所爲ア
 ルニ非サルヨリハ本院ニ於テ之ヲ監査シ得ヘキモノニアラサルヲ以
 テ右上告ハ相立タサルモノトス將又附帶上告ノ旨趣ハ該証効力ノ有
 無ハ純粹ナル民事ナルハ民法ノ證據ニ依リ之ヲ斷定ス可キニ刑法ノ
 證據即チ裁判官ノ心証ヲ以テシタルハ越權ナリト云フニ外ナラス然
 ルニ該証書成立ノ一邊ヨリ之ヲ見レハ人民相互ノ私約ニシテ其民事
 ノ性質ナルヲ論テ俟タスト雖モ本按ノ場合ニ在テハ被告ノ所爲ニ付
 共犯罪組織ノ成否如何ヲ審究スルノ用ニシテ即チ事實ノ基礎ヲ定ムル
 証憑ノ一部ナレハ治罪法第四百十六條第二項ニ依リ裁判官ノ判定ニ

任スルモノナリ決テ越權處分ト爲テ可キモノニ非サレタリ因テ治
罪法第四百二十七條ヲ依テ上告ノ理由ナリキモイテ該止告ノ之ヲ棄
却スルモノナリ

大審院於テ檢事堀田正忠立會宣告ス
明治十六年一月十九日

裁判長判事 岡内重俊 專任判事 木付 巖手路

判事 大塚正男 判事 兵頭正徳

書記 若ノ田クニ鍊

要領趣旨ノ罪ヲ成立ス可キハ告訴ヲ趣問ナリ

然ルニ其必要ノ事實ヲ明示セズ

裁判官ニ上告ノ理由アリ

住所身分職業畧之

下城藤九郎

誣告犯罪被告事件ニ付明治十五年十月十八日山鹿治安裁判所ニ開キ

タル熊本輕罪裁判所於テ有被告入ノ所爲ハ橋本作七ニ對シ不實ノ
事ヲ以テ輕罪ニ陷ラセメテ誣告シタル者ト認メ刑法第三百五十五條同

第二百二十條第三項ニ照シ情狀ヲ原諒シ刑法第八十九條同第九十條
ニ依リ本刑ニ二等ヲ減シ重禁錮三月罰金貳圓ニ處斷セシ裁判ニ對シ

被告下城藤九郎ハ上告ヲ爲シタル其趣旨ハ要領ニ被告入ノ無筆ナル
ニ付橋本作七ニ係ル訴狀ニ代書人ニ依賴シ代書セシメ山鹿警察署ニ

差出シタルニ其趣旨不分明ナルヲ發見シ該署ニ却下願ヲ爲シタル
然ルニ之ヲ採用セシメ公訴ニ及ハシ竟ニ本刑ノ言渡ヲ受ケタルハ

不服ナリト謂フニ在リ

對手ハ檢察官警部補伊藤庫太郎ハ被告入ノ上告趣旨ヲ不備ナル旨
論述シ原裁判ニ相償ナリ

誣告及ヒ誹毀ノ罪

大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ依リ檢事林三介ノ意見ヲ聽クニ本件ハ事實ノ判定ニ對シ爲シタル上告ニ付其理由不相立旨ヲ辨明セリ仍テ判決スルヲ左ノ如シ

原裁判言渡書ヲ閱スルニ被告人ノ所爲ハ橋本作七ニ對シ不實ノ事ヲ以テ輕罪ニ陷ラシメント認告シタルヲ明白ナリト云フニ止リテ被告人ハ作七ヲ何ナル罪ニ誣タル歟之ヲ知ルニ由ナキノミナラス試ニ被告人カ山鹿警察署ニ差出シタル告訴ト題スル書面ヲ閱スルニ馬賣買ノ事ヨリ差違ヲ生シ固ヨリ同村ノ儀ニ付願クハ示談ヲ遂クセント心得居タル内橋本作七カ告訴ニ及ヒタリト聞キ如何ナル姦訴ニ及ヒタルヤ不安着ニ付告訴スト言フノ趣旨ニ止リ其罪ヲ鳴ラシテ認告シタルノ言詞アルヲ見ス抑誣告ノ罪ノ成立スヘキハ告訴ノ認問タルヲ審究スルヲ最モ必用ナリトス凡誣問ト看做スヘキ二個ノ原因アリ第一其事ノ詐僞ナルヲ第二惡意ヲ以テ爲シタルト是ナリ他人ノ告訴アル

ヲ聞キ自己ノ利益ノ爲メ事實ヲ彌縫シテ之カ陳述ヲ爲スハ人ノ常情ニシテ罪ノ性質ヲ有セサルナリ原裁判官ハ是等必用ノ事實ヲ明示セス輒シ刑法第三百五十五條同第二百二十條第二項ヲ適用シタルハ治罪法第四百四十條第九項及ヒ第十一項ニ相當スル上告ノ原由アル者トス依テ治罪法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ更ニ福岡輕罪裁判所ニ移シ審理セシムル者也

大審院ニ於テ檢事林三介立會宣告ス

明治十六年八月二十七日

裁判長判事 西岡 逾明 專任判事 山根 秀介
判事 大塚 正男 判事 中島 盛有
判事 高木 勤

(要領)新聞紙廣告欄内ニ於テ自家ノ製藥ノ有効良藥ナルヲ喋々シ他ノ製藥ハ無効有害ナリト誹リタルモ未ダ惡事醜行ト目ス可キ人

誣告及ヒ誹毀ノ罪

ノ行爲ヲ指摘シタルニ非サレハ刑法第三百五十八條ノ支配ス可
キ誹毀ノ犯罪ト爲スヲ得ス

住所身分職業畧之

西崎榮助

年齢畧之

明治十五年九月二十五日京都輕罪裁判所ニ於テ右榮助カ誹毀罪ノ被
告事件ヲ審理シ刑法第三百五十八條ニ依リ重禁錮一月ニ處シ罰金十
圓ヲ附加スト旨渡シタル裁判ニ對シ右榮助ハ上告セリ其趣意ハ上告
人カ新聞紙上ニ廣告シタルハ我カ營業ヲ傷ケ名譽ヲ害スル者アルヲ
以テ不得已之ヲ防クノ所爲ニ出テ故ラニ他ノ惡事醜行杯公布シタル
モノニアラサレハ刑法ノ問フヘキ所爲ニアラズト云フニアリ大審院
ニ於テ檢事加納久宣ノ意見ヲ聽クニ被告カ新聞紙ニ公布セシ文章中
〔其名ハ勿論云々〕リ害アルノ云々トノ數句ハ則藥劑其物ニ對シテ

無効有害ナルヲ記載シタル者ナレハ或ハ世ノ信用ヲ失ハシメ爲メ
ニ營業者ヲシテ損害ヲ蒙ラシムヘキアルモ畢竟民事上要償ノ請求ヲ
受ルニ止リ直チニ營業者其人ノ惡事ト醜行ヲ摘發公布シタルノ罪ア
リト爲シ可ラス然ラハ被告カ誹毀罪ヲ構成シタル原素ハ蓋シ其前文
ニ〔何某トノハ我原舖大坂衛生堂ノ胃散等ヲ摸ヲ製ヘ云々〕ノ一句較妥
當ナラサルモ亦人ヲ誹毀シタルノ罪アリト爲ス可カラズ然ルニ有罪
ノ判定ナク下シタルハ擬律ノ誤リタル裁判ナリト思考スルヲ以テ直チ
ニ無罪放免ノ言渡アラント望ムト陳述セリ依リテ原裁判言渡書
ヲ監査スルニ被告人カ新聞紙ニ掲ケタル文章中其如何ナル點ヲ指シ
テ森中菊ヲ誹毀シタルモノト認視シタルヤ分明ナラス訴訟書類ニ就
キ該新聞紙廣告欄内豫メ摸製胃散ノ害ヲ防クト題シタル文章ヲ閱ス
ルニ自家ノ製劑ノ有効良藥ナルヲ喋々シ而シテ他ノ賣藥ヲ摸製ニシ
テ無効有害ナリト謗リタル文辭ニハ相違ナキモ之ヲ以テ直チニ刑法

誣告及ヒ誹毀ノ罪

第三百五十八條ノ支配スヘキ誹毀ノ犯罪ト爲スヲ得ス何トナレハ其
文詞中該犯罪ヲ構造スヘキ要件即チ惡事若クハ醜行ト目スヘキ人ノ
行爲ヲ指摘シアラサレハナリ故ニ被告事件ハ之ヲ罰スヘキ正條ナキ
ニ依リ無罪ノ言渡ヲ爲スヘキモノナルニ之ニ刑法第三百五十八條ヲ適
施シタルハ法律ヲ誤用セシ不法ノ裁判ナリト判定ス因テ原裁判ヲ破
毀シ治罪法第四百二十九條ニ從ヒ本院ニ於テ直チニ裁判言渡ヲ爲ス
コ左ノ如シ

西崎榮助

前ニ辨明シタル事實及ヒ法律ノ理由ヲ以テ本件被告人ハ無罪且放免
スル者也

大審院ニ於テ檢事加納久宣立會宣告ス

明治十六年十一月二十八日

裁判長判事 大塚正男 專任判事 高木勳

判事 山根秀介 判事 昌谷千里

判事 小村壽太郎 書記 石田鞆郎

○祖父母父母ニ對スル罪

〔要領〕共犯者タルノ事實ヲ明示セズ且犯罪ノ日時及ヒ其方法等ヲ示サ
ズハ治罪法第三百四條ニ違背セル不法ノ裁判ナリトス

住所身分職業畧之

光末常吉

年齢畧之

右常吉カ被告事件ニ付明治十六年三月七日廣島重罪裁判所ニ於テ被
告ハ妻キヌノ相談ヲ受テ養父仁兵衛ヲ毒殺セシ者ト認定シ右所爲ハ
謀殺ノ罪トナシ刑法第三百六十二條ニ依リ死刑ニ處スト言渡シタル
裁判ヲ對シ常吉ハ上告ヲ爲シテリ 其要旨ハ裁判言渡書ニ被告常吉
ハ妻キヌカ其父仁兵衛ヲ毒殺セントノ相談ヲ受テ明治十五年舊四月
誣告及ヒ誹毀ノ罪 祖父母父母ニ對スル罪

廿五六日頃妻キヌカ差圖ニ從ヒ鼠取藥買取ノ催促ニ行キ其後遂ニ仁兵衛ヲ毒殺セシモノト認定スト耳アリテ事實及ヒ法律ノ理由ヲ付セサルノミナラス何レノ証憑ニ依據シ何レノ事實ヲ信認セラレタル者ナルヤ知ル能ハス又(キヌ)ヨリ毒殺ノ相談受ケシコハ勿論毒藥買取ノ催促ニ行キタルコアルナシ毫モ犯罪ノ所爲アルニ非ラサレハ無罪ナリトノコト假ニ一步ヲ讓リ「キヌ」ヨリ毒殺ノ相談受ケ又其差圖ニ從ヒ毒藥買取ノ催促ニ行キタルコアリトシテ論スルモ豫備ノ所爲ヲ以テ犯罪ヲ幫助シタル從犯タルニ過キスト云フニアリ原裁判所檢事加納謙荅辨ノ要領ハ被告ハ(キヌ)カ犯罪ニ同意連合シ豫備ノ目的ヲ達シタルモノナレハ法律上下手スルト否トチ區別セス一個ノ犯人ト見做シ同一ノ刑ニ處スルハ素ヨリ至當ナリ故ニ原裁判ハ其當ヲ得タルモノニシテ上告ノ理由ナキモノト云フニ在リ大審院ニ於テ專任判事ノ報告ニ據リ代言人浦田治平カ被告常吉上告趣意ノ辨明ト立會檢事池上三

郎ノ意見トチ聽キ之ヲ判決スルコト左ノ如シ
 裁判官渡書前段ニ被告常吉ハ妻キヌカ其父仁兵衛ヲ毒殺セントノ相談ヲ受ケ云々トアルニ依レハ(キヌ)カ犯罪ヲ幫助シタル從犯者ノ如ク見ユレハ後段ニ遂ニ仁兵衛ヲ毒殺セシモノト認定スト而已アリテ其犯者タルノ事實ヲ明示セス且ツ仁兵衛ヲ毒殺セシハ何日ナルヤ其日ヲ掲ケス又毒藥施用ノ模様等事實ノ理由ヲ示サ、リシハ治罪法第三百四條ニ違背セル不法ノ裁判ナルヲ以テ之ヲ審明シタル上ニアラサレハ果シテ共犯ナルヤ將タ從犯ナルヤ否未タ以テ刑ノ當否ヲ鑑別スルニ由ナキモノトス因テ同法第四百二十八條ニ從ヒ原裁判ヲ破毀シ岡山重罪裁判所ニ移シ更ニ審判セシムルモノ也

大審院ニ於テ檢事池上三郎立會宣告ス

裁判長判事 土師 經典 專任判事 石井 忠 恭

判事 高木 勤 判事 黒岩 直 方

祖父母父母ニ對スル罪